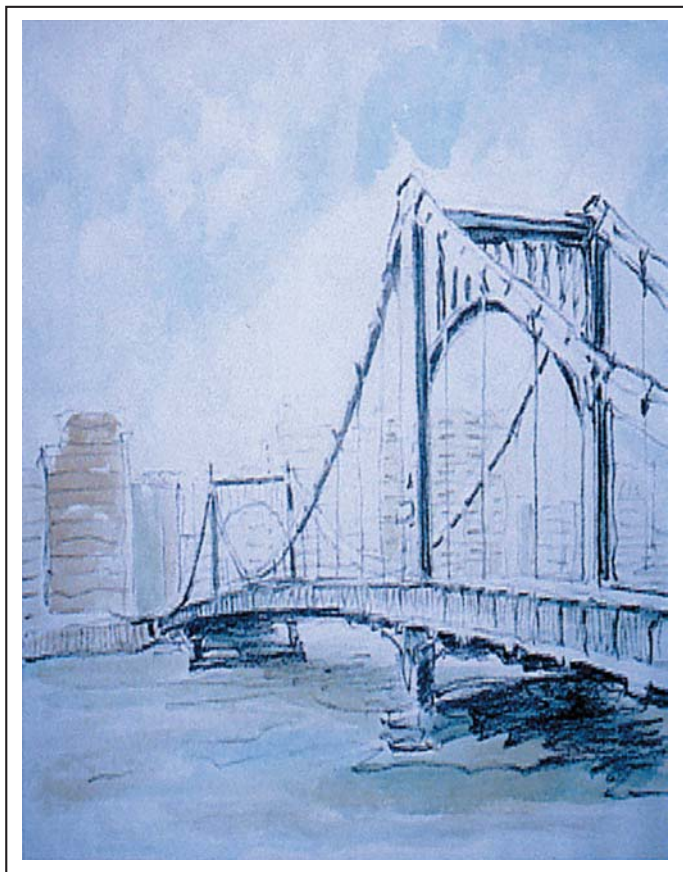


悠 遊 第十号



企業OBペンクラブ

悠

遊

第十号

平成十五年三月十九日

表紙の絵 清洲橋

清洲橋は隅田川河口より数えて六番目（勝鬨橋、佃大橋、中央大橋、永代橋、隅田川大橋、清洲橋の順）の橋で、一九二八年（昭和三年）竣工、橋長一六八・二メートル、中央区と江東区をむすんでいる。竣工当時、公募して名前を決めた。深川の清澄町と日本橋の中洲町をつなぐことがこの名の由来である。

当時世界的美橋といわれたドイツ・ライン川のケルンの吊り橋（第二次世界大戦で崩壊）をモデルにして作られた。自定式吊り橋で、通常の吊り橋では橋をつつているケーブルの両端をアンカーで止めるが、アンカーを持たず、桁自体を定着させる構造になっている。

設計は復興局橋梁課の鈴木清一、原案は永代橋の原案も作った同課の課長田中豊によっている。震災後隅田川に架けられた橋のなかで一番建設費のかかった橋で当時の金額で三二一・三万円（現在換算四〇億円以上）を要した。海軍で研究していた高張力鋼をケーブルに用いケーブル断面積を小さくして、橋全体をほっそり見せている。このスマートさを強調しようと、橋の高さを実際よりも高く描いてみた。

（杉山修一記）

企業OBペンクラブ同人誌	
「悠遊」第十号	
二〇〇三年三月十九日発行	
編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会	代表 北田 純一
印刷所 毎日整備産業株式会社	
東京都千代田区一ツ橋二一一	TEL 〇三―三二一六―五四八九
連絡先 企業OBペンクラブ事務局 中村 爽	
茅ヶ崎市高田三二二二一（〒二五三・〇〇〇二）	TEL 〇四六七―五四―八四〇九
口座 みずほ銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ	
(普通) 1633830	

頒価 一、〇〇〇円

企業OBペンクラブ同人誌

《第十号》

目次

Ⅱ特集・ここがおかしいⅡ

◇不治の病に苦しむ子供たちの臓器移植……	中洲 靖雄	6
◇音のない世界で……	古川さちお	8
◇マナー違反には厳罰を！……	岩崎洋一郎	10
◇人の道……	大泉 潤	12
◇ブランドものの礼賛……	多田 修	14
◇甘い！甘い！現金強盗対策……	今川 確郎	16
◇ゆとり教育と中学英語の将来……	関谷 裕彦	18
◇人間という動物……	都甲 昌利	20
◇「説明責任」という言葉……	上原 利夫	22
◇日本の自動車行政……	松谷 隆	24
◇人間の顔をした産業社会を……	中村 將陸	26
◇アダム・スミスの呪縛……	大野 晃	28
◇米百俵の曲がり角……	北田 純一	30

Ⅱ自由テーマⅡ

◇二〇〇三年日本は？……	新井 進	32
◇原子力利用よりもエネルギー構造改革を！……	森田 茂	34
◇改革なくして成長ありき……	中川路 明	36
◇すべてがおかしい……	杉浦 右蔵	38
◇丸投げ論争……	岸本 義生	40
◇アメリカの植民地・日本……	藤岡 豊	42
◇「日本丸」よ、どこに行く……	松浦 武弘	44
◇野蠻に抱かれて……	吉井米三郎	46
◇核不拡散条約とデフレ対策……	村田孝四郎	48
◇神の国の恐竜たち……	西島 力	50
◇人口減はマイナスだけか……	刀祿館正久	52
◇朝鮮から来た少年たち……	石川 正達	54
◇私の発見……やはり生は長命が好い……	榎本喜三郎	58
◇老いのつれづれ草……	野村 嘉彦	60

◇回想の散策で生きる……………	芦刈 克	62
◇「魏志倭人伝」人名・職名考(上)……………	山辺 武麿	64
◇古代史論―ヤマトイ国は存在しなかった―……………	斉藤 勁	66
◇中国・蘭洲二〇〇二年……………	吉寄 清巳	68
◇国境の生活、そしてアメリカ……………	安藤 晃二	70
◇旅を創る……………	西川 武彦	72
◇認識台湾……………	今村 亮	74
◇ゴルドントライアングルと罌粟の花……………	大塚 滋	76
◇第九交響曲〈合唱つき〉……………	金京 法一	78
◇石垣山一夜城……………	遠藤 俊也	80
◇まだだよ……………	木下 洋介	82
◇二人で一人前の出前……………	アブドルカーダー・栄子	84
◇丸ビルと私……………	中村 爽	86
◇寮歌祭に集う……………	黒崎 昭二	88
◇二〇〇二年を振り返って……………	三宅 劬	90
◇スマトラ横断鉄道とオランダ捕虜……………	玉山 和夫	92
◇亡友 西大條泰君を悼む……………	水谷 汎	94

◇九人で漕いだレース―漕友故蓮沼淇迪君を悼む―……………	高橋 孝蔵	96
◇K先輩の計報に接し……………	杉山 修一	98
◇お年よりのための童話「蜘蛛の糸」……………	新山章一郎	100
◇断想 宇宙の認識と生命観について……………	岡 政昭	102
◇日本人の宗教……………	折戸 常司	104
◇西方浄土は遠くなりにつけり……………	小島 博志	106
◇ペン俳句の一年、その佳句鑑賞……………	平間真木子	108
◇吉葉芳彦氏を偲ぶ……………	森田 茂	112
◇企業OBペンクラブのあゆみ(年表・年史)……………	中村 爽	114
◇執筆者名簿……………		121
◇編集後記、事務局から……………		123
表紙の絵 カット 杉山 修一		

特集・ここがおかしい



早稲田大学演劇博物館

不治の病に苦しむ子供たちの臓器移植

中 洲 靖 雄

平成十三年の暮れも近づいた十一月初旬、通学中の阪神シニアカレッジ（四年制）の同級生I氏のたった一人のお孫さんが不治の心臓病を患い、もはや心臓移植しか救う道はないという深刻な状況にあるとの情報を耳にした。当時、学級委員長の立場にあった私は、詳しい事情を聞くほどに、人情的にも立場上からも、何らかのお役に立たねばならぬと意を決したのは当然のことだった。

お孫さん「萌ちゃん」は、二歳六カ月の幼くて可愛いお嬢ちゃんである。が、その萌ちゃんは、生後四カ月にして不治の病に冒されてしまったのだ。「拡張型心筋症」という心臓の細胞が壊れ、収縮する力を失うという難病である。救う道はたった一つ、心臓移植しかない。

以来、萌ちゃんは幾たびか救急車で病院に運び込まれ、いつ何時、事態の急変が起こるかも知れぬという可哀そうな運命を背負ってしまった。しかも心臓移植しか助け

られる方法がないというのに、日本国内では法律の壁（十五歳以下の臓器移植は認められない）で、移植手術が受けられないという不運に泣いていたのである。

しかもそんな萌ちゃんが、手術可能な米国で移植を受けるにしても、手術に関わる一切の費用は、最低限八千万円の巨額に達するという。もちろんそんな莫大な費用の調達は生易しいものではない。あれやこれやで祖父のI氏は思い悩んでいた。

このことを知った善意の知人たちの四十八名が「萌ちゃんを救う会」を結成し、平成十四年初頭から募金活動を立ち上げようとして準備に着手した。時を同じくして私たちも阪神シニアカレッジの学校当局に協力を要請、兵庫県下の他の姉妹校にもその輪を広げ、協力を呼びかける運動に立ち上がった。

また、TV、新聞等のマスコミもこの運動を大きく報道してくれたことから、並大抵では集められないであろうと予想された巨額の募金も、徐々に積み重なって、募金を締め切った三月末の時点では、善意の総額は約一億二千万円に達したのである。

やがて萌ちゃんは四月に渡米、間もなくロサンゼルス
の病院で移植手術を受け、順調な経過を経て十一月五日、
両親とともに元気な姿で無事帰国してきた。

こうしたことから我が国における臓器移植に重大な関
心を持つようになった。特に十五歳以下の子供たちの移
植手術がなぜ法的な壁で認められないのか。米国などの
諸外国で認められ、外国人にまで移植手術を施している
この現実の姿を見ると、「なぜ？おかしいのではない
か」と思わざるを得なくなったのである。

もちろん、医学的には危険度が大きいとか、技術的に
問題点が多いとかの理由が多数存在しているというのが
その大きな原因なのである。が、しかし、みすみす不
治の病に呻吟する多くの子供たちが、なんで多額の費用
を調達し、海を渡って手術を受けに行かなければならな
いのであろうか……、と首を傾げざるを得ない。

もともと、我が国の臓器移植は成人といえども法的に
許されるようになってからまだ日は浅い。世界の先進国
の中でも最も遅れてスタートしたばかりである。それで
も移植を受けた患者が徐々に増えつつあるこの時代に、

十五歳未満の患者には法の壁で手術を受けられないとい
うのは何故なのだろう、おかしいのではないか。

臓器移植にはドナーとなる臓器の提供者が必要であ
る。ドナーは、生前から臓器提供の意思表示をカードな
どで明示した者でなければならぬようだが、確か遺族の
承諾があればカードがなくても可能なはずと記憶してい
る。現実問題として、十五歳以下の子供からドナーとな
ることへの意思表示を、生前から得ることは不可能であ
ろう。それは親権者の承諾さえあればよいのではないだ
ろうか。この問題、米国などではどういう判断のもとに
臓器移植がなされているのか知りたいものだ。

萌ちゃんの移植手術以降、多くの日本の幼い子供たち
が移植手術を受けるために多額の費用を募金等で募り、
苦労を重ねて渡米している報道を数多く耳にし、また見
てもいる。こうした事実を前に、冷ややかな日本国内の
対応には「おかしいではないか」と思えてならない。彼
我の倫理観の相違からくるものなのだろうか、割り切れ
ないものを感じるこのごろである。

音のない世界で

古川 さちお

大林恵美は四十歳、耳の聞こえない主婦である。

健聴の二児を育てながら普通に会話し、社会活動でも言葉に不自由はないように見える。しかし聴力九〇デシベル強の重度難聴は「不自由生活」の連続だ。

幼児言葉を覚えはじめた直後のある時期から、一切の「音」を聞き分けられなくなった。一歳半のとき、東大病院鳥山博士の出した診断結果は「後天的感音性重度難聴」だった。続いての説明では「幼児に抗生物質を使ったことではないはずだから、原因は風邪で高熱を出した際のショックで聴覚神経が侵されたものと思われる。手術を含め、いかなる治療を試みても、治ったケースは世界中にない」という。

父親の隼人、母親の陽子、ともに一瞬世の中が真っ暗になったような衝撃を覚えたが、嘆き悲しんでいる余裕はない。一刻も早くやるべきことがあった。市川国府台

にある教育大（現筑波大）医学部聴能研究室での教育相談、市川市への転居、難関のテストを経て大学付属聾学校幼稚部への入学と続く。

その後の幼稚部三年間、園児七名の母親たちの忍耐と努力、神と見まがうような金井千代子先生と愛甲剛先生の教育・指導は血のにじむようなものだった。全員が手話を一切使わず、口話で健常者と会話ができるようになった。恵美は聾学校三年生で、近所の公立小学校への転校が許された。五年生を終えて、父親の転勤でパリ日本人学校へ移り国際感覚も身に付ける。

帰国後は、公立中学から県立高校を経て、早稲田大学第一文学部に入る。大学入試では、ちよつとしたトラブルで、珍しく恵美が涙を流して泣いたことがある。

結果を先に言くと、二つの学部合格したが、願書提出時、一方の学部事務員に「聾啞者の願書は受け付けられない」と言われたのだ。後にその上司から「差別などないから願書提出あれ」と電話があったが、何とも情けない思いだったと、恵美は回想する。

大学では、得意の頑張りで耳のハンディを思わせない

学業成果を挙げたが、傍らで健聴者とともに「手話」を学んだ。卒業式では、学長と交渉し、早稲田大学創立以来はじめての手話通訳導入を実現させたものだ。

卒業後大銀行に就職、一般職として数年間働いた後結婚。夫の留学で米国に同行の間に長女を出産した。その後の恵美は、薄給の政府系研究所で働く夫を支えつつ、二人の娘を育てている。身体障害の主婦として、国の福祉行政にも一応満足している。しかし困るのは、重度難聴者に働き口がないことである。

企業者の多くは障害者の高度な知識と能力を知らないで、雇用したがない。まれに雇っても健常者と同じ条件で、同じ仕事をさせることをしない。

聴覚障害者は視覚による情報取り込み能力が発達している。人の話は唇のみならず頬の筋肉だけでも理解するし、文を読むのが驚異的に速く記憶力もよい。恵美の場合は、車で通り過ぎた村の風景を翌日スケッチさせると、道端にあった樹木の本数まで正確に記憶している。

世の経営者たちよ、役所の人事担当よ、積極的に障害者の中から人材を掘り起こし、自らの会社や官公庁の質

を高めて欲しい。

最後に、恵美の父親隼人が娘と妻に最近語った「隠れたエピソード」を記すことにしよう。

幼い恵美が「聞こえない」と分かったとき、隼人はかかりつけだった立川の老いた小児科医を訪ねた。恵美のカルテを見せてもらったところ、乳幼児にもかかわらず、熱を下げるためにと相当量の抗生物質を与えているではないか。恵美の強度難聴は明らかにストマイによる薬害だった。隼人は一晩考え抜いた末、薬害の疑いを誰にも話さないことにした。「薬害を公に主張して、多くの手間と時間を割かねばならなかったら、ただでさえ多忙な商社マンとしての立場はどうなるのか。耳は元に戻せないのだ。抗議などに使う時間と手間があつたら恵美の聾教育に回すべきである」というのが父親としての結論であつた。

四十歳を迎えた恵美は話を聞いて深くうなずいた。「お父さんの結論は正しかった」と言う。父親はボロボロと涙を流した。

(文中の人名は仮名)

マナー違反には厳罰を！

岩崎 洋一郎

精妙な旋律が、澄み切った空間を駆け巡り、聴衆の心に沁み込む。幽玄な余韻が漂う中、作曲者でもあるピアニストは、おもむろに次に演奏する曲の曲想を語り始めた。と、ジャンジャンと、けたたましく携帯電話の着信音がコンサートホールに鳴り響いた。観客は一樣に凍てついてしまった。ピアニストも、びっくりした表情で黙ってしまった。もう三十秒早ければ演奏中にぶつかり、この日のコンサートはめっちゃめっちゃになるところであった。いや、曲と曲との間に起こっても、われわれの気分はずたずたにされた。

現在の日本ではこのような場合、罰則は無い。開演前に場内アナウンスで電源を切るよう「お願い」されていたにもかかわらず、それを無視した携帯保有者は謝罪もせず、そのまま見逃された。

マナーは、家庭の躾しつけの問題であり、法律等で律すべき

性格のものでないと言う人もいよう。正論である。本来はそうであるべきであると私も思う。しかし、現に当世のマナーの崩れは、目に余るものがある。例をあげれば、前述のコンサートや講演会および電車の中での携帯使用、優先席の不当占有、駅前の自転車の不法な駐輪、歩行中および禁煙席での喫煙等々、枚挙に暇が無い。

対策は、残念ながら厳罰しかない。今のイギリスは「紳士の国」といわれるが、それは十八世紀の厳罰主義が生み出したものである。産業革命等で村を追われた農民たちは大都会に流れ込み、ロンドンなどは強盗やスリなど犯罪の巢窟と化した。その有様は、マルクスの「資本論」や文豪ディケンズの名作「オリバー・トウィスト」に詳しい。

千代田区の歩行中の禁煙条例は、その厳罰主義の走りであろう。先のコンサートの例では、主催者側に対するだけでなく、聴衆の一人一人に対し、入場料の返還を違反者に課すべきであろう。かなりの金額になろうが、事前に回避できる手段があったにもかかわらず、本人が重

大な違反をしたのであるから仕方がない。

また、携帯電話の電源を切らず、または電話をかけながら車の運転をする人に対しては、これもまた未必の殺人未遂罪として、重い罰金とともに、即、免許停止と携帯の没収を課すべきであろう。「罰金を払えば、済むのでしよう」と現金を投げ捨てるようにして立ち去ろうとした歩行喫煙女性の姿がテレビで放映された。こんな輩には、メモリーにたくさんの友人の携帯番号が入っている携帯を没収しないと、骨身にこたえないのではないか。

電車のアナウンスも、よき時代の残像を引きずり、「携帯電話の使用は他の客の迷惑になるから、ご遠慮してください」としか言わない。これを聞いた乗客は、小声で話せばよいと錯覚して、使用をやめようとしなない。なぜ、車内で使用することがいけないかを明確に打ち出せないのだろうか。

「携帯の電源を切らないと、ペースメーカーをご使用の方に重大な支障をきたし、生死にかかわる事態になりかねませんので、使用は厳禁です」といふべきである。

それでも使用の傾向が減らない場合には、「不測の事態を招いた場合は、損害賠償のみならず、刑法が適用されます」と迫い討ちをかけるべきである。

そんなに遠くない、ほんの数十年前の日本は、世界でも有数の礼儀正しい国として内外に知られていた。こんな法的な規制をしなくとも、お互いに住みやすいように気配りしたものである。町を行く人は混んでくると、自然に肩を斜めにしてお互いに迷惑をかけないようにしたものである。今は、バッグなどが他人にぶつかろうが、平気で通り過ぎてゆく。バブルの崩壊とともに、マナーも崩壊したのであるか。この悲しい現実を直視して、大きな悲劇が起こらないうちに、有効な対策を立てるべきであると思う。

人の道

大 泉 潤

人の道がおかしい。このごろ街を歩いて人にぶつかりそうになることをしばしば経験する。こちらが一人で歩道を歩いて向こうから二、三人で歩いて来る。その二、三人は多くの場合横に広がって歩いて来る。すれ違う時に、当然少しはよけてくれると期待するが全くその気配が無い。こちらはロマンスグレイのお年寄り、向こうは身のこなしも軽やかな若者だから歩きながらの会話も楽しいだろうが、前を見ていれば一人ぐらいい歩下がってこちらの歩くスペースぐらい空けてくれるのではないかと甘い期待をする。一度浅草で雨の水溜りもあり、よけるによけられず真つすぐに歩いたら屈強の若者に肩がぶつかりひどい目に遭った。私の右肩は運動障害が原因の宿痼しゅくゑを持ち常に疼痛を抱えている。そこにまともに衝突を食らい久しく痛みが去らなかった。同時に心にも鋭いトラウマを生じたので、その後は道を歩く時は細心の

注意を払うようになった。

今回のテーマは良い機会なので自分なりに解明してみたい。

まず横に広がって歩く人を観察してみる。仕事に夢中のサラリーマンたちが声高に議論しながら歩いて来る。今日のお昼は何を食べようかと、おしゃべりに花が咲いている淑女連れ、お買い物談義に余念の無いおば様方、携帯片手にそぞろ歩きの女子校生、大きなバッグを担いだ部活帰りの高校生、休日の家族連れ、など書き出してみると多種多様であることが分かる。道の中央で立ち止まり歩いている人には無頓着で話に夢中の人もいる。

道を歩きにくくしているのはこれだけではない。廃棄物収集までの置き場とそれを狙うカラスの群れ、自転車・オートバイの駐輪、最近流行の弁当売り、チラシ、ティッシュ配りの人々などが狭い歩道を占有し一層狭くしている。

しかし、考えようによってはこれらすべて経済活動の

一端である。日本経済国内総生産約五百兆円を担う、あるいはこれから次代を担う人々の活動の一端であるということもできる。人口一億二千万人に平均すれば一人当たり年間約四百万円の経済活動の一部である。労働力人口七千万人とすれば一人当たり約七百万円である。

道を歩くことはすべて経済活動の一環であり、ベースであるともいえる。通学、出勤、訪問、買い物、旅行、集会、散歩、その他すべてが何らかの生産、消費、将来活動につながっている。

一方、我々リタイア族は生活の原資を自己資産の運用と年金で賄っている。年金がその中で大きなウェイトを占めている。その年金は自分の拠出したものは少なく、ほとんどは現役世代の拠出に依存する計算である。その人々の活動で日々の生活をエンジンに出来るわけである。最近では二人歩いてくれば千四百万円、三人歩いてくれば二千百万円の生産額と換算してしまう。

このように、少し見方を変えてみると、邪魔者が価値あるものに変化することに驚くことになる。道を歩く人たちがすべて多彩な生産・経済活動に携わっているかその

予備軍である。ビジネスの話をしながら歩く人たちは時間の節約になるし、昼食や化粧品品の品定めをしながら歩く女性は口コミを通じて品質向上・優勝劣敗に繋がる。群れて歩く高校生は未来の友情を育てている。

従ってその人々が道を闊歩するときはむしろ感謝の気持ちでどうぞと先に通す必要があるのではないかと思うようになった。故大平正芳首相は廊下の中央を歩かなかったそうである。国会の廊下が狭いとか、すれ違いに不自由とかの理由ではなく、常に考えることをしている、また謙虚な性格であったためだそう。

今回のテーマの「ここがおかしい」という視点で、道の歩き方がおかしいと考え、礼節を知る日本人ならもつと謙虚に、すれ違う相手を思いやり、譲り合うと私は思ってきた。いろいろ冷静に考えると何故歩きにくいかのわけが分かるように思う。おかしい行動にも、分析してみるとそれなりの必然性があるように思えてきた。

私はこれからは道ですれ違う際は、まずよけて特に現役の方々に対しては、尊敬の念と感謝の念をもって見送りたいと思っている。

ブランドものの礼賛

多田 修

表参道を散歩していると異様に感じるのは、欧米で有名になっているブランドものの店が氾濫はんらんしていることである。そのような街が丸の内でも銀座でも目に付く。日ごろ「失われた十年」とか、「銀行国有化」とか、刺激的な経済用語が新聞紙上に躍る国にしては、まさに異常である。

伝統的な経済学を「神頼みする」人たちは、人間は合理的な行動をとるものだと、いまだに思い込んでいるが、勇気を出して社会の深層心理を覗いてみれば、合理的というにはあまりにお粗末な衝動が働いているものであることを知る。

例えば、粒々辛苦して働いて手にしたお金は合理的に使おうという意志が働くにしても、親の遺産が転げ込んだときには、同じ人が日ごろのどから手が出るほど欲しいと思っていたブランドものをいともたやすく買ってし

まう。当人にとって、家計とは別勘定の「心の会計」では、それも合理的な行動になっている。人の心には経済学で律しきれない別のポケットがある。

お金の価値観というものは、金額ではなく、その時の気前よさでいくらでも変わる。千四百兆円といわれる個人金融資産は高齢化社会が進み、今や次の世代に否応なく相続されようとしている。これは並大抵の金額ではない。しかもデフレ対策で税負担を軽減するおまけもあるから、気前よさに拍車がかかり、キャッシュフローの濁流となって走り回る。

半面、貯蓄から拡大再生産につながる投資や消費へ流れを変えるチャンスでもあり、これまでのデフレ・スパイラルにブレーキの効き目がある。

今年、ノーベル経済学賞を受けたプリンストン大学のダニエル・カーネマン教授は、「お金の価値観は心の持ちようで多様化する」と言っている。そして、合理的か否か二者択一にして、性急に答えを求めようとする伝統的な経済学に疑問を投げかけ、今世界が置かれている経

済状況は、経済問題の範疇はんちゆうから離れて、人の心に関わる複雑な社会問題であるとしている。がんが経済の局所にとどまらず社会全体に転移したと見ているに違いない。

流通では、牛肉が品不足になったとき、需給バランスから価格が上がる原理に逆らって、安い牛肉を偽装して価格を上げない裏業が話題になった。

消費についても、家計から社会全般に視点を移してみる。一家の主婦は、スーパーやコンビニをこまめに探して歩いて安いものを買うに行く。揚げ句の果てに、業界がダンピング競争に巻き込まれ、回り回ってご主人のリストラにつながらないか、もう一度夫婦で社会の因果応報を熟慮してもいいのではないか。

「複雑なものは、複雑なままに答えを求めよう」とする複雑系の思考法は、コンピュータ応用の優れた機能が充実し、シミュレーションとアナロジーという便利な道具の発達とともに、いよいよノーベル賞受賞の領域に歩を進めてきた。

ここまで、不景気の対症療法として公共事業に投資し

て一時凌ぎをした。次は不良債権処理だと本気に取り組むと、それまで鳴りを潜めていたデフレ対策が先だと大騒ぎをする。結局、モグラたたきに明け暮れた「失われた十年」であつた。

出てきたモグラを一網打尽に退治せず、一匹ずつ追いまわしたのは、伝統的な経済学が、答えを安易に求めようとするあまり、数ある要因を無理に間引きしたからである。これからは、その時考えられる要因をすべて対象にして、要素相互の干渉も考えに入れて、答える態度が必要である。

幸い、コンピュータを使えば、シミュレーションができる。複数の要因を、配分を変えて組み合わせ、それらに對し最も効果のある対策を求めることもできる。カーネマンのいう行動経済学は、経済問題に限らず複雑な社会問題を解くカギになるかもしれない。

甘い！甘い！現金強盗対策

今川 確郎

ここ一、二年、銀行、郵便局に侵入して現金を強奪したり、パワーシャベルでATM機を破壊するような事件が毎週のように発生している。被害額は何百、何千万円に達することが多く、凶器による殺傷も併発している。対象となり易い店舗は、それなりに予防対策を講じているのだろうが、同じ手口での犯行が繰り返されている。

犯人逮捕率は二割程度とのこと。「日本は犯罪者天国」といわれるくらい、予防が手ぬるい。最も必要な対策は、警察官による管内の重点警備だろう。特に夜間のパトロールが必要だ。犯人は現金強奪後に車、バイクで逃走するのがほとんどなので、パトカーによる巡回の繰り返しが必要だ。それには夜間外勤の警官増員が必要で、被害の額、社会的影響を勘案すれば、急ぎ実行すべき対策である。

一方、日本の金融機関、特に中小の銀行、郵便局の窓

口は、現金強盗に対し全く無防備だ。窓口行員の前に置いてある何百万もの札束は、客が手を伸ばせば簡単にかみ出せる。窓口は楽に飛び越せる高さだ。

私が見聞した西欧諸国、特に不法入国者、避難民、失業者が多いイタリアの金融機関の強盗対策は徹底している。

銀行の入り口はドアが二重の回転式となっている。外側のドアのスイッチを押して中に入ると、これがカチッと閉まらないと内側のドアのスイッチは赤色のままだ。青色になって初めて、内側のドアのスイッチを押して行内に入れる。両ドアの間は大人一人分のスペースしかない。外に出る際も同様である。従って、現金を奪っても、一気に外部に逃走することは出来ない。

人の往来が激しく、事件が発生し易い銀行は、規模の大小にかかわらず、入り口の外側に、拳銃を携帯した警備員が見張っている。さらに支店によっては、第一のドアの入り口前に、カバン、ハンドバッグなどを収納する鍵付きの保管箱がある。行内に持ち込めるのは書類、財布類のみ。隠された拳銃、刃物を発見する金属探知器も

設置されている。

店内の現金窓口は高さ一メートルほどの厚いガラスで仕切られている。現金の授受は、仕切りガラスの下回転式窓口なので、手を差し入れて内側の紙幣を奪取することは出来ない。

日本では「来客は大切なお客様」との気持ちが強いのか「人を見たら泥棒と思え」と感じられるこのような対策は取れないのだろうか？　しかし、事件が発生してから犯人を追跡、逮捕するのでは、犯罪防止は不可能だ。犯人がつけ入る余地がないほどの自己防衛が最も必要である。

「現金を奪取されても保険でカバー出来る」といった安易な気持ちも潜んでいるのではないかと勘ぐられるほど、盗難への不断の備えが見えない。行員の足下には、警察に緊急連絡出来るスイッチがあるのだろうか、一刻も早い警官の現場到着が最も必要である。

六年ほど前、神戸のＪＲ元町駅付近の福德銀行裏口で

現金輸送車が襲われ、五億円も強奪された時は朝九時過ぎだった。通勤時間帯で、付近には多くの人たちが事件を目にしていたにもかかわらず、犯人たちは車で逃走し、警察はその行方を追跡することが出来なかった。最近、西銀座の松屋裏で発生した同様な事件も午後一時ごろだった。

銀座通りの一本裏側の道路で、車、人の通行が比較的に少なかったとはいえ、犯人たちは現金袋を奪い、二台のバイクで逃走している。輸送車は通常の車で、毎日のように時間帯、経路を変更していたとのことなので、内部事情に通じた者の犯行ではないかと疑われている。バイクによる逃走だったので、時間帯からしても、通行人らが異常な事態を見聞しているはず。今日、多くの人が携帯電話を持ち歩いているので、警察への急報は容易と思われる。この面での一般市民の協力による、緊急な情報入手、追跡、逮捕に努めるべきだ。また、二十四時間営業のコンビニも、預金を引き出した後の個人も、盗難予防の心構えを常に抱いている必要がある。

ゆとり教育と中学英語の将来

関 谷 裕 彦

「ゆとり」の中で「生きる力をはぐくむ」という狙いで、学習内容三割減を目指し、昨年四月来、学校教育週五日制の完全実施となったのはご同慶の至りである。

だが文部科学省が平成十四年初めに小学五年から中学三年まで公立校生徒約四十万人を対象に実施した五教科の学力調査（二〇〇二年十二月十四日発表）の結果によると、算数・数学の学力低下は顕著であり、半数近くが円周率 $3 \cdot 14$ を与えられても円面積が計算出来ない。国語の若干上昇は不思議だが、社会は低下。英語と理科はばらつきありとのことであった。

肝心の英語の結果がいまいちはっきりしないが、新指導要領では、中学生（義務教育期間）の必修語数は、なんとたったの百語となっていることは問題である。以前は五百七語であった。良く読むと前記必修百語を含む九百語程度を取得させるという表現であるが……。われわ

れ中学時代は数千語をめざしたものだ。

暗記に対する批判が我が国では根強くあるが、もともと他国との連関性をほとんど持たない言葉を話す日本人にとって語学習得上の暗記はいわば必要悪であり、頭の柔らかな幼時、せめて中学時代に少しでも多くの言語を詰め込むことは、彼の国に居住しない限り、もしくは英語ネイティブの教師を身近におかない限り絶対必要なのである。必修語といえ、要領のよい現代っ子が、「それだけやりにいいよ」となることは火をみるよりあきらかで、不勉強のお墨付きを与えるようなものである。

大体百語の必修単語で何がしゃべれるのであろうか？ 筆者は朝鮮戦争終盤時、立川の米軍基地でアルバイトをしていたころ、知り合った現場の顔役（なんと名字が東条さんであった）に「学生さん、英語なんて三百も知ってりゃ毎日不自由しないよ」とあおられて、がくぜんとした記憶があるが、いくら東条旦那でも百語では無理であったろう。それも機能語中心ということで、動詞、助動詞は be, do, have, can, shall, will, must とその変化形（ただし、be, do, have は現在形のみ）しかない。後は代

名詞、接続詞、前置詞、冠詞等である。しかも「生徒の負担に配慮して」アルファベットの筆記体は必修ではなくなった。

さらに、話し言葉の軽視がある。大体言語というものは話して通じなければ意味がない。犬と会話が出来る世の中であるのに（因みに猫とは相手さんの言語大系が複雑なため未だ実現しない）我が同胞の会話力はお粗末以外のなにものでもない。今回の指導要領でも、言語活動を「正しく聞き取る」「正しく話す」「正しく読む」「正しく書く」よう指導することになっているが「書くこと」はともあれ「聞き取る」「話す」「読む」については何も具体的に触れてない。

外国語を真剣に学ぼうと思ったら、まずその国の人たちと同じように発音し、その話し方をまねる努力をする必要がある。某知識人氏のように「日本人には日本人の英語」なんてご託を並べても始まらない。新指導要領においても英語の発音記号についてほとんど触れていないところに日本の英語教育の重大な欠陥がある。

アクセント（強勢）、イントネーション（音調）、区切

りが三種の神器のごとく繰り返されるが、アクセントはとにかく、イントネーションをどうしようが、区切りをどこにおこうが、さして強力な武器にはなり得ない。まず個々の語の発音がきちんとできていなければ「文字や符号を識別に正しく読むこと」といわれても、なにが正しいのか実はわからないのである。お隣の中国語は文字をみれば大意はわかるが、発音文字であるアルファベットが相手では、音が不正確ではどうしようもない。発音軽視の傾向が日本人全体の悪習慣となり、会話塾をもうけさせているのである。発音記号という万国共通の手段があるのに、それに関する記述は同化（assimilation）のケースのみ。さらなる問題は、いくら現在五億から七億の人間が話すといつて、世界的標準発音はないという解釈にはがっかりである。英語は本来的には英国英語であるべきで（せめて米語）いくら世界中で話すといつて他の派生的な発音を教育の場で云々する必要はない。

日本流のカタカナ読み（語尾の母音を落とせない）をとにかく切つてすて、きちんとした発音を低学年時に厳しく指導し、英語教育の根本を正すべきであらう。

人間という動物

都 甲 昌 利

近ごろ、人間が変だ。どうもおかしくなっている。わが子に食べ物を与えず餓死させる母親、有名幼稚園にわが子を入れるために競争相手の女兒を殺す女性、電車内のマナーを注意され、かっとなって刺し殺す男、ホームレスの男性に熱湯をかけて大怪我をさせた高校生、輸入牛肉を国産と偽って販売する食品会社の幹部、平気で嘘をつく政治家、まだまだこういった人間の愚かな行為は挙げたら枚挙に暇が無いだろう。なにも日本だけの現象ではない。エンロンの経営者、友人たちを銃で乱射して殺す米国の高校生、肥満になったのはハンバーグを食べさせられたのが原因とマクドナルドを訴えたアメリカ人（アフリカでは子供たちが飢え死にしているというのに）などがあるとすると、何も日本だけではなさそうだ。世界的に人間がおかしくなっている。ひょっとすると我々自身もこうした行為に引き込まれそうになることもあ

る。我々の心の中にこのような潜在的心理が隠されていることを思うと恐ろしくなる。

高校時代にドストエフスキの「罪と罰」や「カラマゾフの兄弟」を読んですごい衝撃を受けた。嫉妬、怨恨、反逆、強欲、残酷な暴行、殺人、極めてアブノーマルな人間が出てくる。それは現代に通じる。人間は本質的に少しも変わっていないのだろうか。少しは進歩、進化しているのだろうか。

科学者や技術・研究者の中にもおかしい人物がいる。自分の発明や発見が会社に貢献し利益をもたらしたから何億円の金銭を要求する。品性下劣で卑しい根性と思う。破傷風菌の純粋培養に成功、血清療法を発見した北里柴三郎、ブラウン管を用いて世界ではじめて映像受信に成功、テレビ受像機の基礎を築いた高柳健次郎、ラジウムを発見したキュリー夫妻、X線を発見したレントゲン博士、彼らは法外な金銭的要求をして研究に励んだのだろうか。彼らはそれらの発見や発明が偶然や幸運であったとはいえ、たゆまない努力でおそらく人類を救いたい、人々に希望と勇気を与えたいと崇高なる使命感をもって

研究や発明・発見をしたに違いない。それによって世界の人類が幸福になることで満足し自分の喜びとしたのだと思う。

少なくとも私たちの父や祖父の時代には、今よりも謙虚・高潔正直で、勤勉かつ品格があり、人間への温かい愛情と鋭い洞察力を持った人が多く存在していたように思う。

人間がこれまでおかしくなった原因を、家庭のしつけが悪い、教育制度が悪い、戦後の教育が誤りだったとか、アメリカ支配の資本主義による富の偏在によるとか、冷戦構造が崩壊し不安定な政治や社会情勢などによるものと主張する者もいるが、私はそうは思わない。家庭、教育制度、資本主義、政治制度など制度や組織はすべて人間が創ったものだ。これらに原因を求めるのは適切ではない。では何がそうさせるのか？ 人間のもつ根元的な闇の部分がなせる業なのだ。ドストエフスキー的表現を借りれば「深いところで炎々と燃え続ける恐ろしい怨嗟、憤怒、屈辱、嫉妬、うわべはへつらいの笑みを浮かべながら、魂の底で殺人や悪事を犯す」のだ。

この「おかしい」人間たちが集団となると「狂気」に質的変換をする。これが紛争・戦争を引き起こし、大量殺人兵器を造り出し集団殺戮を行う。正義という美名に隠れて……。『狂気』はホロコーストを生み出しアウシュビッツの殺人工場を造った。すべてではないが、紛争や戦争は不信、猜疑心、恐怖心が原因だ。自爆テロ、パレスチナ、チェチェン、ボスニアなどの紛争もこれらが原因だ。それは現代のテロにも通じる。もつと恐ろしいことに、この「狂気」と人類が初めて手に入れた「原子の火」が結びついて、やがて地球を破滅へと導くだろう。地球や人類をこの破局から救う方法はあるのか。そんな難しいことは私には分からないし私の能力を超える。ただ、「ここがおいしい」というテーマに対しては、ただ「人間がおかしい」と答えるほかない。

「説明責任」という言葉

上原 利夫

「××は、説明責任を果たしていない」といった表現をよく見かける。この「説明責任」は「説明する責任」という意味のようだが、なぜ説明する責任があるのか、誰に説明するのか、さらに、説明しなかったときの制裁はあるのかなど、意味の分からない言葉である。

「説明責任」が使われたのはアカウンタビリティの訳語としてであった。日本駐在のオランダ人の新聞記者カレル・ヴァン・ウォルフレン（現在、アムステルダム大学教授）が、その著『人間を幸福にしない日本というシステム』（篠原勉訳、毎日新聞、一九九四年）で、日本人にはアカウンタビリティが欠けていると書いたのに始まる。その時、リスボンシビリティの日本訳「責任」に対応して、アカウンタビリティを「説明する責任」と訳した。その後、新聞報道で「アカウンタビリティ」（説明責任）が頻繁に現れ、昨年あたりから「説

明責任」が一人歩きしている。

アカウンタビリティは古くから会計学で使われており、「会計責任」と訳されていた。その起源はローマ時代に遡る。当時の主人は財産管理を僕（しもべ）に任せた。僕は主人から預かった財産の管理・運用の顛末と現況を主人に報告する義務があった。そのため帳簿の右側（貸方）に主人から預かった財産を、左側（借方）にその財産の管理・運用状態を記入した。ここに複式簿記の発祥と「アカウンタビリティ（会計責任）」の由来があるといわれる。

この主人と僕の関係が、新約聖書に書かれている。マタイによる福音書（25章14節―30節）の「タラントンのたとえ」と、ルカによる福音書（19章11節―27節）の「ムナのたとえ」である。クリスチャンである速水優日銀総裁は、二〇〇二年一月四日の日本経済新聞の交遊抄に「アカウンタビリティとは聖書の言葉だよ」と聖学院院長の大木英夫氏から教わったと書いている。

「タラントンのたとえ」では、主人が三人の僕に、才能に応じて一人目には五タラントン、二人目には二タラ

ントン、三人目には一タラントンを預けて長い旅に出た。主人は旅から帰って、僕から報告を聴く。一人目と二人目はそれぞれ元金を二倍に増やしていたが、三人目は土に埋めて保管したので元金のままであった。主人は元金を増やした二人を褒め、増やさなかった三人目から一タラントンを取り上げ、十タラントンを持つ者に与えるとともに、怠け者を外の暗い所に追い出した。

「ムナのたとえ」では、主人は十人の僕に十ムナを渡し、旅から帰ってくるまでに、商売することを命じた。十人の僕は、帰ってきた主人に、その顛末を報告した。主人は一ムナを十ムナにした者には十の町の支配権を、一ムナで五ムナを得た者には五の町の支配権を与えた。しかし、一ムナをそのまま保管した者には、なぜ銀行に預けて利子を稼がなかったと叱り、怠惰な僕から一ムナを取り上げ、十ムナを持つ者に与えた。

これらの「たとえ」の主人を株主に、僕を取締役に置き換えると、株主・取締役の委任と受任の関係（商法254条）が分かりやすくなる。

以上のようにアカウンタビリティーには、それを果た

したときの報酬、果たさなかったときの責任解除（解任）の条件が含まれている。したがって、冒頭の「××は、説明責任を果たしていない」の「説明責任」とは、信任の継続を求めるために、受任者が委任者に対して行う顛末報告義務を意味する（民法645条）。

「義務」には、それに対応する「権利」があり、義務違反には「制裁」がある。「説明責任」を「説明義務」とすれば、「××は、説明義務を果たしていない」となり、「説明を求める権利を持つ者に説明義務を果たさなければ、解任される」という意味がはっきりする。

国語審議会は、アカウンタビリティーを「一般への定着が十分でなく、日本語に言い換えた方が分かりやすくなる語」の範ちゅうと考え、日本語への言い換え例として「説明責任など」としている。「説明責任」は確かに定着しつつあるのだが、アカウンタビリティーの大切な意味が表現されないので賛成できない。なぜならば、曖昧な表現は日本人の権利を踏みにじる権力者に悪用されやすく、ウォルフレンのいう『人間を幸福にしない日本というシステム』から脱却できないからである。

日本の自動車行政

松谷 隆

昨年のアメリカでの自動車販売台数が発表された。日本勢の実績はいずれも昨年を上回った。特にトヨタとホンダは二桁の増加であった。一方、ビッグスリーは枕を並べての減少であった。いろんな理由が述べられているが、決定打は自動車の生涯所有コストがアメリカ車に比し、日本車の方がはるかに安くつくからである。

しかし、このような日本車を日本で維持するのに、なぜ時間を食い、高くつくのか全く理解できない。行政が道路族の馬鹿どものご威光に恐れをなしているのと、自らの天下り先を維持するために改善しないからである。

帰国直後の三年前に、七年間保持した車を新車に買い換えたが、それが今回車検の時期となった。その間に経験した奇妙な事象について、日米の温度差を述べる。

まずは、「車検」。新車登録後三年で「車検」が義務付

けられている。これは十数年前に「二年」から一年延長されたものである。「車検」そのものは日本車が低品質時代の遺物でしかない。トヨタ以下が「世界最強の車」と豪語しているのに、なぜ彼らが顧客の視点で「車検撤廃」を求めないのか。「車検」に五万円以上払うのは馬鹿々々しい次第である。アメリカ人の友人にこの話をしたとき、彼はしばらくぼうぜんとした後、「世界一馬鹿な制度」と大笑いした。

アメリカでは二年ごとの「排気ガス点検」だけである。四年分の点検料はたったの六十ドルだけで、所要時間も合計十分、しかも結果はオンラインで陸運局に送信される。手間もかからない。一日以上かかり、費用も高い日本。これでよいのか。

次に「定期点検」である。これはあくまで、所有者の自己責任で行うべきで、行政がお節介するものではない。アメリカで「点検」が完璧なら付加価値が高まり、車の転売時に「高価」で売れる。日本では、「点検料」もお上が決めた仕事だとして、取り放題である。車の販売店での二十四カ月点検料はまる一日かかり、二万円近い。

アメリカの全国展開の独立系ショップでは、三十項目の点検が三十分、四十ドルである。この差を見れば、やはり日本はおかしい。

日本に独立系で全国展開の修理業者がほとんどないのはメーカーからの圧力と行政の怠慢に他ならないと考ええる。部品の販売拒否は不正競争防止法上、不可能であるが、価格での圧力をかけているのではと疑っている。

第三点は「中古車市場の未成熟さ」である。車歴七年とはいえ、走行距離三万五千キロの車の下取り価格を聞いたところ、「引き取り料」を頂戴せねばとの回答に聞いた口が塞がらなかった。聞けば、六年以上の車は販売不能とのこと。さんざん粘った結果やっと「三万円」を提案してきた。

アメリカでは、車の「下取り (trade-in)」を聞いたことも見たこともなかった。「中古車市場」が確立しているからである。毎年、中古車の市場価格を記載した「ブルーブック」が発行されている。これには販売業者価格とエンドユーザー価格が記載されているので、個人間の取引も可能である。アメリカで九年間運転し、走行距離

十一万マイル、買値二万五千ドルのキャデラックさえ、最高七千ドル、最低千ドルの価格であった。日本車は人気があるので、中古価格はもっと高い。古いものを大切にする習慣がなくなったのと、メーカーの「生産」第一主義のために「中古車市場」が成熟しない訳である。

最後に本当に馬鹿げた話。帰国後、期限切れの日本の運転免許証の更新に行った。アメリカの免許証を見せたところ、「翻訳」が必要と言われた。「様式」を確認したら、「アメリカ大使館」もしくは「日本自動車連盟 (JAF)」の翻訳文しか受け付けないとの回答に、卒倒しそうになった。平成六年の道路交通法の改正の結果という。誰が、なんのために、こんな馬鹿な法律を決めたのか。そうかJAFも天下り先の一つだ。

社会保障や安全保障を考えると背筋の寒くなることばかりであるが、どう考えてもおかしい。「国民不在」、「利用者無視」の車行政は即刻改善させるべきである。この改善には「行政」を攻める以上に「立法府」の一新が不可欠だ。選挙を棄権してはますます悪くなるだけだ。「棄権」だけはしないぞ。

人間の顔をした産業社会を

中村 將 陸

目下日本経済は、深刻なデフレ不況の塗炭の苦しみに喘いでいる。この不況克服のため、政府はいったんハードランディングを試みたものの、国民の強い拒否反応に遭い、銀行の不良債権は今なお逆増大している。これに対し、小泉内閣は、平成十五年度の国家予算において、政権発足当初の公約である三十兆円の国債発行枠を撤廃し、三十六兆円もの大増発に踏み切った。なりふり構わぬ政府の姿勢は、相変わらずの右肩上がりの経済に固執するものであり、これでわが国が置かれている歴史的苦境からの脱却が果たして可能だろうか。

ここ十年以上、日本に居座り続けているデフレ不況の背景には、第一に急激な高齢化の進展による国内市場の伸び悩みがある。第二には中国の世界経済への進出による労働および土地需要の激減がある。特に、国内工場用地需要の急激な縮減は、それまで日本経済を支えてきた、

土地本位制を崩壊させた。バブル経済崩壊後の歴代の内閣は景気浮揚のため、天文学的な国債の発行を積み上げてきたが、満足すべき結果を得られていない。小泉内閣の発足後も失業率、過労死および自殺者の増大に歯止めはかからず、日本社会全体が深刻な閉塞感に覆われている。政府は相も変わらず、日本再生計画や、デフレ不況の克服といった当面の課題を前面に掲げ、必死に取り組んでいる。しかし、その成功の見込みはきわめて薄い。

他方、昨今政権の内外において、インフレ・ターゲット論がにわかに台頭してきた。これを主張する論者は、日本経済のすべての問題が一拳に解決されるかのような幻影を、新聞やテレビで国民に語っている。しかしバブルの絶頂期、果たして日本人は幸福だったのであるか。この間日本全体が拝金思想に支配され、司馬遼太郎氏も嘆いたように日本人の心の荒廃は極度に進んだ。

今こそ政府は、戦後一貫して取り続けてきた産業一辺倒の経済政策から、文化重視の政策へと大胆に軸足を移すべきではなからうか。すなわち日本民族の悠久の繁栄に焦点を当て、国民がより人間的なライフスタイルを享

受できるよう、支援することである。換言すれば人間の顔をした産業社会の建設である。例えばこの上ない不幸である自殺者数の削減と、社会に活力を与える出生率の増大を、新たな国家目標とすることは大きな意義がある。そのためには競争社会に特有な、非人間的な社会的緊張を低減させなければならない。

過労死と失業者の増大が同居することほど大きな社会的な矛盾はない。サービス残業の法的規制と、賃金低下を前提とした、ワークシェアリングの普及を全面的に推進すべきである。さらに当たり前になっている単身赴任も、成長期の子供を持つ家庭については、企業に何らかの規制をかけることも急務であろう。この際、政府だけが全産業に対し、透明な共通尺度を提供し得る唯一の機関であることを深く銘記しなければならない。日本人は、等しく貧しくなることには寛大である。このことはすでに歴史的に実証済みの事実である。

学校教育では理数系の学力向上が叫ばれている。しかし野外学習、ボランティア学習さらには情操教育の充実も等しく重要である。これらは人生を豊かにしてくれる

ばかりか、人生の厳しい局面に立たされた場合、生きる意欲を与えてくれることであろう。

資源のない日本には、今後も世界をリードする先端産業が不可欠である。前述の提言は日本が先端産業を持つことの妨げにはならない。歴史的に見て、モノ作りは日本人のDNAであり、悲観論は当たらない。百五十年前浦賀に来航したペリーも、日本人のモノ作りの素晴らしさには驚嘆した。さらに昔から日本は「まほろばの国」と呼ばれ、山紫水明の観光資源に恵まれている。一方、能、歌舞伎、文楽や狂言をはじめとする伝統文芸も盛んである。日本文化を活性化し、貿易摩擦を回避する意味から、広い意味での観光産業の振興も重要である。

思えば日本は人口減少時代への突入を目前にしている。今こそ右肩上がり時代の成功体験を、自ら捨てるべき時である。国家財政が危機を迎えている中、巨額な国連分担金やODAを気前よく支払っている愚を即刻やめるべきであろう。政府は国民に負担を強いる大国主義的メンツを捨て、当面の不況克服より、国民の真の幸福と長期的な国の発展を政策の基本に据えるべきである。

アダム・スミスの呪縛

大野 暉

新聞やテレビを見る限り、世の中は「不況、不況」の大合唱です。確かに昨年一年で株価は一八%も値下がりし、日経ダウは一九九〇年の三万九千円から八千五百円まで、四・六分の一になってしまいました。一方で品物は街にあふれ、飽食の時代であることも事実です。

そこに友人から一通の年賀状が届きました。友人の意のあるところを私なりに翻案してみます。

健康状態を判断するのに、体温、血圧、コレステロール値、尿酸値といったさまざまな数値が使われるように、経済の健全性を判断するのにもさまざまな数値がある、というのが彼の意見です。

彼は次の七つの数値を挙げています。

一、実質GDP対前年増加率 一九九一から二〇〇〇年の十年間では、平均値一・四三%。(評価B)

二、完全失業率 総務省労働力調査によると、九十年

代は二・三%、現在は五・四%。因みに現在の米国五・七%、ドイツ・フランス九%、カナダ七%。(評価B)

三、国民総資産 一九九〇年、三五五兆円が二〇〇〇年には二九七兆円に下落。株式五一九→四一四兆円、土地二四五九→一五二五兆円が主因。(評価C)

四、家計預貯金残高 一九九〇年、四六四兆円→二〇〇〇年、七一八兆円に増加。(評価A)

五、家計の純金融資産残高 金融資産から負債を差し引いた額は一九九九年、国民一人当たり八一万円。国際比較すると、アメリカの一二〇万円に次いで大きい、当時のレート一八円で換算。(評価A)

六、所得分配 約五三〇兆円のGDPを分配国民総生産で計算、雇用者所得の割合を見ると、一九九〇年、六七・二%→二〇〇〇年、七三・六%に増加。財産所得は同時期、一一・七%→四・二%に激減。原因は利子率、株価、地価の下落。(評価A)

七、不良債権 破綻先債権、延滞債権等の合計「リスク管理債権」は、全銀協加盟一三三行ベースで二〇〇二年三月末現在、三九兆八三八〇億円(評価C)

以上の数値から彼の出した結論は「日本経済はさほど不健康ではないといえそうです」彼流に言うと、不健康でないということは不況とはいえないという結論です。

マスコミの論調と常識的な一般人の見方になぜこのような差が出るのか。今まで私たちが正しいと信じてきた価値観が根底から揺らぎはじめたからではないでしょうか。少し脱線して最近の世の流れを追って見ましよう。

重厚長大から軽薄短小へ。今やウエイトレス社会に移行しつつあるといわれます。価値を生むのはマイクロソフトのようなOSであったり、グッチのようなブランド力です。雇用の形態も米国では変わりはじめたようです。NPO、NGOへの就業者が二十万人を超えたといわれています。

この部門は米国では第三セクター（日本での使われ方と異なりますが）、欧州では社会的経済と呼ばれ、「コミュニティ・社会サービス」をカバーします。ここには、慈善活動、労働組合からシンクタンク、ロビー活動を行

うボランティア団体まで幅広い分野が含まれています。

ではこれほど裾野の広い活動であるにもかかわらず、なぜエコノミストから無視されるのか。

問題はこの分野がサービス業という点にあるようです。アダム・スミスは「製造業と農業は生産的だが、サービス業は価値を生まない」と書きました。この言葉が「サービス業やソフトだけが中心となるウエイトレス社会」へのエコノミストの偏見を増幅しています。

しかし、一方でインターネットに代表されるウエイトレス経済は、ボーダレス社会を実現しつつあり、十七世紀に生まれ、十九世紀に繁栄した国民国家の基礎を根底から揺るがそうとしています。

二十世紀後半に産声をあげたNPOが二十一世紀には繁栄するとか、情報技術の進歩が都市を国家に代えて人々の拠り所にするだろう、といった議論がやっと出始めました。

経済が国家を離れるときに、国家単位で物を考えることがナンセンスの時代に入ったということでしょうか。

米百俵の曲がり角

北田 純 一

米百俵がいつの間にか消費拡大に変わってしまった。勤儉節約の精神が浪費奨励に変わった。「小泉はん、話がちやいまつせ。しっかりしとくなはれ」

筆者はかねて『右肩下がりの経済学』を唱えている。近代工業資本主義というライフスタイルは人類に素晴らしい文明を与えてくれた。一般市民まで王侯のような豊かさを享受できるようになった。

しかし、この主義の根本理念「一生懸命に働いて稼げるだけ稼ぎなさい。神の見えざる手が全てを調和してくれる」というのは余りにも楽観的すぎる。

この理念は、アメリカなど新しい大陸が次々に発見され、西欧人が気宇壮大だった時代に醸し出された。地球は大きい。無限大だ。何をしようがびくともしない、と誰もが信じて疑わなかった。だから、後のことを何も考

えず、無制限の経済成長を是認奨励したのである。

現在、人は地球の大きさを知っている。地球が有限の物体であることも知っている。ちょっと考えれば、有限の地球を舞台にした無限の成長など、物理的に不可能なことはすぐにも気付くはずである。しかし、文明の美酒に酔った人間は、うっかり地球が有限の惑星であることを忘れていた。

相撲なら力士がいくら大きくなっても、土俵を大きくすればそれで済む。しかし、経済成長の土俵は地球そのものだから作り直すことが出来ない。

地球は有限の星である。水も空気がも土地も地下資源も、すべて有限である。成長を性懲りもなく続けると、遅かれ早かれ必ず限界に突き当たる。いや、すでにぶち当たっているかも知れない。

そうでなくても、少子高齢者化の著しいわが国では、遠からず人口が減少に転じ、嫌でも消費量が落ちて、経済縮小は避けられない。そうと分かれば、さっそくにも縮小再生産のシナリオを考えなければなるまい。米百俵の改革とは、そういう意味だと思っていた。

ところが唱えられるお題目は、通貨増発、ゼロ金利、消費拡大、景気回復、デフレスパイラル払拭。ついにはインフレーターゲット論まで飛び出して、まるでバブルの再燃を願っているかのような態たらくである。旧態依然たる成長第一主義の夢が捨てられないらしい。「浪華のことは夢のまた夢」と詠んで身罷^{みまか}った秀吉が思い出される。しかし、成長を続けようにも、もはや地球の限界に阻まれて叶いそうにもない。よしんば一時的に叶ったとしても長続きするはずがない。これでは、国を危うくするばかりではなく、地球人類全体の安全を脅かすことになりかねない。

ではどうすればよいのか。太りすぎは身体によくない。医者はいエツトを薦める。経済も同じこと、ダイエツトが必要だ。つまり『右肩下がりの経済学』を究め、地球と反りのあつた新しいライフスタイルを編み出すことが肝要である。

贅沢なんかしなくてよい。自動車なんてなくてよい。もちろん三度の食事はダイエツト。給料も下がってよろ

しい。そのかわり物価も下げてくれ。中国の物件費は驚異的に低い。物が安い。シンブルライフ大いに結構の聲が巻き起こり、ダイエツト容認論に傾いたとき、日本も地球も救われるのではないだろうか。そう考えると、最悪のケースと恐れられているデフレスパイラルとは、実は一番有効な軟着陸の方法ではないかと思われる。神の見えざる手による処方箋のような気がしてならない。

私は長い地球の歴史、人類の歴史から考え、近代工業資本主義そのものがバブルであると思っている。バブルは長続きしない。近代工業資本主義は二百年の歴史しかないが、遠からず崩壊せざるを得ないだろう。そして我々は今と安定したライフスタイルを編み出さなければ、人類の滅亡は近いと言わざるを得ないだろう。

マクス・ウェーバーが説くように、近代工業資本主義はプロテスタントの勤儉節約の精神から始まった。そして米百俵という勤儉節約で終わろうとしている。歴史はまことに因縁深い。

二〇〇三年日本は？

新井 進

(一) 不思議な政治現象

最近の内閣は、経済の不況を通り越して恐慌の様相を呈しているにもかかわらず高水準の支持率を示している。二〇〇二年十一月末の世論調査では六五・一％（年末には六一％）と歴代内閣に比べて依然として高い水準である。とはいえ、細川、海部内閣などは退陣直前の支持率がそれぞれ六一・五％、五六・七％（共同通信調査）だったので、二〇〇三年はいついかなる事態が現れ、内閣退陣ということがあるかも知れない。

小泉内閣以外に政界に変わるべき人物がいなかったという疑問に対して、自民党長老の一人が「歌舞伎とオペラしか知らない者が首相となる時代ならば、他に変わるべき人物はいる」と皮肉な見解を発表している。

小泉人気の根源を考える時、（一）過去のシガラミを

破壊、（二）下意上達の従来の政策決定を改めて上意下達を採用、（三）自民党抵抗勢力との対立、などがあげられようが、この構図を発展させ、政党そのものの否定、さらに政党議院内閣そのものの破壊にまで進む恐れを含んでいる。六〇％に近い無党派層の存在を考える時、一九三〇年から四〇年にかけて政党解散時代から翼賛体制へ移行して軍国主義時代へと突入した過去の事実を思い出す。

二〇〇三年の課題として、利権志向、利害のための離合集散を改め、政党政治本来の姿を取り戻し、全政治家、否全国民の課題として無党派層の政治への回帰を推進すべきではなからうか。

(二) 経済の破局

二〇〇二年前半には加藤紘一、鈴木宗男、田中真紀子の金銭に関係する議員辞職、秋に入り鳩山民主党代表の辞任などが起きて国民の政治認識を低下させた。そのような政治不毛のなか、九月の平壤宣言で現内閣は国民の目を外交に向けさせた。

一方、日本経済は慘憺たる低落ぶりである。二〇〇一年（暦年）の「国富」は二千九百六兆円で一九九〇年（以下同）の三千五百五十二兆円に比して一八％相当の六百四十五兆円が失われ、また国民資産の約二割を占める土地資産二千四百五十五兆円が約一千兆円の減少、株式資産はピーク時の三分の一まで減少している。

OECD発表の潜在競争力（二〇〇二年十二月現在）の総合順位では加盟三十一国のなかで十七位に下落し、シンガポール、香港の後塵（こうじん）を拝している。おそらく二〇〇三年以降も同じような低落傾向をたどるに違いない。

外交のみに専念し経済財政は担当大臣に丸投げの現内閣に対して、国民全員が声高らかに日本経済の早急な立て直しを要求すべきではなからうか。

（三） 提案

余りに長く不毛の日本経済の現状をみて、海外の有識者は多くの提案を示している。例えば、ゲーリー・ベッ

カー（米国シカゴ大学教授、ノーベル経済学受賞）は次のように提案している。

（一） 今までの日本政府と日銀はケインジアン的な政策にとられすぎた。

（二） 金融政策を重視し企業、銀行の再編の推進。

（三） 特に日銀が嫌った「調整インフレ」（約二・三％）の採用。

（四） 民間活力の利用と構造改革。

最近、財務相や一部政治家、評論家らが購買力平価説による外国為替の円安導入政策を唱えるが、相手国のあることでもあり、簡単には進まない。財務相が購買力平価説を唱えてドル円相場は百二十円から百二十五円になったが、一週間もしないうちに元の百二十円近辺に戻った。

いずれにしても、色々な提案があるが、結局は政府が最も有効と判断する経済政策を早急に実行すべきであり、それができなければ現内閣は退陣することをお願いする。

原子力利用よりもエネルギー構造改革を！

森田 茂

IEA（国際エネルギー機関）によれば、現在石油の確認可採埋蔵量は四十四年となっている。一九五五年（昭和三十年）に石油はあと三十年と言われていたから、一九八五年には無くなる予測であった。しかし、十年前の一九九二年（平成四年）でも四十五年となっていた。このように公式発表があるごとに、その年数は増えている。また究極埋蔵量も十年前には確認可採埋蔵量の二倍であったが、現在では三倍になっている。

近年になっての油田の開発では、大西洋の北海油田につづいてカスピ海地域での大型油田の開発などがあり、これからも新しい発見があるかも知れない。ここで注目したいのは、開発技術に格段の進歩が見られ、深部の探查や地中での水平拡張の開発が普及しつつあることであ

る。

そもそも石油の成因は動植物の脂肪質がその根源をなしているとの有機説が一般的であるが、依然として無機説も存在している。それは火山の噴火するガスの中に炭化水素が含まれているなどがその論拠になっている。石油、天然ガス、石炭などの化石エネルギーの資源は有限ではあるうけれども、四十年はおろか当分無くならないと考えられよう。

化石エネルギーの石油、天然ガスや石炭は燃焼すると二酸化炭素などを排出して地球温暖化現象をもたらすとして、脱化石エネルギー政策が採られてはや三十年。その対策として原子力発電の利用拡大や太陽光、風水力などの新エネルギーの利用促進が図られてきたが、十年後の世界を考えても、依然として化石エネルギーが中心であることには変わりないと予測されている。

地球温暖化現象には二酸化炭素やメタンが最大の原因となっているが、近年になって塵埃微粒子、黄砂や水蒸

気などの影響の方が大きいのではないかと指摘され始めている。

化石エネルギーの代替品を開発することも重要ではあるが、化石エネルギーがもつ問題点の解消のための努力やそのための予算対策を図ることが、いっそう現実的で効果的な措置ではないかと思う。これまでは問題点を指摘して、だから原子力発電が必要なのだと強調しているようにも考えられるが、東電などの電力会社の原子力発電設備のトラブル隠しの問題や、高速増殖原型炉（もんじゅ）の設置許可（一九八三年）についての名古屋高裁



冬景色

の無効判決（二〇〇三年一月）など、原子力発電に対する不信感が高まっている。原子力発電はその安全性や高放射能廃棄物の安全処理が保証されるまで、少なくとも新設はストップさせるべきである。また新エネルギーの開発も三十年間の努力にもかかわらず、まだ世界の全エネルギー供給の五%にも達していない。新エネルギーの利用については、あわてずにじっくりと研究開発してその効率化とコスト低減を行っていけばよいのではなからうか。

しかし、社会の持続可能な開発を追求するための省エネルギーや、大規模集中型から地域分散型発電方式へ移行するのに役立つ水素利用の燃料電池の開発・普及は大いに継続すべきである。

そして何よりも、地球環境や国情に配慮したエネルギー・ベストミックスとは何かの視点から、エネルギー構造改革の基本設計を確立するのが急務である。エネルギーの構造革命は我々の生活に密着しているが故に、それは文明改革にも直結するからである。

改革なくして成長ありき

中川路 明

「改革なくして成長なし」——小泉ラッパに暮れた二〇〇二年は、何の改革もなしに約一％経済成長した。株下落、国税減収の泥沼の中、成長のマイナス要因となる金融改革、産業再生を先送りした結果だ。良いのか。

「年金はほんとにもらえるのでしょうか」と、年金相談に来る人が増えてきた。保険料を払わない人が増えると、社会保険で成り立つ公的年金の基盤を揺るがしかねない。財政立て直しの来年度年金改正に対し、市民の声を促すことが今年の私の課題である。

なぜ年金財政が齟齬^{そご}をきたしたのか、振り返って見よう。すべてが選挙民に甘い顔をして難問を先送りし、既存の体制を維持しようとした行政の報いである。

厚生年金の支給開始を、六十歳から六十五歳へ引き上げる仕組みが一昨年からスタートした。一九八六年の年金改正で、厚生年金の支給は六十五歳からと決まったの

に、従来通りの六十歳からの特別支給を、経過措置として残してきた。一昨年の改正まで、実施は実に十四年先送りされた。しかもこの段階的引き上げのすべてが完了するのは、二〇三一年と気の遠くなる話である。

国民年金の保険料滞納が多い。所得把握の困難を理由に、所得比例は将来考慮することとして、一九六一年に一律保険料で始まった。そのまま放置してきた逆進性が滞納の原因である。

年金財政は人口の動態調査に基づいて、五年に一回財政再計算を行って給付と負担を決めている。調査は高位、中位、低位の三つの人口推計を示す。過去二回の財政再計算で実績は低位であったのに、保険料値上げを先送りしようと、中位を採用したために人口予測が大きく狂った。給付と負担の均衡で成り立つ社会保険が、少子化への対応に遅れ、給付は減らさず負担を増やさずにした。

サラリーマンが三十年間、保険料を負担し、その後三十年近く受給する長期の年金は、短期の視点で仕組みを変えることはできない。右肩上がりの経済に安心し無策に過ぎるうちに、諸外国に例を見ない急速な高齢化と、

同時に経済の停滞に直面した。企業の経営悪化による収支の不均衡、新会計原則による年金資金の積み立て不足が招いた企業年金の解散、生保の不振による私的年金の破綻に併せて、公的年金の財政窮迫までがマスコミに増幅されて、年金不安がかき立てられた。

わが国の年金がもともと過剰給付の仕組みであることに加えて、制度が人口減少、経済停滞に弱い世代間扶養の賦課方式であるため、世代間の不公平をもたらした。その上、終点の見えない形で給付減、負担増を盛り込んだ前回の年金改正が、不信感を増長させた。

しかし、公的年金を軸とする社会保障の今後は、決して暗いものでない。国民所得に対する税と社会保障額の国民負担率はまだ低く、消費税率も高くない。無駄遣いが表面化した公共事業費、医療費は削減の余地があり、年金給付の減少はあっても、介護保険の充実と合わせ考えれば、全体の社会保障は今後さらに厚いものにできる。これまでは、受給高齢者の年金額削減は「法度」だったが、全階層の公平のためにも既受給者の削減もやむをえない。この実態を国民に説明し、理解を得なければならな

い。

英国の年金改革の成功は、サッチャー時代の年金財政実態の公開、改正後の将来の姿の明示にあったといつてよい。労働党の企業国営化により競争原理を喪失し、揺りかごから墓場までの手厚い福祉に依存した国民に対し、援助に値する貧困と、援助に値しない貧困を峻別する政策で、精神革命を迫ったという。

混迷する日本は、行動的保守主義者として小泉首相に期待した。結果はどうか。郵政事業は飛脚の発想を捨てず、道路公団は狐も走らない道を作り、金融機関、建設業の整理は行われず、役人に民間以上の給料を払っている。ラッパ吹き首相は、選挙の票だけにうごめくと自ら指摘した二世議員の同類であり、化けの皮がはげた。

年金不振の原因となった、すべてを自分たちのために先送りする体質はまったく変わらない。変わったら困る政治家、変えようとしない官僚のなかで、国民が変わろうとしないと先は暗い。日本人は自分たちが間違ったと分かっても、方向転換をしない不思議な国民といわれてきた。おかしいと思ったら行動しよう。

すべてがおかしい

杉浦 右蔵

ここがおかしいリーダーたちに焦点を当てたが、すべてがおかしいので改めて書き直した。近い将来、記述は当たるかもしれないし、間違っているかもしれない。

二〇〇三年正月の報道は「ありき」の話で始まった。国連査察は形式だけか。レポート結果が良ければ漏れがあると、悪ければそれ見たことか、どっちにしてもやられる運命にある。気の毒を絵に描いたようなものだ。フセイン政権が始まったころ、鷹は彼を助けたのに、いったん言うことを聞かなくなると殺さないと気が済まない。

昨年「ライオンは眠れない」と言う本が隠れたベストセラーになった。イギリス人が書いて中国人が翻訳した。話の筋は、龍という国の東に鼠という国があり、その東に鷹という国がある。鼠は両側からにらまれXデーを迎えるという。近い未来の予言である。

鼠は、百数十年前、下田に現れた黒船事件以来にらまれどおしだ。龍や鼠が先駆することを鷹は好まない。常時、上から監視して狙っている。頭角をもたげると攻撃してくる。いやなやつだ。

田中角栄はエネルギー問題の主張をして抹殺されたという。最近では、NECの関本会長が経団連会長を嘱望されていたが、技術を良く知っている者が会長になることは好ましくないということで成就しなかったとか。さらに昨年十二月、関本さん本人のいないとき、取締役解任の劇が起こり、彼は抹殺された。

鷹の第二次大戦後の三つの世界戦略、エネルギー、食料、情報、の制覇は着々と進み、揺るぎだにしない。

いま小泉首相が進めている構造改革は、日本に体力が多分にあった九六年の橋本首相時代に実行するべきだった。十年経ったいま、橋本政権が実施した不可思議な政策は日本を地獄に導いた。世の中が丸いサイクルで動いていると考えれば、いま一番重要な焦点は景気を浮揚させる対策と、株価を上げることだ。最も効果的で効率の良い焦点を見極めて重点的に対処しなければいけない。

「構造改革なくして改革なし」という掛け声は良い。彼は構造改革は着々と進んでいると知っているが、国民の誰もそうは思っていない。このまま時間をかけてピンぼけの政策を強行すると、ベクトルは悪循環スパイラルの方向に加速するしかない。

怪しくも、二人の首相の母校は慶応大学だ。経済指南役大臣も慶応大学教授だ。出身学校を論ずるつもりはないが、不思議な因果で政権の権力に就き日本国を破滅の方向に導いているとしか思えない。福沢諭吉は冥土で教え子たちの舵取りを嘆いているだろう。

為政者は権力を持つ前は良いことを言っている。いざ権力を持つと何も出来ない。裏から魔法の力が働いているのだろう。日本国は魔法の力で動かされているようだ。魔法の力は自分が都合が良い時は助け、自分より出っ張って都合が悪くなると、モグラたたきをする。

日本にも優れた技術がたくさんある。日本の技術を世界の標準にすると困る先進国？が日本を脅す。脅している間に別案を作り、自分たちの考えを世界の標準としてしまう。情報化の花形NTTをどこまでたたけば気が済

むのだろうか。たたかれて智慧を出して少し芽を出すと、すぐたたく。新聞の隅を見ていると良く分かる。鷹が上空から監視していて鼠が出るとすぐ狙う。

昨年暮れ、厚生労働省は、一万四千社の調査から、日本の離職率が入職率を戦後初めて上回ったと発表した。企業がリストラをすれば、人間の働く所が少なくなることは当然だ。転職の職業訓練という施策はお茶に蒔きの詭弁に過ぎない。入職企業を増やす施策を取らないで何をかいわんやである。

昨年、ホテルニュージャパンの跡地に、外資の馬鹿でかいビルが立ち上がった。日本橋にも近くそびえる。日本の不動産や優良企業は外資の前におびえおのいている。政府はいずれにも無策で売国の手伝いをしている。CIAが二〇一五年に日本はマイナーになるといったことが、二年前の新聞に乗ったことを覚えている。CIAがそのような記事を出すはずは無いというが、事実である。これから十数年の間に、日本の生き血を吸い尽くすであろう外資から日本を守る憂国の志士が早く現れることを願ってやまない。(二〇〇三・一・六)

丸投げ論争

岸 本 義 生

暮らしの手帖保存版に花森さんの「ぼくは、もう、投票しない」という記事がありました。一九六七年十月号に「役人が自分のやりたい法律を通したいとき、審議会に意見を聞くふりをしたり、公聴会で僕らの意見を聞くふりをする。そして自分たちが勝手に法律を作ったり公共料金の値上げをしたのではない。この通りエライ先生に審議していただき広く国民の意見を聞き、これを尊重したまでの事だ、という。審議会も公聴会もいいダシに使われているのである」と書いています。

この時から、もう三十五年も経っています。何か変わったでしょうか。審議会議案は、ほとんど役人が作りエライ人たちが追認する、という同じことが続いたように思います。しかし一回だけ素晴らしいことが起こりました。一九八二年に国鉄分割、民営化を答申した土光臨調です。行革のため敢然と立ち上がった土光さんの素顔をNHK

が放映したとき多くの国民は感動しました。中曽根さんの国鉄民営化も世論の後押しがありました。

今回、すったもんだの末に出された道路公団民営化案を機に「丸投げ」論争が始まりました。反対派はもとより小泉さん支持だった議員、この間まで応援団の評論家や学者たちもリーダーシップの欠如と言い出し、マスコミは「次は誰？」と騒いでおります。

民営化という大方針を出している小泉さんのやり方は間違っているとは思いません。最高責任者が沸騰した議論の最中に割り込んで、ゴチャゴチャ言えば混乱に輪をかけます。国会を通らないようなものを作ってみても、という意見もありました。

やはり荒法師の異名をとった土光さんと、超エリートの小井さんの違いでしょうか。五人の侍は、よく頑張ったと思います。恐るべき赤字の現状、野放図な公団、のさばる役人、道路族の面々を、お茶の間にさらけだしました。識者は中途半端とか民営化には、ほど遠いと論じますが、それは欲張りというものです。

小泉さんの手法を大衆迎合、政治のワイドショー化と

いう議員は、逆にオフリミットの料亭政治ということです。国民にはどちらが分かりやすいか、言わずもがなです。「丸投げだ」と叫ぶ議員たちも、しょせんは役人への丸投げに決まっています。今の役人、ことに国土交通省は厚生労働省、文部科学省と並んで天下り天国ですから、表づらは議員さんに従うように装って、自分たちの都合のよい法案を作るのは昔からの得意技なのです。

結局は一年もかかって具体案を作るといのですから、のんびりした話です。彼らは、それまでに小泉さんが消えると思っているし、それを願っているのです。もともと役人にはコスト意識はありません。時間の觀念も少ないですから決定に時間をかけても平気です。非効率この上もありません。特殊法人の債務は道路公団、石油公団をはじめとし百五十兆円という人もいます。バブルは日本に狂気をもたらしました。民間は疲弊しましたが、肥ったのは役人集団と、利権をむさぼる族議員でした。護送船団と呼ばれた銀行、公共投資に依存したゼネコンがのたうっておりま。結局は政治と官の保護に甘え続けた人たちが、最後に苦しんでいるのです。

国鉄、専売公社、電電などの民営化は、彼らを刺激しにサービスがよくなったかを国民は知っています。郵政公社発足が決まったら、ローソンの中に郵便ポストも置かれました。ヤマト、佐川との競争は国民に利益をもたらします。小泉さんが郵政事業民営化の一里塚と言うと、これを鼻先であしらう郵政族もありますが、これは虚勢以外の何でもありません。

国と地方との直括事業の高速道路建設は、ささいな問題で本丸は道路公団です。答申を骨抜きにさせない鍵は小泉さんにあります。これは北朝鮮や中国との交渉と違って、国内しかも族議員と役人相手ですからコップの中の話です。十余年の間に日本の首相の權威は、国内外ともすっかり失われました。これを自覚し本気で改革を目指す首相は、中曽根さん以来、小泉さんが初めてです。

民間が成長しなければ国の発展はありません。ところが今は「政、官、官業」の癒着が多すぎるのです。この構造改革に鉋なたを振れるのは、今のところ小泉さんしか見当たりません。小泉さんに必要なのは国民の支持です。僕は投票を放棄することはありません。

アメリカの植民地・日本

藤岡 豊

一九七三年、ニューヨークはマンハッタンの南部、金融・証券の街といわれるウォール街の近くに、巨大なビルが建設中であつた。時折この辺りを訪れた私は、どんな建物が出来するのか、興味津々で見守つていた。

そのビルが、同時多発テロと呼ばれるテロ活動によって無残な最期を遂げ、三、〇〇〇人の犠牲者が出た。ニューヨークからの報道によれば、現地ではこれを「第二のパール・ハーバー」と呼んでいるそうだ。つまり何の警告もなく不意に襲うということに卑劣な行動は、真珠湾攻撃と全く同じというわけである。

しかし真珠湾攻撃の場合、アメリカ政府は日本の通信を傍受してその暗号を解読し、十二月八日の攻撃を事前に知つていたそうだ。つまりアメリカは世界大戦に参加するため、日本を経済封鎖してわざと自国を攻撃させ、受けて立つ形としたのである。

しかしこの二つの事件には、よく似た点があることを指摘する向きがある。それは日本もアラブもアメリカに追い込まれ、刃向かうしかなかったということである。

つまりアメリカに対する恨みを最大限にまで募らせたことが、この結果を引き起こしたというのである。

アメリカは世界の警察官を自ら任じている。しかしこの度のテロ事件については、ユダヤを援護してアラブを窮地にまで追い込んでしまったアメリカの責任だ、と言われても仕方があるまい。

アメリカが巨大な軍事力と経済力を保有し、さらに強力になった背景として、この半世紀に日本をうまく利用したことが挙げられる。まずは日本を手なずけることから始まった。マッカーサーは、戦後の日本に食糧を与えとともに、日本人に反省と贖罪しよくざいの意識を植えつけた。他方、国内では収容所にいた日系人たちに現金を支給して釈放した。つまり懐柔策をとることにより、日本人の能力や勤勉さを最大限に活かして、これを活用することに努めた。結果として日本は大きく発展はしたが、アメリカはその上前をはねることに成功したのである。

この食糧援助というのは、日本に小麦を提供し続けたことである。その結果、日本では米食からパン食への切り替えが急速に進み、アメリカはその後長年にわたって、小麦の輸出で大きな利益を得ることになった。

また日米安全保障条約の名のもとに、沖縄返還後もここに駐留軍の大きな基地を設営した。その目的は日本を防衛するためと言っているものの、実際はそうではなく、アジア、太平洋、中東の制覇を維持するための軍事基地なのである。それが証拠に湾岸戦争では、沖縄から出陣した軍隊が力を発揮して勝利に導いた。

他方イラクでは大規模核兵器をめぐる、一触即発の危機に直面している。世界一の軍事力を誇るアメリカだが、集団的自衛権と称して日本の自衛隊の出動を無理やり実現させた。後方支援とはいっても、戦争に参加するのは事実である。これが憲法違反でなくて何であろう。

さらに財政赤字を補填^{ほてん}するため、アメリカの国債を安い利息で、毎年日本に無理やり買わせ続けている。その金額は三十兆円近くまで膨れ上がったといわれている。

このように日本はアメリカのいいなりになってきてい

るが、これが今まではうまく作用し、よい結果が生まれていることから、全く問題にもなっていない。いわば日本は完全にアメリカの植民地になっていたのである。

ところがここへきて、アメリカの経済に落ち込みの兆しが見えはじめた。デフレが続き、ダウも下がり続ける。大企業でもエンロンやワールドコム、ユナイテッド航空など不正会計や倒産が相次いでいる。日本はアメリカに倣い、生産基地を海外に移転して、その製品を輸入したり他国へ輸出したりする方法をとっている。情報、電機、自動車産業などがその実例である。人件費が日本のわずか三〇五％である中国で生産すれば、採算がよくなるのは当然だろう。しかしこれでは日本の景気はさらに悪化し、アメリカの二の前を踏むことにもなりかねない。

もちろん今日の日本があるのは、その背後で操ってきたアメリカの力があつたのは事実である。しかしもはや戦後ではない。植民地の地位から脱却し、名実ともに独立国としての道を歩むべきである。

宗教戦争が世界を混乱させている現在、無宗教である日本の果たす役割が何かあるのではなからうか。

「日本丸」よ、どこに行く

松浦 武弘

バブル崩壊十二年。

年初以来の テロ報道に、ワールド・カップで踊らされ、美名「ゆとり」で オサボリ教育

教育低下は 免れぬ …

九月になって 拉致問題・・・スター並みの

拉致家族 大学にまで 講演に！

ドウナッテルノ？ わが国は？

小泉改革 如何した？

千兆円超す 借金積んだ 大泥舟の 「日本丸」

沈没するのは 本年か？ 来年か？ ハタマタ延命

再来年？ ハイパー・インフレ到来に

肝・腰すえて 備えよう！

これは、本年度の私の年賀状である。

バブル崩壊以来、十二年を経過する。死に至る病のデ

フレспायラルは深刻さを増し、失業率は高まり、銀行の不良債権は増え続けている。経済白書によると、日本は資産デフレでこの十二年間に千百兆円もの資産を失ったという。

国債の発行残高は八百十一兆円で、隠れ借金と地方債とで政府全体の借金総額は一千兆円をはるかに超える。わが国には個人資産が千四百兆円あるといっているが、通帳に数字が打ち込まれているだけのことである。

構造改革を標榜した小泉内閣は何も出来ず、何もせず問題を先送りしているだけである。昨年一年間を振り返っても、倒産は増え続け、リストラは加速し、従って失業者は増大した。一方、株価の低迷は続き銀行、損保、生保等の不良債権は増え続けた。

小泉内閣は、心地よい「ユトリ」という美名の下に、今後の日本を担う若者を「サボラセル」、土曜日休日を法制化させた。これは日本の教育の三十年いや、五十年の後退となること必至である。

戦後、GHQの指導の下で日本は解体されたが、彼等

の最大の改革が日本国民の愚民化政策であった。新しい六・三・三制の導入がその元凶と考える。確かに新制となり、教育の機会均等という点からは、平等になり、誰でも大学に就学できるようになったが、しかし、旧制の高等学校を無くしたことが、一番の問題である。実際に新制の中学校、高等学校の六年間が、旧制の中学校の五年間にあたり、しかも一貫教育ではない。

一部の私学では一貫教育を行い、五年間で公立の六年間のカリキュラムをすべて終え、六年目の一年間を受験勉強に当て、大学合格率を高めている。

私自身は新制高等学校の十期生であり、旧制高等学校については先輩から聞き、教えられたに過ぎない。私たちが大学受験で使った参考書には、例えば英語の山崎貞著「自習英文典」・「英文解釈研究」、数学の森繁雄著「解析一の研究」・「解析二の研究」等には、旧制の一高、三高などナンバースクールの問題がたくさん掲載されていた。したがって私自身、旧制の高等学校の受験勉強をしているような錯覚に陥った覚えがある。

旧制の高等学校の学生は三年間の寮生活を通じ、先

輩・同輩・後輩が理系・文系の区別無く切磋琢磨せつさくましあった。弊衣破帽へいはぼうのバンカラを是とし、寮歌を高吟し青春を謳歌する中で人生を語り、哲学し、徹底的に勉強、人生観、世界観を確立していった。

新制となり、大学前半の二年間が旧制高校の三年間に相当する教養課程となったが、期間的にも内容的にも旧制高校とは比較にならない。日本の今後の教育を担うのは私学以外にはないと思う。

日本だけの経済が破綻し、教育、政治等すべてが閉塞へいそく状態にあるのではない。超大国アメリカも国家的には破綻しており、教育界は荒廃の極みにあり、エンロン、ワールドコム等の大型倒産は、大統領、政財界を巻き込んでおり、巨大会計事務所までが関与している。今後のイラク問題の処理如何によっては、中東紛争は避けられず、原油高騰は日本にとって死活問題となろう。

数年以内に、政府は預金封鎖を行い、ハイパーインフレに持つていくこと必定である故、我々は胆を据えて、対処しなければならぬ。

野蛮に抱かれて

吉井 米三郎

熊・八 「おめでとうございます。本年もよろしく願います」

熊 「新春、のっけからベレー帽の特殊部隊の前に『イラク攻撃の準備は整った。アメリカ軍は世界一だ』兵隊たちは歓声をあげ、大統領がニンマリする。蛮刀を振りかざしてみせるフセインとは目クソ鼻クソだね」

八 「そういえば主婦からの新聞投書に率直なのがあった。『キリスト教を信じる人たちはどうして気に食わないと、すぐコブシを振り上げて地球の反対側までも行って爆弾を落とし、人を殺すのか。神様は〃汝殺すなかれ』とはつきり命令しているのに分らない』とね」

隠居 「一九〇六年にフランスの首相となって世界で初めて政教分離を実行したG・クレマンソーがアメリカ合衆国を評して『奇跡的にも野蛮から退廃へ直行した歴史上唯一の国だ。普通は通過する文明という時期を通らな

いで』……ナチスを逃れアメリカへ亡命したアインシュタインやオッペンハイマーなどが、戦争抑止のためとして開発した原爆を反対を押し切って広島と長崎に投下した。ベトナム問題同様、全く罪の意識も、犠牲者に対する哀悼もないままだ。原爆投下を決意した瞬間からアメリカは野蛮へ戻ったんだな」

熊 「韓国の友人が、昨年十一月に亡くなった一九三六年ベルリン・オリンピック・マラソンで日本人として金メダルをとった孫基禎さんのことで、日本人の傲慢さは、朝鮮半島の植民地時代と変わっていないと落胆していた。彼によれば、孫さんは植民地解放後に韓国へ戻って活躍し、日本に金メダルの登録を韓国へ移すよう要請したが、そのまま。しかも孫さんの優勝に、あれほど国を挙げて歓喜した日本だったのに、その葬儀に一人の日本人の参加も、一基の供花もなかったとか」

八 「どうも分からないのは、日本が明治以降に犯した犯罪や加害について、不幸な時代があったとか、遺憾に思うとか言って、相手国にも、日本国民にも具体的表明がないんだな。拉致問題にしても相手が国家的犯罪とし

て認めているにもかかわらず、植民地時代の強制徴用労働問題・慰安婦問題等については一切ふれていない。おそらく外交交渉の場では具体的に挙げられているのだから、なぜ日本国民には公表し、認識させようとしなのだろう。官僚、40年体制と、その駕籠^{かご}に乗っかつてる政治屋たちのせいなのかも知れないね」

隠居 「原爆投下とともにアメリカは野蛮人に戻った。だから防共十字軍とかベトナム民衆を殺傷し枯れ葉剤による後遺症も残しながら、一片の反省も謝罪もしない。ほとんどアメリカの所業に起因する九・一一テロへのショックは、大統領を乱心させ、テロ対策でアメリカに賛同しない国は敵だと世界に号令するまさに帝国の姿。

第二次大戦後日本とドイツは、ともに廃墟から立ち上がった。初代の西独アデナウアー首相は戦時中犯した国家犯罪と与えた被害を徹底調査し、相手国の承認を得た上で自国民に公表し、自省と懺悔を要請し、あと各国を訪問して深謝し、賠償を約した。何世紀にもわたる抗争・非友好の独・仏関係も清算し、さらに人類社会の大きな進化といえるEU体制の構築に両国が深く取り組ん

だのだ。同じ廃墟から立ち上がったわが国は人類史初めての戦争放棄憲法をかかげたスタートとなったが、冷戦構造に組み込まれ、安保条約の締結、自衛隊の創設、アメリカの核傘下と基地の提供へとアメリカに抱かれたまま犯した罪への自省も謝罪も忘れたごとく経済大国へと向かった。

八 「一九五五年には保守合同があり、現行憲法の自主的改正を盛り込んだ政綱が採択され、わが国は大きく面舵^{おもかじ}を切りましたね。ところで米国の二十一世紀の帝国戦略での仮想敵は『悪の枢軸』ではなく台湾を担保として『中華人民共和国』で、日本・台湾は不沈空母として韓国ともども米本土防衛の盾という位置付けた」

隠居 「昨年日中国交三十周年でも、中国側では歴史意識を第一の課題とした。つまり侵略戦争の過去を日本社会がどう見ているかという問題だ。靖国神社公式参拝や『大東亜戦争』弁護の教科書の公認、憲法九条の改定と軍事同盟の強化は有害無益、今こそ日・中・韓が軸となつてEUに次ぐ東アジア連合を構想すべき時期だな」

熊 「野蛮に抱かれたまま殺されたくないね」

核不拡散条約とデフレ対策

村田 孝四郎

（核不拡散条約）核不拡散条約とか核拡散防止条約というのはおかしい。核廃絶条約か核不保持条約でなければならぬ。第一、これまで持っている国はいいが、これから持とうとする国はいけない、なんておかしい話だ。おまけに持っている国はさらに実験を続けて核兵器の向上に努めている。しかも、核保有国は核の力で核を持たない小国を従わせようとしている。大国の横暴としか言えない。

一九六二年のキューバ危機の際、戦争に至らなかった理由は米ソとも核戦争を恐れたからで、核が戦争の抑止力となった。核保有国から脅しや攻撃を受ける恐れのある国が核を持とうとするのは当然のことで、正当な権利と言える。アメリカの完全な属国になり下がっている日本のような国は核を持つ必要はないが、イラクや北朝鮮のような完全な独立国は核を持たなければ、国際政治外

交上核保有国と対等な立場に立てない。

浅はかなブッシュがイラクを攻撃できるのもイラクには核兵器がないと確信するからで、そうでなければ到底攻撃できない。イラクが核兵器や生物化学兵器を使えば、アメリカ軍の損害は甚大なものとなる。そのためにアメリカは国連を使って査察を強行した。イラクは丸裸にされて、ケツの毛まで数えられたようなものである。独立国としてこんな恥辱はない。サダム・フセインは査察をよくぞ受け入れたものだ。この上、米英の軍事攻撃を受けるというのでは踏んだり蹴ったりで、これは強大国によるリンチ以外の何物でもない。

アメリカは「悪の枢軸」国家が大量破壊兵器を持つことを許さないという。ならば、「悪の帝国」と呼んだ旧ソ連や中国が核兵器やミサイルを持とうとした時、武力で阻止しようとしたか？ できなかったではないか。それは、戦争を仕掛けても勝てる自信がなかったし、自らも甚大な損害を被ることが明らかだったからである。

第二次世界大戦後、アメリカが意に染まぬからといって攻撃した国はベトナム、グレナダ、パナマ、イラク、

リビア、セルビア、アフガニスタンなど、いずれも核による反撃力のない弱小国ばかりである。

(デフレ対策) 世の中デフレ一色である。その対策として、やれ不良債権処理だの、やれ需要創出だの、やれ新規事業だのと、かまびすしい。しかし、考えてもみよ。需要が供給を上回っている時は常にインフレ傾向で、企業は儲かり景気は持続する。だが、いったん供給が需要を上回ってしまったら、物価が下がるのは当たり前で、今の日本はそういう状態にあるに過ぎない。需要が供給を上回らない限り、デフレからは脱却できない。極めて単純な話だ。しかも、もう需要の増大は期待できない。

戦後、日本は物が量的にも質的にも品種的にも極端に不足していた。だから何でも作りさえすれば売れた。どんどん設備を拡張し、原材料を輸入し、高賃金を払って労働者を雇い入れ、無制限に生産した。お陰で物は潤沢になり、労働者も裕福になった。高度成長を謳歌した時代である。三種の神器といわれた新しい製品も次々に市場に投入され、日常生活はこの上もなく便利になり生活水準は目覚ましく向上した。

今や物は有り余っている。家の中は冷蔵庫、洗濯機、乾燥機、掃除機、電子レンジ、エアコン、テレビ、ビデオ、パソコン、コンポでひしめき、街行く人は携帯電話、デジカメ、ムービーカメラを持ち歩き、道路は車で溢れ返っている。使い捨て製品でゴミの山が築かれ、大量の食品が手も付けられずに捨てられている。

もうこれ以上は何も要らないというのに、企業は相変わらず生産を続けている。生産調整をしようものなら、独禁法違反だ、談合だと罰則を受ける。そのため供給が需要を大幅に上回って価格が下がりデフレとなった。当然の成り行きである。

電気、ガス、水道があればこの上もなく幸せで、何でもいから日に三度食べられることのみを夢見ていた五十年前から見れば、今は天国である。

もう生産活動は止めて、みんな遊んだらどうか。供給が止まれば必ずインフレになる。今は需要がないのだから供給の方を止めるしかない。資本主義市場経済はもう時代遅れだ。これからはいよいよ社会主義計画経済の出番だ。カール・マルクスが予言していたではないか。

神の国の恐竜たち

西島 力

一九五二年、日本はサンフランシスコ条約によって占領状態を脱し独立を回復した。同じ年、私は就職した。会社は国際化時代に備え社員の英語教育のために一人の中年のアメリカ女性を招請した。

当時の日本人にとって、アメリカ人は最も優れた国民であり、その中でも中年女性は最高の人種であると思われていた。その先生は、日本人に英語を教えるよりも「民主主義とは何ぞや」ということをたたき込むことに情熱を抱いているように見えた。先生は言った。自分と異なった意見に対しても寛容に耳を傾ける、それが民主主義です。

ある日、選挙をテーマにした自由討議ということになった。私はタドタドしい英語で、アメリカの大統領選挙をニュース映画で見ると、華やかなお祭りで、およそ政見の争いではない。これは二大政党制に原因があり、本

質的に差のない政党間での民衆不在の権力のキャッチボールに過ぎないのではないか、というようなことを言った。

途端に先生はまさに怒髪^{どはつ}天を衝く形相でわめきだした。「あんたはコミュニストだ」とも言った。よしんば私がコミュニストであろうとも、その言論を尊重するのがデモクラシーだと、先生が教えて下さったばかりではありませんか、と私は言いたかったが、私のつたない英語では、世界で最もエライ人種が自国語でまくしたてるのに対抗しうべくもなく沈黙するのみであった。

のちに学んだところでは、アメリカでは十九世紀半ばころから「アメリカ人が周辺の他民族を教化するのは明白な天命（マニフェスト・デステイニー）である」という思い込みが広まり、こんにちの「アメリカがすなわち正義であり、それに逆らうものはナラズ者だ」という教義に繋がっている。それはアメリカは神様に最も近いという自信がしからしめるものであろうし、アメリカの変質が十九世紀に始まったということかもしれない。

第二次大戦後の大統領で最も人気のあるケネディの演

説で「国家が国民に何をしてくれるかではなく、諸君が国家に何が出来るかを考えよ」というのが名言だということになっているが、私には腑に落ちない。話が逆ではないか。国民、つまりピールは国家のためにあるのではなく、国家がピールのためにならなかったら、そんなものはとりつぶして新しい国家を作ればいい。それがアメリカ建国の精神であり、当時これと濃密な連携にあったフランス革命の理念も同じである。さればこそ後に、米仏友好の証にフランスから贈られた自由の女神が今に至るもハドソン河畔に屹立しているのである。あれは観光客用の招き猫ではない。

かのチャップリンという、人間に対する限りなき優しさを体現した珠玉のようにきらめく存在に、「非米」の烙印を押して追放した時、アメリカは取り返しのかねことをしてしまったのではないか。

ブッシュ大統領が十字軍宣言に続いてイラン・イラク・北朝鮮を悪の枢軸と決め付けた際、世界は口をあぐりと開けたが、名指された方のイランの元大統領ラフサンジャニ師はブッシュ大統領を「恐竜の頭にスズメの

脳みそ」と評した。脳みその大きさはさておいて、米国の大統領を恐竜になぞらえるのも言い得て妙ではないか。

ソ連が崩壊してアメリカが並ぶものなき世界の覇権強国になってからでも、レーガノサウルスだとか親子連れのブッシュサウルスだとかがノシ歩いている。彼らが好む食べ物の主として次のものである。

(1) 石油 (2) 星条旗 (3) 神の恩寵

かつての恐竜は約六千五百万年前、巨大隕石の地球衝突に起因する環境異変により絶滅したという。ローマ帝国は過剰繁栄の最中に没落した。盛者必滅、現代の恐竜の世紀もいずれ終焉を迎えるだろう。それが何時どのような形で訪れるのかは予測不能だが、問題は、それ以前に地球と人類の破滅が来てしまうかもしれない。

その大半の責任は現代の恐竜たちにあるのだが、その危険について一番鈍感なのが覇権国家アメリカ自身なのではないかと思われる。

烈々として真実を追求したアメリカ・ジャーナリズムの栄光は何処に消えたのか。

人口減はマイナスだけか

刀祢館 正久

最近、少子化が進むにつれて、人口の減少傾向を指摘する声が一段と高まっている。確かに子供の数が減るのはなんとなく心細い。特に日本のように資源が乏しく、人的資源の重要さが強調される国においてはなおさらである。しかし発想を少し変えてみよう。人口の減少はそれほど由々しい問題だろうか。

総務庁によると、二〇〇〇年十月一日現在の日本の総人口は、一億二千六百九十二万五千八百四十三人だった。ざっと一億二千七百万人である。前回の調査より約百三十五万五千人増えたものの、増加率は一・一％で戦後最低だ。最近の結婚年齢の高齢化や出生率の伸び悩みで、極めて近い将来に人口が減り始めるのは明らかだ。

だが日本の人口は、他の国に比べてどの程度の水準だろうか。世界の二百に近い国の中で、日本の人口は現在、中国、インド、米国、インドネシア、ブラジル、ロシア、

パキスタンの次あたりになる。世界でも八〜九番目といったところだ。決して少ない方ではない。

いわゆる先進工業国の中ではどうか。米国、ロシア、カナダは国土が広大だから除いて、その他の先進工業国を見よう。最近の統計では、ドイツが約八千二百万人、フランスと英国がほぼ六千万人、イタリアが約五千七百万人、韓国が約四千六百万人だ。これらから概観すると、世界の国土が比較的狭い先進工業国の人口は、だいたい五千万人から八千万人の間に納まっていることが分かる。日本の人口は、現在でさえ国土の割には多過ぎる、といってもいいくらいなのだ。

それに人口は経済発展に密接に関連するのはいうまでもない。日本は右肩上がりの高度成長時代に人口は急膨張した。人口の急増が高度成長を支えたといってもよい。しかし経済が安定期または停滞期に入ると、人口の増加は雇用や住宅などの分野で深刻な問題を生じる。海外情勢のバランスがいったん崩れると、エネルギーや食糧の危機にも陥りかねない。現在の日本が、デフレ不況下で、狭い国土の中に一億三千万人近くの人口を抱えながら、

年金制度や医療制度が一応行き渡り、失業率が五・四％程度に落ち着いているのは、見方によっては「現代の奇跡」といってもよいのだ。

したがって、いたずらに人口の減少を嘆く必要はない。しかし資源の乏しい日本にとっては、優秀な日本人こそまさに何物にも代え難い資源であることも確かだ。ではどうすべきだろうか。

重要なポイントは三つある。一つは「適正人口」の構想である。戦後の日本は一億二千万〜三千万人の人口に適応する経済社会を構成してきた。それが高齢化、少子化の時代になってきた。慌てず騒がず、次のしかるべき経済社会では、適正規模の人口はどれくらいか、の構想を冷静に描くべきだ。当面、一億人くらいのコンパクトな国家を考えるのが一つの案である。

次のポイントは、専業主婦はもちろん、仕事を持つ女性にとって安心して子供が産めるような環境作りを急ぐことである。具体的には児童手当の充実や税制の再検討、保育所・幼稚園の整備、企業の兼業主婦への一層の理解などだ。「もう一人子供が欲しいが、住宅が狭いので」

という声も多い。住宅金融制度などもこの角度から見直すべきだ。

第三は教育の問題である。少子化に伴い、子供の出生率はある程度減少するのはやむを得ないとして、それだけに教育は一段と重要である。少ない資源は一層磨きをかけ、才能を伸ばす必要がある。教育基本法を時代に適合するよう、再検討するとともに、現行の六・三制教育制度の根本的な見直し、優れた教育者の養成などにもっともつと力を入れるべきだ。戦後、経済発展の陰で、教育がなおざりにされてきたように感じるのは筆者だけではない。少子化の今こそ改めて教育の重要さを強調したい。

以上三点、日本が不況に強く、しかも世界に貢献する尊敬されるべき国家になるために、今こそ大いにチエを絞ろう。それが次の世代への贈り物でもある。

朝鮮から来た少年たち

石川 正達

あれは「拉致」ではなかったかと、いま思っている。一九四五年終戦を間近に控えた初夏の出来事である。

この年二月、陸軍見習士官となって岐阜・各務原近辺に展開する地下施設設定部隊、つまり穴掘り部隊に配属された。各務原に飛行機工場がある。近くの山にトンネルを掘って発動機工場を移すという。本土決戦に備えてとはいえ、いささか手遅れと思える作戦である。

鑿岩機で岩に穴を開け、ダイナマイトを仕掛けて掘り進む。切りくずされたズリ（岩くず）は炭車で外へ運び出す。昼夜別なく三交代の二十四時間作業である。大工や土木・炭坑の仕事の経験者など古年兵を中心に編成されていたので作業は手早い。六月には入り口付近のコンクリート打ちが始まっていた。

何百メートルも掘り進むと、ズリが山すそに溢れるほど溜まる。これを平らにならすため勤労奉仕隊が来てい

た。午後四時から十二時までの深夜勤務の時だった。作業班をまとめる兵長が浮かぬ顔をしてやってきた。

「見習士官殿、勤労隊のヤツら働かないで寝ています」

私はズリ山の脇で休んでいる十数人の勤労隊のところへ行き「なぜ働かないのか」と問い詰めた。

「腹減って働けません」と異口同音に言うではないか。

「兵隊さん、ご飯の弁当。私たち、ありません。いつも雑炊の食事。宿舎来て、食べもの見てください」とたどたどしい日本語で話す。朝鮮から動員されてきた少年たち、まだあどけなさが顔に残る少年たちであった。

同僚の見習士官と一緒に彼らの宿舎となっている小学校を訪ねた。確かに軍隊とは比べられぬほど粗末な食事である。引率の親方衆は畳の部屋で酒宴中だった。同僚が「ちゃんとしたものを食わせてやれ」と怒鳴りつけて引きあげた。私たちが宿舎を訪れたことを好感したのか少年たちも少しは働くようになった。

地下施設の完成を前に「秋には岐阜提灯の行列だ」といった噂が巷に流れ始めて終戦を迎えた。あの少年たちはやがて朝鮮へ帰ることができたに違いあるまい。

× × × ×

日本の歴史始まって以来、朝鮮とのかかわりは古い。拡張政策を進める明治政府は朝鮮と数年の紛争が続いたあと一九一〇年日韓併合によって朝鮮を日本の国土とした。朝鮮の住民は日本帝国臣民として「皇民化」を強制された。半島出身者は、関東大震災の際の流言による朝鮮人虐殺事件が語るように蔑視、冷遇の対象とされた。私も少年のころ「内・鮮融和」と教育されながら、朝鮮人と聞けば軽視した眼で見ていたように思う。

戦時に突入、労働力確保のため国民総動員法や国民徴用令が公布され、在日朝鮮人を含めて国民の徴用が始まった。一九四四年には「半島人労働者移入ニ関スル件」が閣議決定され内地労務に動員された。これによって少年たちは我々のところへ送り込まれたのだらう。

この戦争で朝鮮から駆り集められた労働者は百五十万人、女子挺身隊の名で従軍慰安婦として数万人が連行されたという。彼らの心情として日本は異国であり、異国の戦に巻き込まれて拉致された思いであつたらう。

戦後、朝鮮は大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国（北

朝鮮）とに分かれた。日本は韓国と友好関係を結んでいるが、北朝鮮とは強制労働の賠償など戦後処理を終わっていない。北朝鮮はいま「將軍さま」金正日の独裁下にあって反米、抗日路線を走っている。拉致事件も起こった。国を強めるため、かつて日本が朝鮮人徴用を強いたように北朝鮮が日本人を拉致して働かせることに、それほど罪悪感を抱かなかったとしても不思議ではない。

小泉内閣は「拉致問題の解決なくして正常化なし」と言っている。しかし、過去の日本が強制した徴用も、同時に解決しなければならぬ問題ではなからうか。

それにしても独裁者が支配する北朝鮮は恐ろしい国である。日米開戦当時の日本の、軍部が独裁支配し米英を鬼畜呼ばわりしていたことを思わせる。あの真珠湾奇襲のように、いつテポドンが飛んでくるか知れない。

こんな光景が頭に浮かんだ。地下工場づくりに駆り出されていた朝鮮の少年たちが北朝鮮に帰って、日本人拉致グループの指導者となって活躍している光景である。あどけない面影は消えていた。拉致事件の多発した七〇年代に、彼らは四十代の働き盛りとなっている。

自由テーマ



新宿御苑 睡蓮

私の発見……やはり生は長命が好い

榎 本 喜三郎

昨年の四月末にちょっとした不注意から、玄関の板の間で足を滑らせ、体を一回転させた後ドシンと強く尻もちをついて板壁に背中をぶつけ全身をひどく傷めつけた。あちこちが猛烈に痛いのを我慢して四つんばいになって、やっと自分の部屋に戻りベッドに横になったが、ベッドにはい上がるのに大変苦労した。家内に身体を調べてもらったが打ち身の痕はない。休日続きなので、救急車に来てもらうこともあるまいと、事故から三日目に整形外科医の診察を受け、レントゲン写真を撮った。

医師はそれを見ながら、独り言のように「事故のあった日に来てくれたら、すぐに入院してもらったね」という。で私には「腰椎NO1圧迫骨折」と病名がつけられ二、三カ月ひたすら安静にして養生せよ、ということになった。そしてこのけがは腕や脚の骨折よりも始末が悪く、治ってからリハビリに励んでも元の通りには回

復しない。押しつぶされた腰椎が、そのままで固まるのを待つほかに手はないとも聞かされた。

かくて二カ月と数日ひたすらベッドで静養した。その間に五回レントゲン写真を撮った。七月初めになって「傷めつけられた腰椎一個がどうやらそれなりに固まったようだから、これで一応治癒したことにしましょう」とはなはだ頼りない医師の言葉に、看護婦が、それまで夜も昼も付けていたコルセットをはずしてくれた。

この休養の間に私はいろんなことを考えた。それまでは気にもしないでいた「死」を何となく身近に感じ、それについて考えるようになった。

「生命は誕生と同時に死に向かつて一歩を踏み出す」という言葉に類する文句をししばし目にして来たが、この言葉を身近に感じたのは、今度の腰椎骨折という生まれ初めてのがで、しかもそれが日数を経ても元の通りにはならないと医師の宣告をうけてからである。

そこで私はこの休養時間中に図書館から借りて読んだ「老年」とか「寿命」とか「痴呆」などに関する本から

書き抜いてノート三冊に取ったものを読み返してみると、そのなかに「老年になってから死んだ人は、本人も家族も死を平静に迎える人が多い。介護が充分にできなかったことを後悔するのは、突然死の場合以外には少ない」と書かれている。老人の大多数は、配偶者や子供に見守られて死に旅立っている。さらに統計上でも多くの老人の家族は老人の死を悲しみつつも、生前に充分な孝養を尽くすことができたと考えているし、死んでいく本人の大多数も、それなりに満足すべき安らかな最期を迎えていることが示されている。私が特に注意を惹かれたのは、老人も六十五歳以上の人を対象としているが、それがさらに七十歳から八十歳へと加齢とともに平穏な死を迎える例が多くなると書かれていることである。

現在八十八歳の私が思いがけない事故に遭ってから死を身近に感じたのは、言うまでもなく生きている年月が先に延びれば、それだけ死に近づいているわけだし、人生で余計に生きた体験を重ねているのだから、死をより身近に感じ、それだけ生への執着が薄れてくるというこ

とであろう。これは長生きするだけ、やり残していると思うことが少なくなっていることでもある。

八十歳の生よりも八十五歳の生は、それだけ余計に生を過ごしている。その分だけ生の残存分が減っている。だからそれに対する執着は前よりも薄れているのは当然だし、それが九十歳になれば一層その度が進むことになる。反射的に死に対する親近感が深まり、死は一層受け入れ易いものになってくるのであろう。

かくしてさらに生が伸びれば、やがてその生は死と合一する境地に到達することになる。ここに到って、生は何の不都合もなく死と入れ替わることになるわけである。生を離れ、死を受け入れる老人本人はもちろん、家族も、親族もここにいたって悲しみつつも満足感に浸ることができるといっわけである。こう考えてくると、我々は健康な生のある限りはそれを延ばすことに精励すべきであり、それが死を苦しみも悲しみもなく受け入れる確かな道であることを悟ることになる。

やはり生は長命が好い。これが「私の発見」である。

老いのつれづれ草

野村 嘉彦

平成もついに十五年となった。月日の経つのは早いものと人は言う。わが身を振り返れば、すでに八十五歳となった。どうしてそんなに長生きしたのかと問われれば、分からないと答えるのみである。

思えば長かった一生である。多くの友人に先立たれた。仏教で言う前世、現世、来世の中で一番短いのは現世。せいぜいで百年である。それを戦前は人生五十年と言った。論語にもそう書いてある。敗戦後幸いにも日本人の寿命は異常に長くなり、皆長生きとなったが、その平均を乗り超えて生きてきた。一度しかなく決して後戻りできない現世は楽しくも苦しくもあり、そのうちに来世へと進む。

時代の移り変わり

敗戦後は滅私奉公から滅公奉私と移り変わった。戦前はすべてお国のため命をなげうつのが日本人の本命と

教えられてきた。国があつての自分であつた。国民の一人になるまで戦い抜くのがお国のためと教育されてきた。すなわち国家があつて、国民の存在があつた。

それが広島原爆投下を契機としてもろくも崩壊した。私の大学在学時代、教練は自由科目であつた。我々は時代の推移を見て教練という科目を選択した。配属将校の予備役の大佐は上機嫌で挨拶した。

「諸君はよく時局を認識されて教練をとられた。かく言う小役もいわば廃品回収の一つとして現役に復帰できた。嬉しい限りである。諸君とともに頑張ろう」

また当時文部省にいられた優秀な教授連が京都帝大にたくさんおられた。それらの方々をわが大阪商科大学の河田学長が引き取った。そのお陰で我々は素晴らしい講義を聞くことが出来た。特にマルクス主義の根底に関して徹底的な学習が出来た。

民主主義のおかしな仕組み

敗戦とともに軍国主義、お国のために一命を投げ打つ思想は吹っ飛んだ。個人主義のおいしいところのみもて

はやされた。民主主義は個人の権利と義務が相まって成り立つが、侵害に無頓着である。

個人は生まれながらにして不平等にもかかわらず平等だと考える。そのために他人の自由を平気で踏みしめる。たとえば裁判で国家が敗訴になったとき、乾杯する傾向がある。実は国家は国民のものであり、負けて税金で賄わなければならないのだが、それが案外忘れられている。国家の主人公であるにもかかわらず、最近やたらに他を非難したり、上げ足とりに終始して喜んでいる光景をよく見かける。ちょっと平和ぼけしているのではないかと思う。

しかしながら力無き老人はまず感謝の気持ちで若い世代の活躍をできる限り応援しなければならないと思う。出来もしないのに、憂国論など吹かないことが肝要であろう。

テロの脅威

二〇〇一年九月のニューヨークの貿易センタービル・テロ事件は世界を一変させた。自由国の人々は初めて逆

点満塁本塁打を浴びたような衝撃を受けた。テロの恐ろしさを味わった。余りにも無残である。

とにかく民主主義の美酒に酔いつぶれるより、それを守るためには仇敵テロからいかにしてわが身を守るかを真剣に考える時が来ている。残りの少ない人生をそのことに捧げたい。

論語に七十歳にして惑わずとあるが、実はますます惑うのである。



飯田橋

回想の散策で生きる

芦刈 克

年老いたせいか、年の暮れのせいか、これまでの出来事が想い出されてよく頭をよぎる。

ここ三、四年の間に、親しくしていた友や人生を先導してくれた師の何人かが逝ってしまわれた。ぼつりぼつりと訃報を聞く中で見た今年の紅葉は、一段と鮮やかで散り急ぐ葉に人の儚さ^{はか}を重ねたりしている陳腐な私に木々は構うことなく冬支度に追われていた。

生きるということは、心ゆくまで、しっかりと目で見、耳で聞くだけでなく、あらゆる知覚を総動員して体得したのもろろが五感の深いところから生まれ、そうして感じたことが言葉になるまでの道のりだ、と思っている。

大人でも子供でも即座に言葉にできない思いや、一言では言い尽くせない感情、それを表す適当な表現に行き当たらないもどかしさ、そういう状況を黙々と生き、行

きつ戻りつ歩んで行っている。その瞬間こそが『生きている』そのものであると思っているからだろう。

いつ、どこで、だれだったか思い出せないほど遠い昔ではないが、つい昨日のようでもある。

自分や自分の回りのあり方を、少しでもいいから変えようと努力することが、自分への愛着を生む源である、と言っていた友がいた。

「人生の仕組みは、定めとそれに対する思考・行動、つまり運命と努力という二つの力からでき上がっている。でも、どうにもならないもの、それを変えようとするのが努力だ」ということだった。

思考は考え。考えたことだから、理論や言葉だけではなく、人と会った時のお辞儀の仕方とか、さよならと手を振る仕草とか、態度振る舞いに現れるもののことだ。私たちの、その日常のささいな無意識ともいえる行為行動が重要で、その日常的な、何気ない態度や生き方が少しでも変わるなら、自分を取り巻く周辺も必ず良い方向へ変化していくのではないだろうか。

日常の自分を見つめ直すそうと思っている。普段何を考

え何を望み、そのためにどんな努力をしているのか、という自己点検だけは忘れたくはないからだ。

目標を失い、自信がなくなり、自尊心が消え、鬱々とした時に、もっと内に目を向けなければ、と思い立つのが自分の足で立つ、『自立』であり、足を知ることに『自律』であつた。

でも、人の生きてゆく道程の折り返し地点を過ぎてからでなくては、人生というものの深淵をのぞけない私のような凡人であつても、失うことで空く穴の大きさはなかなか埋め難く、迷路に踏み込んでしまったような気がする。することがいまでもある。

春に備えて冬支度にいそしむ木々のようなたくましさ。を少しでも持ちたいと念じて「補う」ことのあれこれ。を考えるその中の一つが、逝った先人たちが残してくれた言葉だ。わかりやすく、胸に響くように、覚えておける一言。忘れられない一言。その言葉が力になった。

気負いもなく、銜ていもなく、新鮮さと誠実さの中にいつの間にか引き込まれてしまうような好い人たちだった。「知が力」と、手に入れた情報や知識が、あつとい

う間に古くなっていく。今、問われているのは環境に左右されない強い自分を築くことである。それは常に学び、振る舞う中にある。

時に、等身大の自分が見えなくなる。成功には過信、挫折には卑下。他人の評価に自分の寸法を合わせる。自分らしく生きることは、平凡なようで実は難事である。

目をつぶり、生まれてこのかた出会ったもの、愛したものの、アレヤコレヤを次から次へと思ひ出す。そしてああいいう人、ああいいう物、ああいいう風景と出会ったから、半生としてまあまあだったかなと、記憶の中をぼんやりとさまよい楽しむことが多くなった。これだと思う。

「足で立つ自立は易く、足を知る自律は難し」を反芻はんすうしながら、カール・ブッセの『空遠く』から、『なお遠い幸い』を見つめ、描き、サミュエル・ウルマンの『年を重ねただけでは、老いぬ』をなぞるように、欲張って生きていこうと願う昨今である。

こじつけだろうか。一念の念は、今の心と書く。過去はもうない、未来はまだない。今、この心から、すべてをどんどん良く変えていくドラマが始まるからだ。

「魏志倭人伝」人名・職名考（上）

山 辺 武 磨

晋国の文人陳寿が編纂した「三国志」のうち「卷三十・魏書・烏丸・鮮卑・東夷伝倭人条」（以下魏志倭人伝）の中に現れる人名や職名は、全部漢字で表記されているので、極めて難読であるけれども、私として一応の結論を得たので、以下行を追って説明する。

「魏志倭人伝」六行目に「至対馬国。其大官曰卑狗」とあるが、これは人名ではなく職名で、江南語で「ヒコ」（首長の意）と読む。江南語は日本語の直系祖語で、かつて江南の呉・越地方で話された言語であり、言語学上ウルル語とアルタイ語の中間に位置するものと考えられ、その特徴の一つに母音調和を持つ。また「副曰卑奴母離」とあるが、これは江南語に従えば、倭王国中央政府から派遣された辺境守備隊司令官を意味する。

九行目には「至一大（いき）国官亦曰卑狗。副曰卑奴母離」とあり、対馬国の場合と同じである。

十四行目には「至末盧（まつら）国」とあるが、不思議にも首長等の職名の記載がない。転写の際、欠落したのであろうか。

十六行目には「到伊都（いと）国。官曰爾支（にし）、副曰泄謨觚（えいもこ）・柄渠觚（へいきょこ）」とある。爾支は江南語の「ヌシ」（首長）を漢字に移したもので、人名ではない。

泄謨觚は韓国系貴族泄家の出で、謨觚は高官の職名である。また同様に、柄渠觚も韓国系貴族柄家の出で、渠觚は謨觚に次ぐ高官の職名であろう。

十八行目には「東南至奴国百里。官曰児馬觚（じまこ）副曰卑奴母離」とあるが、この人は韓国系貴族児家の出で、世襲首長を意味する馬觚を名乗っている。副の卑奴母離は対馬国、一支国と同様、倭王国中央政府派遣の武官であろう。

十九行目には「東行至不彌（ふみ）国百里。官曰多模（たま）副曰卑奴母離」とあるが、多模は恐らく「賜う人」という意味の江南語であって最高の貴人であろう。卑奴母離は前に同じ。

二十二行目には「東至投馬国水行二十日。官曰彌彌（みみ）副曰彌彌那利」とある。彌彌は「最美」という意味の江南語で、不彌国と同じく最高の貴人の意味するものである。彌彌那利は将来最高の地位に就く人という意味で、太子を暗示する江南語であろう。

二十三行目には「南至邪馬壹（台は誤記）国。女王之所都。水行十日。陸行一月。官有伊支馬（いきま）。次曰彌馬升（みます）。次曰彌馬獲支（みまわき）。次曰奴佳鞮（なかない）」とある。極めて難解であるが、いず



池の鯉……庭園美術館

れも倭王国の都である邪馬壹国を防衛し（前三者）または、行政を司る高官の出自と職名を表示しているものとして、次のとおり解釈する。

最初の伊支馬は特に注目値する。伊は彼の姓であるが、伊家は呉王夫差の直系の子孫で、伊都国王を数名出した伊都国筆頭の名家であり、後に述べる伊声耆（いせいき）も国家の出身である。支馬は名前ではなく職名であって、現代的に言えば、首都防衛司令官であろう。

彌馬升の彌馬は姓、升は職名であって軍政関係の要職であろう。彌馬獲支は彌馬升の弟で、軍政関係の役所の次官であろう。奴佳鞮の奴は姓、佳鞮は首都行政関係の高官であろうが、武官の方から見て下級官職になっているところを見れば、邪馬壹国は当時戦時体制にあったのではないかと想像する。この四人は呉系中国人である。三十四行目には「其南有狗奴（くな）国。男子为王。其官有狗古智卑狗（くこちひく）」とある。これは、その国人から付けられた江南語による渾名、（かこちひく）が転訛したもので、「いつもぶつぶつ言っている偉い人」という意味であろう。（続）

古代史論

—ヤマトイ国は存在しなかった—

齊藤 勁

古代史ロマンの中心として、ヤマトイ国は多くの人々の関心を集めている。しかし、三国志魏志倭人伝には「邪馬壹国」と書かれている。「邪馬台国」は魏志倭人伝より百数十年後の五世紀前半、南朝宋の范曄の後漢書倭伝に初めて登場する。多くの人々は魏志の「邪馬壹国」を後漢書の「邪馬台国」の誤りとするが、後漢書倭伝には不審な点が多く再検討が必要である。「壹」は「台」の誤りとする説は、一九一〇年内藤虎次郎、白鳥庫吉の両碩学により示された。以来、百年近く経過したが、かくかくの理由により、「壹は台の誤りである」ことを示した文献は全く見当たらない。

三世紀陳寿が撰上した三国志の原本は失われ、五世紀前半、南朝宋の文帝の勅命により裴松之（三七二—四五二）が注釋を加え、四二九年五十七歳の時に撰上したものが現在原本とされている。

一方、范曄（三九八—四四五）の後漢書の撰上は、四三〇年代後半から四四〇年代初めの可能性が大きいと考えられる。もし范曄が我が国の先学が述べているように、壹は台の誤りとしたならば、皇帝専制下の宋王朝において、勅命による大長老裴松之の注釋書に異を唱えることとなり、現実的には起こり得ない。むしろ、別々の国との認識の下で、倭伝を撰上したものと考えられる。

次に後漢書倭伝の問題点を検討してみる。後漢書倭伝の冒頭總序の原文と訳文を示すと、原文「……使驛通於漢者三丁許国皆称王世世伝統其大倭王居邪馬台国」訳文「使者と通訳の漢に通じるものは三十ばかりの国である。国は皆王を称し、世々、統を伝える。其大倭王は邪馬台国におる。」

訳中其大倭王の其の訳が不充分である。通常漢文で其とあれば、其の後文は其の前文を受けて解釋するのが一般的である。従って国皆称王、世世伝統其大倭王と読むのが通常である。しかし、通説は世世伝統を国皆称王に繋げて読んでいる。何故か。

范曄は後漢書倭伝の後半において「曆年主がいなかつ

た」と記載している。世世伝統其大倭王は後漢時代には存在しなかったと述べている。ここで考えねばならないことは、范曄は後漢王朝の歴史を書いたもので、周辺異民族の歴史を書いたものではないのである。

いかなる著作者も、著作者自身が生きた時代の影響を受けるのは当然であり、従って范曄の生きた五世紀前半に、世世伝統其大倭王……と常識的な読みが出来る文章を書かせた事態を推定せざるを得ない。

五世紀とは、倭国の讃・珍・済・興・武の五王が南朝宋に遣使した時代で、前半の遣使状況を記してみると、四二一年、四二五年、四三〇年、倭王讃遣使

四三八年 宋大祖文帝 元嘉十五年

倭王讃死し、弟珍立つ、珍遣使貢獻す。

珍を安東將軍倭国王とする（珍は、使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王を自称、除正を求めた）

四四三年 宋大祖文帝 元嘉二十年

倭国王済遣使。済を安東將軍倭国王とす。

即ち、宋は、百済を含む倭の安東大將軍の要請に対し、

安東將軍倭国王しか認めなかった。

一方、百済は倭よりも早く遣使している。四二〇年宋高祖武帝は永初元年即位すると、百済王を使持節都督百済諸軍事・鎮東大將軍・百済王に除正し、以来一貫している。なお、鎮東大將軍は、倭王が除正された安東將軍より数段高い地位にある。

百済を含む安東大將軍を要請した倭国と鎮東大將軍である百済は、何らかの争いを宮廷内で起こしたと思われる、これが范曄に強烈な印象を与えたと考えられる。このため、范曄は魏志韓伝における馬韓の一国、伯济国（百済の前身）を、全く突然に後漢書韓伝に書き込む奇妙な行為をなしている。

なお、倭使は自国の名称を正確に「ヤマト国」と発音した。これを宋の官人は漢字をあて「邪馬台国」と記した。後世、後漢書を輸入し、日本式読みをしてヤマトイ国を作り上げたのが真相であろう。

以上、范曄は五世紀の倭国を邪馬台国と書いたことが明らかで、従って、壱は台の誤り説と、ヤマトイ国自体も存在しないことが明らかにされた。

中国・蘭洲二〇〇二年

吉 寄 清 巳

西北化工公司は内陸部の甘肅・蘭洲にある国有の株式会社である。国は五八％の株を所有し、残りは個人の所有である。株価は一株七元（一元は十五円）最高値は二年前の十五元であった。この株は外国人は買えないが、中国人は誰でも株式市場で買える。配当は一度もしたがことはない。共産党の幹部である会社の董事長（会長）と總經理（社長）は、市場経済に移行後押し寄せる競争の荒波にどう対処すべきか頭を痛めている。西北化工は計画経済の時代、甘肅省が管掌する企業で北京・天津に次ぐ業界第三位の塗料工場であった。ところがこの十年ほどの間にランク外に落ち、売り上げは半減。農民の製造する安価な塗料と海外製品との競争に負けたのである。

甘肅省の最高学府、蘭洲大学の卒業生は毎年数名は西北化工に入社していた。今年は募集しても一人も来ないので、高卒数名を採用、研究所に配属して、技術者の教

育を行っている。指導しているのは研究所の主任である。彼は蘭洲大を九一年に卒業した。彼の同級、化学系二百名のうち地元就職したのはわずか三分の一で、三割の友は米国・欧州・カナダに留学または就職、残りは中国内に設立された外資会社に行った。彼は外国に出たかったが、父母と別れて働くことは許されず蘭洲に残った。

私の仕事仲間は大卒のエンジニア（女性が多い）たちである。彼女らは私に、先生が教えてくれた塗料は日本市場で売られているものと尋ねる。私は「西北化工が日本製品の模倣品を中国市場で販売して、輸入品、外資合弁製品に勝てると思いますか。あなたたちは自身が開発した独自の製品で勝負すべきではないですか」と答えている。日本の製品技術を知りたいというのであれば、それは日本の私企業の秘密だから、お金を払って購入してくださいと言っている。

私は若いエンジニアたちの学識と独創的アイデアを引き出し、彼らと共同研究をしている。その骨子は、会社は実験室と研究用材料を提供する。その代わりに生産・販売権を取得する。エンジニアは実験の担当と内容の機密保持。

私は実験計画の作成と結果の入手である。最近は英文のEメールを用いてリモート実験ができるようになった。

私たちの共同研究は二つの製品を開発した。顧客を選定して試験販売した結果、お客の評価はよかった。ところが西北化工の人たちはこの製品の拡販に努力しない。広告宣伝はしないし、カタログ、説明書すらつくらない。この間までの計画経済時代の国営企業は売り込むという販売行為の必要性はなく、ただ製造するだけでよかった。この惰性はまだ公司内部に残っているのである。

私は総経理に、私らが開発した塗料は、顧客の生産現場で製品に塗装される工業用塗料であり、塗装のノウハウを伴って売れるものだから、技術を知らない販売員だけで売れる塗料ではない。エンジニアは研究した塗料を自ら市場に売りに行くという体制をつくってくれと提言した。

私と妻が宿泊している蘭洲飯店は国有ホテルで、標準のツインルームは一泊四百八十元。ずいぶん高くなった。その窓から交差点の向こうに二十階の香港系大酒店と高層の中国銀行、反対側に蘭洲大学の入り口と郵便局が見える。交差点を通る車の数は年々増加し、今年は渋滞す

るようになった。人々は横断歩道を渡っていても車は止まらずに突っ込んでくる。日本人には危険極まりない。若い女たちは流行の服と靴をまとい堂々と歩く。背は高く、すらりとしていて太めはいない。しかし自転車に乗っていて接触しようものなら大変、道路のご真ん中でも大きな声でまくし立てる。男顔負けだ。

ホテルの近くの大型スーパーが倒産した。市庁舎前の大きな大酒店も明かりが消える。一方、町を東西に貫いて流れる黄河の兩岸には公園ができ上がり、中国独自の濃密なイルミネーションがまぶしく、日本の花火大会のようだ。ここには香港・台湾人の、また、成金現地人の私営の豪華なレストランが軒を連ね、よく繁盛している。昔からある国有の店は苦戦している。

蘭洲はラーメンで有名な町である。ラーメンの種類は多い。粉の種類、太いもの、細いもの、平たいメンなど、味は日本のように塩辛くなく、唐辛子と山椒で辛くしている。私と妻は不要棘（ブヤオラ）といって辛さのないラーメンをホテルの朝食に、また町の店で食べる。讃岐うどんの味で、飽きのこない日本人向きである。

国境の生活、そしてアメリカ

安藤 晃二

米国の最南端、北回歸線上に位置するカントリークラブ、ランチョビエホの夏の朝、木々を吹き抜ける心地よい微風と水鳥の聲がしばし時間の流れを忘れさせる。前面に湖面が広がるティーズグラウンドの高みからその長いシオートホールのグリーンを望むと、湖を越えた上陸地点にバンカーがグリーンへと続く。皆このホールに来ると緊張する。落ち着け、僕は深呼吸をしてゆっくりとアドレスをする。瞬間、「ヘイ、アンドー、ちょっと簡単な質問をひとつ、我々はメキシコ人を搾取しているのだろうか。」またパートナーのロジャー君である。このホールには五ドルも掛かっているのだ。がっくり来て「当たり前だ」と言いざま、たたいたゴルフボールの行方はご想像にお任せする。

そんな絶妙なユーモアを楽しんでいたそのころ、僕はメキシコのマキラドーラ工場の経営に当たっていた。テ

キサスとの国境の町マタモロス（モロ人を殺せと言う忌まわしい中世のスペイン史を象徴する名前である）には五十二社の工場が進出していた。わが工場を除きすべて米国企業、僕はこの町で唯一の日本人であった。有り難いことにアメリカ人たちは皆親切に手を差し伸べてくれた。その中で四人の工場長による「情報交換会」が始まった。日曜日の朝七時にゴルフ場に集まる。こんなearly birds はアメリカでは気違い沙汰だ。四人の共通の利害はユニオン対策、そしてもちろんゴルフである。

ルサカ（リオグランデの流域に取り残された三日月湖、ルサカとはスペイン語で波頭の意）を背景にしたレストランでテーブルを囲む。話題はいつもたわいもないものであった。スラングを駆使しないと市民権が失われたような気持ちになる。誰も格好をつけない。対話相手が常に取引先だった十五年前のニューヨーク駐在時代のアメリカはそこには無い。しかし、ユニオンとの交渉時期になると皆真顔で話し合った。他の二人は北欧系のデービッドと、僕の前任者からエリート英国紳士として紹介され

たゴルフの名手ビーター君、しかしその前触れのイメー
ジとは裏腹にひどいヨークシャーなまり、カナダに渡り
苦学して米国永住権を取り工場長の職を得た一匹狼であ
る。

「ヘイ、アンドー、お前はニューヨーク、ロンドンに
駐在して、ついにマタモロスにまで都落ちしたか」と大
笑いで人をからかう。ここにはエリートは来ないのであ
る。彼らと僕の違いはと言えば、僕には、メキシコ美人
の奥さんとゴルフコースに面した素晴らしい豪邸がない
ことか。ビーター君などはあのレンガに漆喰しつぐいを合わせ
たお城と見紛うテューダー建築の天辺てっぺんにユニオンジャック
を立てたものである。さて、我が家はといえば、企業戦
士の女房がけなげに日の丸を背負いつつ周りと交流し、
自宅で粉骨碎身日本人来客の対応に追われていた。

マキラドーラの労使交渉はこの町の地域ユニオンと五
十二社からなるアソシエーションとの間での団体交渉で
あった。相手は大ボスのドン、その勢力たるや信じ難い
ものがある。ドンの誕生日には招待状が来る。中央テー
ブルに白髪口髭ひげの風格のある老紳士が白いフェルトのテ

キサスハットを被って好々爺然として座り、次々に祝賀
の握手を受ける。舞台にはメキシコシティから呼ばれた
踊り子やコメデイアンが登場して、ドンを称えるパフォ
ーマンスが延々と朝から午後の四時ごろまで続く。

この余りにも異なった文化圏の中でアメリカ人たちは
結束し、しぶといドンとの労使交渉の戦略を練った。そ
のコンセンサスのとり方には興味深いものがあつた。議
論が常に「建設的」を意識して進んで行くのが分かる。
侃侃諤諤かんかんがくの議論の後、誰かが説得力に満ちた発言をす
る。風向きが決まる瞬間である。潮の如く賛成意見が続
く。動議が提出され、採決となる。アメリカ人同士の言
葉でのみ通じ合う盛り上がりの妙がそこにはある。日本
人である僕はいつも当事者でありながらオブザーバーに
なってしまうのだ。対イラク開戦前夜の様相を呈してい
る昨今、超党派で重大な議会決議を行ったアメリカが僕
には見えるような気がする。

一九八九年、任務を終えた僕の送別会ディナー。僕に
グッドラックをと祈ってくれたロジャー君の目に涙が光
っていた。

旅を創る

西川 武彦

九月二十四日、ユーロスターでドーバーを潜り、八年振りに初秋のパリを訪れた。

最初に訪問したのは三十五年前だが、何時来てもおしやれな街は変わらない。グッチなど、サントノレ通りのブランド店が一部シャンゼリゼを挟んで反対側に走るモンテーニュ通りに移ったり、結構変化はあるのだが、その容姿はしっかりと受け継がれている。四半世紀を経ても今ごろの東京を再訪した外国人なら、骨格、面貌めんぼうの変わり様に度肝を抜かれようが、石造りと木造りの違いだけではないような気もする。

初めてのユーロスターには、簡略ながら出入国手続きがあり、定時の二十分前には国際駅に着かねばならないが、それを知らずに一便乗り遅れて、パリでのアポに三十分も遅れた。ユーロ以前の旅で使い残した百フランが、車内バー・ブュッフェで使えず、慌てて、ポケットに残

った英国ポンドで、一八七ミリリットルのボルドーを買い求めたのも口惜しかった。心許ない旅人に、親切なウエートレスは、余ったポンドをユーロに換えてくれた。二十分の海底旅行で風土、言語ががらりと変わるのは、滞空時間と空港との往復時間で優に三時間はかかる空の旅とは違った感動を与えてくれる。TPOを尊重して、パリ北駅のトイレで、ジャケットに見合った色系統のタートルネックに着替える。

今回のパリは日本近代洋画の原点をたどる旅である。一八九〇年ごろ、パリ郊外、フォンテーヌブローの森で、当時最盛の印象主義を学び、近代洋画を日本に紹介した黒田清輝の功績を記すべく、二〇〇一年十月七日、南バルビゾンの小さな町グレー・シュール・ロワンに、「黒田清輝通り」が誕生した。バルビゾンは、日本でいえば明治維新のころ、マネー、モネー、ピサロたちが競って腕を磨いたところ。シスレーの画材も点在するし、ミレーの晩鐘の舞台でもある。パリから南に六十五キロ余り、一時間半のドライブで着く。広大な森の入り口で、セーヌ川からロワン川が左に分かれるが、その支流に沿って

暫くのところ、黒田清輝が学んだ人口千五百人ばかりのお伽の街がある。百メートルほどの「通り」には、彼が住んだといわれる石造りの家も残っている。

ちよつとしたご縁で、フランス政府公認の美術ガイド、モワン前田恵美子さんにマイカーでご案内いただく僥倖に恵まれた。Rue Kuroda Seiki生みの親の一人で、画伯の九年間のフランス暮らしを追い、ゆかりの地、ゆかりの人々と不思議な出会いを重ねて、ついに、「黒田清輝通り」を創ったロマンティストである。画伯と同じ鹿児島出身だが、二十六歳で渡仏してフランス人の連れ合いと巡り合い、二児を育て上げた彼女の容姿はパリジェンヌそのものの。

パリはルーブルの地下街にある逆さピラミッドの下で落ち合い、都合五時間も六十五歳にお付き合いくださったのだが「その席で紀宮様もご案内したの」などと言われて、ちよつとした殿様気分を味わう。

小一時間も巡れば、旧所名跡が掌握できる街は、ロワソ川に面して広がる裏庭が連なる別荘地でもあり、別荘には手漕ぎボートが舫^{もや}っていて、静かな流れに竿を垂ら

すご仁もおられる。

帰国後、上野の東京文化財研究所の黒田記念室を訪れた。画伯の代表作「湖畔」など数十点が展示されている。画伯は帰国後、京都の舞妓や芸者も題材としたが、日本人モデルの裸婦を含め、西洋女性の面影が濃くうかがえるのが興味深い。グレー時代のモデルであり、想いを寄せ合ったといわれる女性がその原点らしい。

「黒田清輝通り」があるグレーを描いた作品には、画伯が住んだお宅の納屋を描いたものもある。これは現存していて、訪れたジャポネをもてなしてくれた当主から、「いつでもいらつしゃい、ここに泊めてあげますよ」との暖かいお言葉を頂戴した。

どこを撮っても、印象派の絵になる日本近代洋画の原点には、鉄道とタクシーを乗り継いでも行けるが、フォントレーヌブローとバルビゾンセットにしたパリ発の半日コースが、手ごろな値段で用意されている。初秋のパリを訪れるなら、フォントレーヌブローの河畔でキャンパスをひろげて印象派の気分に入る……、こんな旅を創るのも乙なものかもしれません。

今村 亮

「月末に台北にやってきた。この二年で三回やってきたことになる。特に用があるというのではなく、街角で人とすれちがったり、廊下で立ち話する程度が楽しくてやってくるのである」(司馬遼太郎)

一 英語力

三年前、台湾、日本双方のトーストマスターズ支部のクラブ数が五十を超し、国際組織の準地区に同時昇格した。あと二十クラブ増えれば国際コンテストに代表を送りこめる。米国に本部を持つNPOトーストマスターズとは英語だけでなく、日本語、中国語等で日ごろから話し方の練習を積み、会議があれば、そのMC(司会役)を買ってでるくらいのレベルを目標とする同志の集まりだ。私は英語クラブの日台交歓で出向いている。英語の台湾クラブは新会員の指導にあたるメンバー層が厚く、スピーチも大変うまい。日台比較して台湾に軍配があが

ろう。台湾地区大会の基調講演には、先日再選された馬英九台北市長はじめ、政府要人が招待に気軽に応じて見事な英語スピーチで大会を盛りあげてくれる。台湾の会員数は日本の一・五倍あり、ほとんどの会員は英語名のニックネームを持ち、米国人のように明るく、フランクで、情熱家も多い。司馬先輩ではないが、再び訪台して大会での立ち話に興じたい。

二 日本語力

台湾には驚くなかれ、日本語クラブ数が日本と同じくらいあって、日台双方のコンテスト大会に招待し合い、台湾代表が日本のコンテストで入賞もしている。十一月台中市で開催の台湾大会には日本から八名が参加した。うち五名がはじめての訪台者で、桃園、台中の日本語クラブ会員が訪台者の世話を買ってた。特に台中クラブは、男女会員総出で、鹿港の観光案内など、誠心誠意、歓待してくれ、我々を感激させた。いい意味でのリップンチェンシン(日本精神)を堅持する方々で、日本人の我々が再認識したわけである。

三 陽明山で

訪台の都度、私は台北市のMRT (Mass Rapid Transport) を利用して、郊外を散策することになっている。前回は木柵から道教本山の指南宮へ、前々回は淡水の紅毛城まで行った。故宫博物館へは、MRTのないころで、満員バスにとり残されないよう大奮闘したもののだが、MRTの開通で、一人旅の行動範囲が広がった。陽明山も東京で言えば高尾山登山くらいの軽い気持ちで行ける。

陽明山は王陽明の銅像があることから、また避暑山莊を建て陽明書屋と呼ばせたのが蒋介石であることから、彼の命名に違いない。蒋介石は在日中、はじめて陽明学を知り、日本でかくも学ばれているのに、なぜ中国で知られないのかと嘆いたと聞いた。日本無条件降伏の日の、彼の対日声明「怨みを以て怨みに対せず」は、王陽明の影響と見る。

公園で地爪と書いた焼きいもを見つけランチ代わりにする。熱々でうまい。景観亭の矢印地点まで戻り、急傾斜の上り坂を時間をかけて登る。右回りの山道を行くと左右に分かれる交差点に出た。時間と労力セーブのため、

後続の登山者を待った。現れたのは、赤いベストに黒いスイス帽、登山靴の男性。同年齢とみて英語で道を聞いた。ついてこいと言う。黙々と登る。景観亭につき、汗を拭った時点で自己紹介した途端、彼は日本語で喋り始めた。谷を隔てた向山中腹の陽明書屋。立ち入り禁止ではと聞くと、いや一時半から見学が可能。一見の価値あり、見たければ案内すると言ってくれた。

見えてはいるが、かなりの距離だ。私は彼が駐車場に車でもおいていると勝手な解釈で「お願いします」と言ってしまった。車ではなかった。例の急傾斜道を滑りおけると、公園の山沿いを歩き、裏山から、書屋に向かって一直線に登り始めた。道などない。私はひたすらに彼を追いつき、苦闘の登山に耐えた。かろうじて見学団に加わることができ、今回の旅行の最大収穫となった。彼の名は黄さん。忘れられない出会いである。

黄さんと別れ、車道を下って行くと、太極拳練習最中の男性と目が逢い会釈した。姚^{たお}さんというアマながら、山の写真家だった。自費出版の中国安徽省黄山の写真集を年末に贈ってくれた。

ゴールドントライアングルと罌粟の花

大塚 滋

タイの北部、ビルマ、ラオスと国境を接するあたりはゴールドントライアングルと呼ばれ、麻薬の産地として世界中に悪名をとどろかせているが、そればかりではない。残された数少ない秘境の一つとして、強く旅情をそえられるところでもある。

タイ人もほとんど訪れることはないという、その秘境に魅せられて、女房と二人バンコクを飛び立ったのは十年前、罌粟の花が満開という一月も終わりのころだった。さいはての街チェンライに着き、バンコクで手配してあった運転手を見つける。レンタカーも考えたがタイ語の道標が読めず、言葉も不自由なので英語のわかる運転手付きの車にしたのである。

さっそくコースを確認する。間違いないようだ。

「さて、ケシの花はどこで見られるのかな？」

「ケシの花？ ケシの花など見られませんかよ」

「ゴールドントライアングルに行くんだろう。ケシ畠はないの？」

「ゴールドントライアングルにケシ畠なんてありませんよ」

「どうしても見たいな」

「どうしてもですか？」

「そうだ。そのためにはるばるやって来たんだよ。なんとかならないのか？」

「――」

「――」

「わかりました。そのかわり遠回りにもなることだしあと千バーツ。いいですね」

千バーツといえば当時のレートで一万円だ。しかしここまで来てケシ畠を見ないで帰るわけにはいかない。

「OK、出そう。だけど本当にケシの花を見せてくれるのだろうか？」

「大丈夫、まかせてください」

商談成立、車は空港を後にした。

北へ向かう車は途中二カ所検問所を通り、三カ所目で

制服、制帽、自動小銃をもった兵士二人が乗り込んできた。二人は当方の様子を観察している。ケシの花など見たいという酔狂な異国人を監視するため乗ってきたに違いないと、その時は、そう信じて疑わなかった。

道はまもなくひどい山道にかかる。狭いでこぼこ道、急勾配、急カーブ、もうこれ以上は無理というところで停止。少し歩いて南斜面に一步踏み入れた瞬間、思わずアッと声をあげた。

幾重にも重なり合う緑の山なみと、雲一つない紺碧こんぺきの空を背景にして、そこは一面のケシ畠であった。

白、赤、紫、色とりどりの花にまじって、鶏の卵と同形、同大の淡緑色の実が立っている。いくつかの実には縦に傷がつけられ、その傷跡から茶色のヤニがしみ出ている。運転手はそのヤニをタバコに擦りつけて吸いはじめた。精製していないが阿片である。

「どうです、一つ吸ってみませんかね？」

「――」

「ここをどこだと思えますか？」

質問の意味を解しかねていると、ニヤッと笑った。

「ここはビルマだよ」

「エエッ、ビルマ、では国境をこえてしまったの？」

「そう、無断でね、ビルマ側から撃ってくれば、この連中が応戦してくれる」

やっと自動小銃の本当の目的が分かった。制服氏はいくつかの花と実を束にして女房に渡してくれた。

「チェンライのホテルまでいいが、空港は駄目だ、逮捕されるよ」

山を下りて、さきほどの検問所へ着く。

「彼らにチップをあげてください」

と運転手が言う。なんだそうかという気持ちと、やっぱりそうかという気持ちとが交錯する。

夕方、川つぶちのレストランでクロスタービールを飲みながら考えた。

「あの二人の兵士、監視なのか、護衛なのか、それとも運転手とグルの小遣い稼ぎだったのか」と。仮にすべてがショーだったとしても、舞台装置はまぎれもなく本物であり、秘境への旅の興奮と効果をより高めてくれたことに「お見事」と感謝する以外にない。

第九交響曲〈合唱つき〉

金京 法一

昨年暮れ、演奏会ではじめてこの曲を聴いた。子供のころから、レコードやラジオその他でよく聴いていながら、なぜか実演に接する機会がなかった。戦後この曲の歳末演奏が恒例化し、音楽愛好家とも思えぬ人々までが聴きに行くという社会現象に反発を覚えていたせいもあるが、ベートーベンの他の曲に比較して、第九はなぜか中途半端な首尾一貫しない曲風に思え、金まで出して聴きに行く気になれなかったのである。ベートーベンの音楽の特徴は、簡単なテーマを無限に展開しながら、ひたすら終楽章のクライマックスに突き進んでいくという単純直截な爽快感であるが、なぜかこの曲にはそれが乏しいように思える。

荘重な響きで始まる序奏に、一瞬場内に緊張がみなぎるが、間もなくあちらこちらで居眠りが始まる。無邪気に軒をかく人もいる。無理もない。ほとんどの人は終楽

章の「歓喜の歌」と呼ばれる独唱合唱の部分期待してくるが、そこに至る一楽章から三楽章の終わりまでの四十数分を我慢しなければならないのである。

よく「楽聖ベートーベン」といわれ、超世俗的な聖人というイメージが強いが、一生独身で、他人が私生活に関与することを極端に嫌ったせいとか、その生涯はなぞに包まれた部分も多かった。近年研究が進み、徐々に人間ベートーベンが明るみに出てきた。彼は意外に世俗的な人物だったようである。たとえばお金の問題。さる貴族に第三交響曲の初版を献呈し、現在の金で一千万円相当の報酬を受け取りながら、慣例であった一年の権利停止期間を待たずに、ロンドンでも出版して一儲けした。自分の名前から、ひょっとしたら貴族の末裔ではないかとの期待があったらしく、甥の親権を巡っての裁判で、貴族裁判所に提訴した。しかし、調査の結果は貴族にあらずとして庶民裁判所に回されてしまう。この一件は彼のプライドをひどく傷つけたようである。ナポレオン戦争という時代背景もあって、彼はますます共和制に共感を

覚えるようになる。貴族の援助なしに、芸術そのもので自立する芸術家像の確立に心を砕く(金に執着したもの、そのためというわけである)。人間は皆平等だとの思いを強くしていく(もともと彼の場合、自分は貴族や上流階級と対等との意識は強いが、一般庶民と同じとは思っていないかったようだ)。

ただ女性関係では不器用であつたらしい。超有名人になつた以上、庶民の娘とは結婚する気になれず、さりとて貴族の生娘というわけにもいかず、せつかく親しくなつた貴族の未亡人にも最後の一言が言えずに終わつてしまふ(「不滅の恋人」で有名なラブレター事件)。

晩年のベートルベンを取り巻く環境は、彼にとり決して幸せなものではなかつた。ナポレオン失脚後、保守反動の時代となり、当局の検閲と監視が厳しくなる。要注意人物にリストアップされ、新作発表も当局の許可なしには出来なくなる。熱烈にベートルベンを支持したウィーン市民も、保守反動の時勢を忘れたのかのように、ポルカやワルツやオペレッタといった軽音楽に向かい、ベートルベンの演奏会は閑古鳥が鳴くありさまであつた。

しかし、彼は負けてはいなかつた。十数年の沈黙の後、ついにこの交響曲の発表に踏み切つた。それも独唱合唱付きという前代未聞の形式で、しかも進歩的なシラーの詩を歌わせ、場合によっては当局の摘発対象になりかねないものである。七十分を超える長大さで、紆余曲折を経ながらシラーの詩句に到達するあたり、当時の社会情勢と、それに反発するベートルベンの心の葛藤を垣間見る思いがする。演奏会は大盛況であつた。

三年後にベートルベンはこの世を去つた。宮廷や当局からの弔意の伝達はなかつた。しかし、ウィーン市民はこの硬骨漢のことを忘れてはいなかつた。葬儀後墓地向かう葬列には二万人が参加し、歴史に残る盛大なものであつたといわれる。

いまや居眠りする聴衆もなく、独唱者合唱団の叫び、オーケストラの咆哮のうちに演奏は終了した。盛んな拍手の後会場を後にする。感激をいつまでも持ち続けたい人、第九の次は大晦日の紅白だなどと考える人。風が吹き抜ける師走の町にベートルベンが蘇るひと時である。

石垣山一夜城

遠藤 俊也

通称石垣山城。小田原市の南端にある。ここからは、早川の清流をはさみ、北条氏の本丸小田原城をもろに見下ろせる。天正十八年四月から六月まで三カ月をかけて関白秀吉が城を造築したところだ。

この石垣山城の跡を何とかして訪ねてみたいと思いが、最近とみに強まってきていた。

遠い昔、わたしは一度この城址を訪ねている。小田原で五年間小学校へ通ったが、五年生のとき、遠足でここへきているのだ。その時から七十年近い歳月が流れている。一度いまの自分の眼でこの城址を見直してみたい。そんな思いが無性にわたしを駆り立てたのだった。

ことしも、JRや小田原市がこの城址を含めたハイキング大会を計画していたが、わたしの脚力では参加は到底無理だ。ほかに何か方法はないものかと思案の末、伊豆旅行の帰り、小田原駅前の市の観光案内所に立ち寄っ

て尋ねてみた。すると、土曜、日曜に限り、市が特別に観光周遊バスを運行していることが分かった。これを利用すれば石垣山城址(城址公園)の登り口までバスで行けるし、帰りもここから乗車できる。

穏やかな秋晴れの日曜日、駅前からこのバスに乗った。観光客で一杯だ。「城址公園口」は二つ目の停留所だった。十数人の客がここで降りた。

そこにはボランティアのガイドが三人待機していて、その内の一人がわたしたちを案内した。六十四歳の男性で、ことしの春からガイドをしているという。尾崎さんといい、約一時間半一緒に歩き要所要所を親切に案内してくれた。

石垣山(正しくは笠懸山)は標高二六〇メートル。子供のときの記憶では、山は裸山で大木は少なく灌木と雑草に覆われていた。城壁の崩れた苔むす石が転がっている山道をあえぎあえぎ登っていった様子を思い出す。それが今度行ってみると全く違うのだ。

登り口から中腹までは杉や松などの常緑樹が鬱蒼と茂る樹林で、石垣が崩れ落ちた谷間の山道は暗く長い。

途中に曲輪^{くるわ}址（屋敷址）がいくつもあり、木々は伐採され広い草場になっている。諸将が詰めていた屋敷址なのだろう。登りつめたところには天守閣、一段下に広い敷地の本丸、二の丸、それに物見台があったという。どれも手入れがよく芝生で覆われている。大阪から下ってきた淀君や千利休たちもこの辺りに住んだのだろう。

曲輪のなかでとくに眼を引いたのが井戸曲輪だ。二の丸の真下にあり生活用水を溜めたところのこと。谷の底に井戸を掘り、そこへ数本の沢の水をせきとめ美しい石壁を組んでいる。石組みがうまい近江の穴太衆^{あのを}の仕事らしい。天守閣址からの眺望は素晴らしかった。小田原市街はもとより、足柄平野、大磯丘陵を、さらに相模湾の向こうには房総半島を望むことができた。

ガイドの尾崎さんに礼を言ってわたしたちは本丸址で解散した。ひとり西曲輪址に下りたわたしは日当たりのよいベンチに腰をかけ弁当を開いた。傍らの石垣の苔の緑が鮮やかだった。

わたしは思った。この北条攻めでも、やはり秀吉らしい思慮深さがうかがわれる。できるだけ一斉攻撃は避け

味方の兵の損耗を防ごうとしている。小田原城にこもる北条勢数万に対し秀吉方は二十二万の大兵力だ。

しかし秀吉は、小田原城を完全包囲したまま手出しはせず、茶会や観能で日をつぶす一方、各部将に命じて北条支配下の関東の拠点を次々と攻略させている。浅野長政は江戸城を初め東武蔵、上総、下総を手中に収め、前田利家は上野^{こうずけ}、西武蔵の各城を落とした。また、側近の石田三成を派遣して忍城^{おし}および館林城を落とさせ、東北平定の足がかりとした。

この間、秀吉は、一時的な砦様式の山城でなく、ここ石垣山にしっかりとした石垣をめぐらした本格的な城を築いたのだった。

その名前のように、一夜で周囲の木を伐採して木と紙で作った張子の城を浮上させ、北条勢の肝を潰したのではない。

北条にしても幾人もの間諜を使い、城を築くためのたくさんの巨石や木材が、船や車で運び込まれるのを知っていたに違いない。それでもなすすべなく、ただ傍観するほかなかったのだろう。

まだだよ

木下 洋介

「かけこみ乗車はおやめください」というホームのアナウンスを振り切って乗車した。午後の中途半端な時間帯のせいか、電車はすいていた。目の前の席があいていたので腰かけた。改めて周囲を見まわすと、居眠りをしている人、本を読んでいる人、おしゃべりしている人、帰宅する小学生らで、左右の人はというと、左隣は、あら近所の伊藤さんではないか。伊藤さんは私が腰かけた時も気づかなかったふうで、同じ姿勢で本を読んでいた。一瞬声をかけようと思ったが、夢中で読んでいるのを邪魔しては悪いし、どうせ降りてからは家まで一緒なんだからと黙っていることにした。

伊藤さんは私と同じ齢で、数年前、囲碁を始めて、駅前の碁会所で顔を合わせているうちにあいさつするようになった人だ。あのころの伊藤さんは電車の中でも定石集を、今と同じように熱心に読んでいた。ある時は、中

学生時代英単語を覚えるのに使ったカードで勉強している姿を見たことがある。なんでも漢字検定試験を受けるのだといっていた。その結果は聞いていない。

電車が止まり何人かが降り、何人かが乗ってきた。向かい側に可愛い女の子が腰かけた。赤い靴が愛らしい。赤い靴で伊藤さんと古い映画の「赤い靴」の話をしたことを思い出した。新聞紙が風にゆられて踊るシーンが忘れられないと伊藤さんはいっていた。あの映画の結末はどうだったか、いつか聞いてみよう。

伊藤さんは会うと「何かおもしろい話はないですか」と必ず聞いた。彼のいうおもしろい話というのは、土地や建物に係わる売買の情報のことである。あいにくその業界に無縁な私だったので、いつも手を振って「ない」の返事をしたものだが、ある時ひょんなことから土地を探している人がいるという話を聞いた。「何かおもしろい……」という伊藤さんにこの話をすると「ぜひ紹介してくれ」というので案内した。なんでも四、五十億円の資金を用意しているということだった。その帰り、伊藤

さんは「この言うまくいったら、紹介料として十分お礼させてもらいます」といったので「当てにしないで待っているよ」と笑いながら答えた。その夜「こんな話があったんだ」と家族に話した。うまくいって五十億の〇・一%でも入ってきたらどうしよう、豪華な海外旅行でもするか、〇・一%っていったら五百万だぞ。こんな話をする私に家族はあきれていた。伊藤さんはしかるべき情報七、八件届けたが、立地が気に入らないとか、広さがそれこそ帯に短し襷に長しで、結局この話は実らずじまいで、わが家の海外旅行話も当然あり得ないことだった。それ以降も伊藤さんは「何かおもしろい話はありませんか」を会う度ごとにいう。彼にとつて「何かおもしろい……」は「お早う」とか「寒いですね」のようなものかも知れない。

伊藤さんは相変わらず読書に熱中している。電車はまだ三駅しか進んでいない。

記憶というのはつくづくおもしろいものだと思う。時間と空間を超えて瞬時に再現してくれる。今でも一、二分の間にどれだけのシーンを再現してくれたか。不動産

情報の記憶、赤い靴の記憶、その前は単語カード……。

ところで、伊藤さんはどうしていまこの電車にいるのだろうか。伊藤さんに最近会ったのはいつだったか。そんなことを考えているうちに、もう何年も前のことだが、一人息子の就職の相談に乗ってやってくれといってきたことがあった。会ってみると好青年だったが、いかんせん何がしたいか、まだ自分でわからないというので、これでは就職相談というより人生相談になり、お引き取り願った。あの青年は今どうしているだろうか。電車を降りたら聞いてみよう。

そういえば、近所だというのに伊藤さんの家を訪ねたことがないことに気づいた。会う時はいつも外だった。あの不動産情報の時も蕎麦会所の隣の喫茶店だった。

車掌の停車駅のアナウンスが始まった。下車駅の三手前だ。と、突然、伊藤さんは文庫本を閉じて立ち上がった。私はびっくりして「まだだよ」といいかけて息を呑んだ。その男の人は伊藤さんではなかったのだ。私はその男の人が見えなくなるまで顔を見続けた。

二人で一人前の出前

アブドルカーダー・栄子

Kさん、この間の話の続きなんですけどね。あなたは、私の今の暮らしぶりをもっと詳しく知りたい、そうおっしゃいましたね。

実は私、夫と一緒に英会話の出前をしているんです。この地に移り住んで間もなくの仕事ですから、もう八年以上になります。最初はこの町の幼稚園や小学校に出向いていました。教育委員会からの依頼です。でも、二三年前からはお隣の水沢市、江刺市などにも出前の範囲が広がってきています。「国際語としての英語を」——という時代の波、そのせいだと思っています。読み書きの英語からコミュニケーションとしての英語が重要視され始めてきたわけです。かなり遅すぎたとは思いますがね。他国の支配下にあつて、その国の言語を強制されたこともなく、よその国の文物一切を日本語に訳し通して

きた、いわば純粹培養の国ですもの、この国は。出足が遅くなったとしても無理のないことかもしれません。とにかく英語熱がめらめらと燃え上がってきています。ほら、総合的学習と呼んで、英会話の時間が正規の時間割の中に組み込まれるようになってきてからです。それ以前は午後のクラブ活動の時間に、希望者だけのものでした。今は全員が勉強しています。幼稚園・保育園の園児たちもです。彼らのやる気満々たるや、驚くばかりです。親たちの関心がバカ高いし、親以上に子供自身が、ゲームやコンピュータを操作する中で英語を知る面白さや必要性などを感知してきているのでしょう。

さて、私たちは、耳からの英語を基本にしています。夫の発音することばを意味がわかってとわかるまいと、とにかく真似させる、オウムのように。「○○ちゃんの耳はいい耳、すてきな耳だなあ」って褒めながら。歌をうたったり踊ったりゲームをしたり……。子供たちはのってきますよ。そしてまるで吸取紙のように覚えてくれます。もちろん自国のことば・日本語の大事さには常に気を配っています。私たちは世界の中のひとりの人間で

あり、かつ日本人です。そして日本人のアイデンティティは日本語にあると考えるからです。だから私たちは「今どんな歌を習っているの、聞きたいなあ」とか、「アベディーン（夫の名）さんにはその日本語わかるかな、わからないと思うよ」などとよく質問します。すると、それはそれは得意気に歌ってくれますし、ちびっ子日本語先生がわれもわれもと飛び出してきます。

夫の英語はアメリカ英語ではなくてQueen's Englishです。英国の植民地だったマレーシアで生まれ育ったからです。両親は北インド出身です。ケンブリッジ大卒の父、Dr.Sir.H.ABDOLCARDER家での言語は英語だったそうです。ともあれ夫は薬剤師一筋できた人間で、人にモノを教えたことはありません。日本語が下手だった構わないんです。過去に教えた経験があり、教えるコツを知っていれば。しかし彼にはそれがないのです。教職経験の長い自分も手伝わなくっちゃ、そう思い立ち、二人三脚、ええ、二人で一人前の出前となった次第です。ペイの方も二人で一人分です。娘たちもそれぞれ独立したんだし、これからは夫婦別々の道を、つまりお互いに

やりたいことをしていこうと念じていたのでしたのに。これはいつたいたいどうした風の吹きまわしでと、つくづく思います。この私たちの「二人のビッグショー」（夫はよくこんな冗談をいいます）は回を重ねることにすっかり板に付いてきました。年をとってきたこのごろでは、「体の疲れも二等分される。二人でやってきてよかったね」と話し合っています。

小学生、ことに小さい園児たちから「また来てね」って玄関先で見送られてごらんなさい。Kさん、あなたただって、うれしさで体がぞくぞくすると思いますよ。

ええ、私たちは車で片道一時間半の秋田県横手市（私の郷里）にある看護学校にも英会話の出前をしています。今年で十年です。そこへたどり着くまでの峠道の風景に浸りながら「真人山荘^{まひと}」でいただくランチは至福のひとつです。

二人で一人前の出前がこんなに楽しくなるなんて……しばらくは、いえ、体の続く限りこの楽しさの中に浸っていたいものです。私は六十九歳、夫は私より十歳上。Kさんもどうぞお元気ですね。

丸ビルと私

中 村 爽

去年の秋、オープンしたばかりの新しい丸ビルを見に行った。地上三十七階建ての高層ビルに生まれ変わっていたが、低い階の部分は元のビルを模した外見になっていて、昔の姿を残していた。旧丸ビルには懐かしい思い出がある。

戦後間もなくのこと。食料や物資不足が続き、世の中はまだ騒然としていた。中学一年生だった私は、二年生の兄とともに疎開先で転校手続きをしたまま、一度も登校しないうちに終戦になり、東京へ帰ってきた。「学校は来年からやり直せ。それまで家で勉強だ」と父は言い、社会勉強のためか、私たちをあちこちと連れ歩いた。

そのころ父の勤めていた会社は丸ビルにあり、何度か連れて行かれた。父が仕事をしている間は、いつもビルの中を見て回った。終戦直後のことで、どの階もまだ閑散として人影も少なかった。戦災を受けなかった建物は

重厚な感じで、大理石の壁やリノリウムの床が印象的だった。幅の広い廊下が長く延び、両側に会社名をすりガラスに記したドアがいくつも並んでいる。エレベーターも動いていて、顔見知りになったエレベーターガールのお姉さんが私たちに、にっこり笑って声をかけてくれた。戦災で大きな被害を受けた東京にも、まだこんな立派な所があったのかと感心した。

屋上に上がると、中庭を二つ抱えて「目」の字型をしたビルの構造がよく分かった。目の前に見える東京駅のドーム屋根は焼け落ちて鉄骨をさらけ出していた。下の方では、中央郵便局から大手町方面に向かって路面電車が行き来していた。

一番忘れ難いのは、生まれて初めて洋式トイレと対面したことだ。厚手の木製便座をどう扱うのか。考えついたのは靴のままその上によじ登り、両手を伸ばして鉄パイプにつかまってしゃがみ込むという方法だった。水洗の取手を引くと水がごうごうと流れ、なかなか止まらない。壊れてしまったのかと大慌て。父に話すと笑われたが、いくら説明を聞いても、椅子に腰を掛ける形で用を

足すということが、どうにも納得できなかった。正に異文化との遭遇だった。

それから十年ほど経って、私がサラリーマンの第一歩を踏み出した会社は大手町にあった。毎朝東京駅で降り、丸ビルを見て通勤した。ときどきは買い物や散歩でビルのアーケードを訪れた。そのころの丸ビルはまだ以前とあまり変わらぬ様子で懐かしかった。

やがて東京駅前広場の整備が進められているのを見たが、広場周辺の景観はこの建物なしには成り立たない、と思うほど丸ビルには愛着を感じていた。それが九〇年代の末になり、旧ビルは老朽化に勝てず、解体して建て替えられると聞き、大切なものが失われる思いがした。

九月のある土曜日の午後、私は内幸町のプレスセンターにいた。記者クラブのサロンでわがクラブの会合に出るつもりだった。しばらく待ったがだれもやって来ない。おかしい、と思ったとたんに気がついた。日を間違えて一週間早すぎたのだ。だが、その日は好天気。久しぶりに日比谷公園からお堀端でも散歩しようと決めた。第一生命館の脇から丸の内仲通りに出ると、いやに人通りが

多く、みんな東京駅の方に向かっている。「そうだ、新しい丸ビルが昨日オープンしたのだ」とまた気がつく。私は人波に押されて丸ビルに入って行った。

中は大変な混雑だった。六階の店舗まで通じるエスカレーターは長蛇の行列である。ウインドウショッピングどころではなく、ほうほうの体で逃げ出した。開業二日目の土曜日となれば混むのは当たり前なのだろう。外から旧ビルの面影を残す前面を鑑賞するだけにして、引き揚げることにした。こうして、はからずも私は新「丸ビル」をはやばやと見たことになる。やはり縁があったのだろうか。

年末のある晩、大学の同期会が丸ビル五階のレストランで開かれた。百店の店舗と四十店のレストランがあるというビル内はオープン時の喧騒もなく、落ち着いた雰囲気だだよかった。ほの暗く上品に照明されたレストランの窓から、ライトアップされた東京駅を見た。幻想的で美しかった。丸ビルはすっかり変わってしまった。昔の思い出を抱えた人たちも、いずれ新しい世代の人たちに替わっていくのだと思った。

寮歌祭に集う

黒崎 昭二

輪廻迷妄、方今の世情まさに混沌、閉塞の感、四圍に満つ。……われら、挙りて警世至純のうた、寮歌を高唱、一陣の清風を世に献上せんとす。諸姉諸兄、意気新たに来り参ぜられよ。

日時・平成十五年三月一日 東大安田講堂地下食堂

というような文語体で難解な表現の案内状が届けられる。全国の旧制高等学校のOBが集まって、母校の寮歌を歌いまくる会なのである。数十校が参加している。

昭和二十年代まで多くの旧制高校は全寮制を採用していた。生徒全員が寝食を共にし、共同生活の中から、質実剛健の気風を養い体得させようという目的だった。寮生全員から選ばれた寮長のもとに学生だけの自治体制で運営していた。

四十年前に日本寮歌振興会なる組織が出来て、中央の

本大会は年一回、東京の日比谷公会堂で、さらに大阪、名古屋、広島などでも地方寮歌祭が催されていた。とにかく古きよき時代を偲んで歌うのである。

私は成蹊高等学校卒業だが、社会人になってからほとんど地方の都市で過ごしていたので、定年になり東京に戻るまでこのような会合があるの知らなかった。数年前大学の同級生で浦和高校出身の友人S君(寮歌祭の信者的存在)の勧誘で日比谷公会堂に行ってみた。

日比谷公会堂の周囲は異常な雰囲気だった。高校名を記した幟^{のぼり}が林立し、白髪や禿頭の年配者がたむろして、寮歌のリハーサルなどをしている。昔ながらの高校生のいでたちでマントをまとう者、朴^は菌^{おぼ}の高下駄をはいた者、羽織袴の者、わざわざ弊衣破帽の者など。ほとんどが七十歳前後の心は童の老爺なのである。

この付近を通る市井人から見ると、イヤハヤ別世界の異様な人種に見えるに違いない。歌祭りのあと、数百人が母校の幟^{のぼり}を押し立ててこの装束、風体^{ふうてい}で銀座通りを進行するのだから、これに出食^{しゅく}わした現代の若者たちほもちろん、一般の通行人たちも驚く。ただしこの老人たち

は「混迷する巷にあつて自らを正道を歩む清き心の一徹の伝統を貫く世直し部隊」と信じ、いささかの恥じらいもなく、むしろ誇らしげなのである。

私はこの会に、古いけれど新しい友達を見つけに行くのである。一般に学校の同級生や同窓生が人生の最初に心を割った友となる。次は社会人となつてからの同じ職場の仲間。私は地方の都市を転動して歩いたので、地方に友達が多い。五十五歳で定年になつてからは新しい付き合いの場が少なくなつて来た。寮歌祭会場で顔見知りになつた何人かの新しい友を有り難いと思つている。それが「古いけど新しい友」なのである。

初めて会つただけでも、どこの高校出身であらうが、何らかの形で自分の今までの人生航路の中で接点のあつた人が意外に多く、話題が発展し、また次の繋がりができる。交友によつて得た人脈を互いに利用し合えば、新しい社会への展望が拓け、世の中を見る眼が肥えて、生活に潤いが出て来る。新しい仕事や縁談の世話につながることもある。

中央や地方の寮歌祭に何回か出て感銘したのは、数十

年前、日本の北進図南の国策のもと海外に創立された「東亜同文書院」「ハルビン学院」「満洲医大」などの寮歌も、団結力の強固な卒業生諸君により歌われていることである。大東亜戦争後復員してきた若手軍人や、海外からの引揚げ高校生の受入れ編入のため特に創設された愛知大学予科の結束も固い。陸士、海兵、高等商船学校、さらには長崎高商や浜松高工など旧制高専の連中も加入し、もう一つ「都の西北」の早稲田高等学院も入っている。「純粹な旧制高校」だけの寮歌祭ではなくなつていくが、これはこれで歴史を伝えるもので結構なことだ。

この古くて懐かしい寮歌を愛するご婦人方が「寮歌愛好会」の名のもとに協賛して参加し、雰囲気盛り上げてくれているのも楽しいことである。老雄たちとともに壇上で歌いながら彩りと力を添えてくれる。

寮歌祭。ある意味でアナクロニズムの世界。されど単なる蜜声張り上げだけの場ではない。旧交を温めるだけでなく若返りの何かが得られると思つて私は参加する。

寮歌で一番有名なのが第一高等学校の「あ、玉杯に花うけて」である。これを全員が手拍子をととりつつ、会場

二〇〇二年を振り返って

三宅 劬

社会人になって五十年余り、ほとんど毎日日記をつけている。この年末年始は珍しく自宅で過ごしたので、パソコンに転記して見やすくなっている日記にざっと目を通し、社会に出てからの五十年を振り返ってみた。

昨年は明るい出来事が極端に少なく残念な年だったが、個人的には、卒業・就職・結婚・長女の誕生・親の死・定年退職など、人生の節目に匹敵するほど大きな出来事のあった年だった。

この数年間、長生きした親を介護している同年輩の従兄弟や親しい友人たちを見ると、介護のために自分の生活を犠牲にしている例が多かった。家内と何十回も話し合い、自分たちの老後は、子供の世話にはなるべきではないという結論になった。

毎年のように滞在型の旅行をしているニュージールランドやオーストラリア、カナダなどでは老人が子供と同居

している例は非常に少なく、介護を必要とする老人のための設備の良い住宅に比較的安い費用で入居できる。

旅行者として延べ一年以上を過ごしたニュージールランドには老後に一年の半分を過ごすつもりで購入した住宅も所有している。早く来ないかと誘ってくれる何人か現地の友人もいる。しかし、七十代の半ばになり、医者との縁も深くなるので、やはり日本で住むことに決めた。

わが国では、有料老人ホームの終身入居権が数千万円と非常に高価なので、多くの本を読み、これだと思う設備を見学、数カ所に体験宿泊して入居者の話を聞き、八王子市内のある有料老人ホームと契約した。

万一、車椅子・ボケ状態になった場合の保険のために契約したが、今のところ元気なので入居はしていない。しかし、契約後かなり高額の毎月の管理費の支払いは始まっているので、毎月二、三日は宿泊して近くの部屋の人々と話し合っている。

入居者の生活を見ると、万一の場合も子供や家内に迷惑をかけないで良いという安心感はあるが、買い物・炊事をしないで出されたものを食べるという生活で

は、老け込むのではという不安を感じる。

過去十年余り、毎年春秋の二回、一カ月ぐらいの海外旅行をしてきた。昨年は三回約九十日海外への旅に出て、かなり多くの人と話し合う機会があった。その中でニュージーランドと米国で、知日派・親日派の二人の大学教授から、日本の教育制度・若者の考え方について、非常に似た質問を受けて驚き、かつ返答に困った。

ニュージーランドでは、一流大学の大学院で日本文学を教えているニュージーランド人の女性、もう一人はカナダの大学で化学を教えている米国人である。二人は東大・慶応などで教えた経験があり、日本が大好きという共通点以外は関係がないのに、質問の内容が非常に似ていた。二人の質問は左記のようなものである。

一、日本の高校生はなぜ何年も浪人してまで、偏差値の高い大学に入りたがるのか。青春の貴重な時間が無駄だと思う。

二、このような子供に、日本の親たちは黙って学費を出すのか。

三、高校生たちは、苦勞して大学に入った後、勉強しな

くなるものが多いが、何のために大学に入ったのか。四、日本の大学教授は勉強しない人が多い。ニュージーランドやカナダでは、講義がつまらなくて学生数の少ない教授は職を失う場合が多い。

面白いニュースが極端に少なかった二〇〇二年だったが、教育まで駄目な日本の欠点を指摘され、わが国の将来がどうなるのか残念な思いのつる昨年だった。

フィラデルフィア郊外にある幻の個人美術館「バーンズ・コレクション」の見学を二十年来、希望していたが、今回予約が出来たのを契機に、米国東部大都市にある多くの有名美術館を三週間ほどかけて見学した。そして改めて米国人富豪の寄付のすごさ、美術品蒐集家の多くが、長年にわたって蒐集した数千億円ものコレクションを公の美術館に寄贈する素晴らしさに感心した。

他国への軍事介入や野放図な銃砲の所持による多くの殺人事件は米国の最も悪い面であるが、絵画・美術品などの文化財保護についての企業・個人の高額な寄付をみると米国は第一級の文化国家といえる。

スマトラ横断鉄道とオランダ捕虜

玉山 和夫

第二次世界大戦の初期、日本軍は約十三万人の英、米、オランダ将兵を捕虜とした。そのうち約五万人がビルマとタイを結ぶ泰緬鉄道建設に使われ、悪条件の中一万二千名が過労と疫病のために死亡したので、捕虜を虐待したとして英国などの対日感情に悪影響を及ぼしている。加えてオランダの元捕虜などは、スマトラ横断鉄道建設も泰緬鉄道のような虐待だったと強調している。

スマトラ横断鉄道はスマトラ産の石炭・コークス・石灰石などをシンガポールに運ぶために、既設線の終点モアラから北岸の港パカンバルの間二百十五キロを結んだもので、一九四三年測量を開始、一部の路盤工事などは現地の日系の建設会社が請け負って行った。戦況が厳しくなったので軍の直轄工事となり、一九四四年三月から泰緬鉄道の建設を終えて移動した鉄道第九連隊第四大隊の五百名などが、オランダ兵を主とする五千名の捕虜と

ともに鉄道建設を行い、一九四五年八月に開通した。

この線は平野か、なだらかな丘陵の熱帯ジャングルを通っており、雨季でもトラックが走れる道路がほとんど並行しており、物資食糧の輸送が容易な好条件下で建設が行われた。これに反し泰緬鉄道の路線はコレラなど悪疫が流行する険しい山岳地帯であり、雨季には泥道となりトラックはほとんど使えず、食料さえ必要量の半分も運べず、日本兵も捕虜も痩せ細って病気が多発した。

スマトラでは捕虜は全期間日本兵と同量の食料を与えられており、捕虜の待遇を定めたジュネーブ条約の趣旨に合致していた。しかし、現地事情から動物性たんぱくは一日あたり小魚二匹と水牛十グラムしかなく、日本兵は米と豆類が十分あったので満足していたが、白人の捕虜の嗜好に合わなかった。ビタミンBの不足から脚気患者が多く出たので米の一部を玄米にして支給したが、日本兵は玄米をおかゆにして長時間煮て食べ、捕虜は米の質の低下と嫌っていた。

捕虜のニュージールランド兵Claude Thompson著のInto the Sunによれば、米・タピオカなどの主食は全期間を

通じて余るほどあったが、質が悪く、白人の好みではなかった。その上、肉がほとんどなかったので、オランダ兵が残した玄米を食べても、寝る時には常に空腹で煙草をのんで紛らわせたが、体重は全員が減少して行つたという。

収容所には柵がなく、夜間の外出は制止されなかったので、かなりのオランダ兵は現地人部落に行き、通貨で食料などを買っており、玄米などに見向きもしなかった。皮肉なことに裕福なオランダ兵のほうが脚気にかかる者が多く死ぬ者も出た。泰緬鉄道では収容所には柵があり、捕虜は外出は出来なかったし、現地の通貨を持っていなかった。

工事を監督する鉄道隊は泰緬鉄道の経験で捕虜を使うのに慣れており、また通訳もいたので、意思の疎通も良く、摩擦も少なかった。鉄道隊員は捕虜に制裁を加えることは禁じられていたが、作業中にミスをした捕虜が往々にして殴られ、日本兵の悪弊として嫌われた。

この鉄道は戦争遂行に肝要なものではなかったので、鉄道隊に工事を急ぐような指示もなく、無理のない態勢

で作業をしていた。従つて捕虜の作業はほとんどの場合規定の八時間以内で終わつていた。これに反し、泰緬鉄道ではインパール作戦に合わせるために強行作業が命令され、病人まで無理な重労働に使つていた。

泰緬鉄道からスマトラに移つてきた鉄道隊員は「ビルマは地獄、ジャワ・スマトラは天国」という兵隊仲間の言い伝えのように、楽であつたと言つていた。

捕虜はジャワから船で運ばれてくる時、アメリカ潜水艦の魚雷で二隻が沈没し千六百四十人が死亡した。助かつた者の中に負傷したり極端に衰弱したものが多くおり、建設作業には従事せず療養していたが、この中の三百名ぐらいが回復せず死亡したと推定される。オランダの記録ではスマトラ横断鉄道の建設キャンプでは三百八十九人が死亡したとされているが、上記を除いた死者は百名以下である。泰緬鉄道の死者一万二千名よりもはるかに少ない。これからもスマトラ横断鉄道を「第二の泰緬鉄道」というのは的外れである。しかし、捕虜全員の体重が大幅に減少していたから、虐待を受けたと言う捕虜の苦情は無視出来ないものである。

亡友 西大條泰君を悼む

水谷 汎

私にとって忘れ得ぬ人は数多くあるが、西大條泰君は特別に忘れ得ない学友である。その理由は、同君の最期があまりにも特異な行動によって多くの人命を救ったことにある。

彼は徴兵令により、第一期海軍兵科予備学生海軍大尉となり、硫黄島守備隊を命ぜられ、同島で日本陸軍に殺された。彼は陣中で部下の兵士たちに、常に「恩賜のタバコと人の命とどちらが大切か、そのところをよく考えよ。命を粗末にするんじゃないぞ」と教えていた。

一九四五年三月一日、硫黄島の日本軍が全滅するまで、日米両軍は死闘を繰り返していたが、ある戦闘で西大條大尉は重傷を負った。

その直後、彼は突然、米軍陣地に向けて白いハンカチを懸命に振った。部下を無意味な死から救おうとしたか

らだ。

兵士たちが彼の行動を呆然と見ていたとき、背後の陸軍陣地から銃声。彼は殺された。西大條の人命尊重の行為も狂信者には裏切者としか考えられず、味方の凶弾による無残な死を招いた。この行為によって多数の日本兵士が無駄な死を免れたのであった。

このことを私は『週刊新潮——スリバチ山の白旗事件——抹殺された〃生への賛歌〃』（昭和三十八年八月十八日）を読んで初めて知った。これは西大條大尉の白旗で死を免れた兵士の手記であり、彼はまた「硫黄島は、すっかり私を廃人のようにしてしまいましたが、あの士官のことを考えると、生きていこうという気持ちがわいてきます」と語っている。

一九七六年夏、奥洞おくほらげんじ元治と名乗る人が私を訪ねてきた。『第一期海軍兵科予備学生の記』制作に当たり、高校生のころの西大條君のことを私から取材するためだった。西大條君とは富山高등학교の同級生だった。

奥洞さんは冒頭、次のように語った。

「西大條とは海軍教育隊で同室となり、同じテーブル

で飯を食っていた。彼が硫黄島赴任となると、絶望のどん底に落ち込んでしまつて……」

この話を聞いたとき、彼の無念の胸中を想い、悲しみと怒りが込み上げてきた。そして人間の運命と、その不条理さに恐れおののいた。

一九三五年春から三年間、富山高校で、昼といわず夜といわず彼といろいろと語り合つた。

彼は英会話が堪能で、ある日、英会話の外国人教師宅を訪問し、寄宿寮に帰つてきて語ってくれた感想が忘れられない。

「外人教師はエライ。行儀作法も教えてくれる。きょうは紅茶の飲み方を教わた」と感激していた。全人格をもつて学生に接する教師の態度に心を打たれたのである。

一年生のとき、ともに柔道の稽古にも励んだが、二年生になると彼は柔道をやめた。読書と勉学の自由を求めたことだった。彼は付和雷同せず、悠々とした自由人だった。しかも、人から親しまれ愛された。

戦後六十年、近時、反合理主義が復活、横行しはじめているが、西大條君はこの時世をどう考えているのだろうか。

私は幸運にも、あの大戦での死を免れて、生きながらえているが、私のことを彼はどう見ているのかと考えると、肅然とした心境になってくる。

(二〇〇三・一・三〇)

付記 この拙文に関連した文献を左に掲げる。

①『第一期海軍兵予備学生の記』(二期会)

②『海軍学徒兵硫黄島に死す』(多田 実著)

この表紙カバーは、西大條陸戦隊大隊長の写真である。

③『週刊新潮』(昭和三十八年八月十八日号)

④『両毛新聞』(昭和五十一年三月二十日号)

この号で和田良信氏が『真の勇氣と生命の尊厳―我も生き人も生かす心を』と題し、西大條君のことを引用し「新しい高校生の皆さん」と訴えている。

九人で漕いだレース―漕友故蓮沼洪迪君を悼む―

高橋 孝蔵

野球やサッカーのようなメジャーなスポーツではないが、ボートを漕ぐ人口は着実に増えている。高校、大学、実業団に加え、今では中学チームも珍しくない。そして私たちのような六十歳を超えるボートクラブ―東京外国語大学OB「コンコルディア60」―も試合相手に事欠かないほどである。

ボートにはさまざまな種類があるが、何人で漕ぐかは呼称で分かる。エイト、フォア、クオドラプル、シングルスカルなど。だが、エイトを九人で漕いだこともある。

第二十二回ウォーターフェア隅田川レガッタが昨年八月四日に行われた。平均年齢六十歳を越す大学OBエイトの部には、四十年以上も前、全日本選手権を競い合った強豪十チームが参加した。

エルゴ（陸上用の漕艇練習器械）練習で不慮の死を遂げた蓮沼にも、東京外語OB艇に乗ってもらった。定位

置の五番ではなく、舵手永澤が遺影を抱き、整調渡辺、七番谷内、六番相曾、五番坂下、四番高橋、三番門馬、二番佐藤、バウ吉島の全員が喪章をつけた。

八月の隅田川の水面は太陽の照り返しで、蒸せるように暑い。軽い練習を終え、スタート地点に着いたとき、ユニフォームはすでにぐっしりと汗ばんでいた。スタート三分前と審判の声が響く。舵手たちは言問橋から下ろされた縄を一斉に握り締める。唇が渴いてくる。みんなの気持ちをほぐそうと、坂下監督が「心地よい緊張の瞬間だな」とおどけたような声で語りかける。

第一レースの第一コースは東京外語艇、続いて東大OB、京大OB、一橋大OBと四艇が並ぶ。いよいよスタート。スタートダッシュに続いてスタート力漕。ピッチは38に上がる（二分間に38回漕ぐペース）。私たちはスタートで早くもトップに躍り出る。

審判艇からの怒鳴り声が聞こえる。京大艇と一橋艇が異常接近し、京大艇の出足が鈍ったようだ。京大チームは九月にチエコで行われる世界マスターズ選手権への出場めざし、猛練習を重ね、今大会の優勝候補である。蓮

沼！両艇接近はあなたの悪戯だろうね。「神の手」を使い、京大艇の勢いを殺ごうとしてくれたわけだね。

スタート力漕後、コンスタント33ヘピッチを落とす。突然艇が揺れ、大きな波をかぶる。右肩から右腕がびしょぬれになる。依然、他艇をリードするが、なかなか引き離せない。かえって、差が縮まるような息苦しさを覚える。東武鉄橋を過ぎるころ、ラストスパートの声がかかる。打ち合わせどおりとはいえ、よくやるよ。ゴールまでまだ百三十メートルはあろうというのに。ピッチはぐんぐん上がっていく。ゴール。肩で荒い息をしながら、二位を一艇身は離れたよとの声を聞く。快勝だ。

川とはいえ、今まで出したことのない1分33秒81／五百メートルの記録を達成。第二、第三レースの各チームもこの記録を破れず、大会規定により優勝を成し遂げた。第二位早稲田大OB、第三位一橋大OB。

勝利への予感があった。チーム長老の佐藤先輩が「今日は蓮沼のために頑張る」と檄を飛ばした。みな年齢相応にしわが刻み込まれた顔だが、目が光り、表情が引き締まるのが見てとれた。チームは見事にまとまり、会心

のレースであった。スーパーマンの坂下、エルゴの六十代では世界トップテンに入る怪力の相曾をエンジンとして全員がサポートし、舵手永澤の判断は的確だった。

蓮沼！レガッタの優勝ありがとう。あなたの最後のレースには朝倉大先輩を始め、多くのOBが応援に駆けつけた。穏健で寡黙なあなたは多くの人に親しまれ、その死は私たちを深く悲しませた。あなたが憧れていたチェコの世界マスターズ選手権には門馬と相曾が出場し、ブラハ郊外のラチチェコースに散骨することになっている。

この世では、もうあなたと一緒に漕ぐ機会はない。しかし、私たちもいずれは「そちらの方に」お伺いすることになる。その時は三途の川で、また一緒に漕ごう。

故人を悼み、多くの挽歌が捧げられた。最後に矢島先輩の歌を引用し、あなたにお別れを告げよう。

力漕を一本一本重ね来て

きみは生きたり心やさしく

この暑さ去年も同じ隅田川

五番を漕ぎし艇友は彼岸に

K先輩の訃報に接し

杉山 修 一

本年一月二十七日、K氏の訃報に接した。K氏は、大学を卒業してT社へ入社した時の直属上司であり、いろいろな意味での先輩としてご指導を頂き続け、敬愛おくあたわざる方であった。

昨年十二月に発病した肺炎が回復せず、本年一月四日冥界に旅立たれたよしである。一九〇九年（明治四十二年）生まれの九十四歳。遺言により葬式はせず、遺体は地元の千葉大に献体する手続きを取り、身内と限られた友人で通夜をされたとのことであった。

K氏は、内村鑑三とも親交のあった素封家に生まれ、北大の電気工学科を卒業、日本の代表的な電気メーカーのT社に就職、重電関係のエンジニアとして活躍された。

T社が一九三九年前後、鴨緑江水電水豊発電所向けフランス式水車直結十万KV A縦型水車発電機五台（当時の世界最大容量で、T社では発電機の試験のため、当時

の東京駅がすっぽり入る大きさの試験用ビットを作った）を受注完成した時には、働き盛りの技術者として苦労されたことを、問わず語りにお伺いしたものである。終戦時軍関係の仕事をしておられたので、進駐軍とのトラブルを避けて一度退職され、晴耕雨読の生活をされた。私が、T社に入社した一九五三年には復職されていて、配属された部署のセクションヘッドを務めておられた。課長や主任より年上で、腰が低くあたりの柔かい、しかし、一本筋の通った信念をお持ちの上司であった。

新入社員の私をつかまえて

「会社に入った上は、社長になる気構えでやりなさい」と真面目な顔でよく言われた。そんなことは夢にも思っていないかった私は、北大出だから正に「ボーイズ ビーアンビシャス」だなどと思い、不遜にもお年寄りのお説教ぐらいのつもりで聞いていた。しかし、当時二十人くらいだった課から社長二名、専務二名、取締役一名が出たのだから、K氏はそんな将来も見越して、愚鈍にしてのんびりしている私に発破をかけられたのであろう。

「A社では社是として『恒産なきものは恒心なし』を取

り上げ、本社の玄関に大きく張り出している」などとや
んわりと浪費をたしなめられた時もあった。

「二万円以上の価値のあるものを貰ってはいけません」
と言われた時は、貰い物などなかった私には何のことか
分からなかった。社内接待を含め派手になる傾向の見え
た時代における身の処し方を教えて頂けたことに気が付
いたのはかなり年月を経てからであった。

歳は離れていても、我々と同じ基盤で考え、受注活動
での技術説明や事故発生時の対応ではむしろ若さを感じ
させられた。手回しの電算機が出始めた当時、長さ五十
センチぐらいの大きい電気計算尺を使っておられる姿に
はちょっと格好良さを感じさせられました。

数年後、私の担当が変わり、K氏は直接の上司ではな
くなった。K氏もいろいろ移られ、一九六五年ごろ五十
五歳の役職定年をさかいに退職され、ゴルフに海外旅行
にと悠々自適の生活に入られたようであった。退職後も
昔の人たちとの集まりには必ず顔を出されていたので、
「なぜ海外によく行かれるのですか」とお伺いしたら、
「行って見ないとその国の経済情勢が良く分からない」

と言われた。その時は意味が分からなかったが、資産家
のK氏は外国株にも投資されていたようで、歳をとられ
てもチャレンジ精神を失わない面目躍如としていた。

九十歳を過ぎてもゴルフには、友人に誘われ週何回か
行かれたようで、健康もさることながら付き合いを大
事にされ続けた。昨年他界された奥様とも亡くなられる
少し前にお会い出来たし、昨年十二月にはK氏と電話で
お話ししました。計報に接し、明治、大正、昭和、平成と
生き抜き、妻を見送り、自らを献体にと遺言して亡くな
られた一人の日本男子の生き様を改めて思い返した。

石油資源もなく、食料も国内消費に足らず、人口も減
っていく日本。戦争を放棄し、人と争わず平和に毎日を
送ることをモットーとしながら、自己主張のみをし、互
譲や助け合いの考えから離れていく日本。経済的にも難
しい局面を続け、治安の良さも失いつつある日本。

我々の教育を含めて、次世代への継承を夢見て精一杯
生ききぬいて来たK氏は今どんな思いで献体保存室で眠
っておられるのであろうか？ K氏の一生と比較して、
自責の念に駆られることしきりである。合掌。

お年よりのための童話「蜘蛛の糸」

新山 章一郎

皆さん、芥川の「蜘蛛の糸」をご存じですね。そう、悪人カンダタが地獄で苦しんでいた。お釈迦様はカンダタが生前、一匹の蜘蛛を踏みつぶさなかったことをめでて、蜘蛛の糸をたらして彼をお救いになろうとなさった。

ところが、その細い糸に大勢の亡者どもが取りすがってきたのを見てカンダタが「離れろ。これは俺の糸だ」と怒鳴った。その途端に蜘蛛の糸が切れてしまったという、教科書にも出た、あの物語でございます。

実はこの話には後日談があったのです。地獄へ逆戻りしたカンダタは「生前の善行によって獲得した、天国への権利をたったの一言で剥奪されたのは重大な人権侵害だ」と天帝にeメールを送ったものでございます。

このことは地獄の亡者どもにあつという間に知れ渡りました。すると、あろうことか、ほかの亡者どもも一斉に天帝に抗議のeメールを送ったのです。彼らも生前、

いつか、どこかで「蜘蛛を踏みつぶさなかった」くらいの善行は皆やっている。それなのにカンダタだけが救済の対象になったのは不公平だ、というのでございます。

とにかく地獄に落ちるくらいの悪人ばかりでございませう。みな手前勝手な屁理屈ばかり。「俺は人を半殺しにはしたが、あと一突きというところで助けてやった。俺の方が慈悲の度合いが大きい」というのもありました。

中には、いま天国で、のほほんと暮らしている人たちが全員、蚊をたたいたことも、ゴキブリに殺虫剤をかけたこともないなんてあり得ない。天国住民全員の生前素行調査を求めるといふ無茶苦茶なものもありました。

あるTV解説者は、もしこの調査が実施されれば、天国と地獄の住民の総入れ替えという大事業にもなりかねない。下手をすれば、現行の天国、地獄の二極体制そのものが危うくなるかも知れないと警告しました。

悪いときには悪いことが続くもので、エンマ庁の汚職事件まで発覚したのです。「地獄の沙汰も金次第」を地でいっていたのでございます。

それでもう、天国も地獄も大変な騒ぎになってしまい

ました。死んだ後どちらへ送られるのかという、地獄送りの判別基準の明確化、透明化、さらには地獄亡者救済措置の制度化論まで出てきたのでございます。

実はお釈迦様ご自身もカンダタの件は少し公平さを欠いたかな、とお思いになっていらっしゃって、密かに地獄の亡者どもの生前記録をお調べになりました。

するとカンダタよりはるかに立派な善行のあった者、天国へ行った人の身代わりに地獄へ落ちた人、エンマ庁の誤審によって地獄へ送られた者など、地獄住民の多くが救済されるべき人々だったことが分かりました。

お釈迦様は大層お喜びになって、早速それらの亡者たちを天国へお移しになることになりました。

ところが、これを知った地獄の鬼どもが黙っておりません。地獄住民の大移動はそのまま彼らの大失業、そして伝統ある地獄の過疎化につながるというのです。

エンマ庁も組織の存続をかけてロビー活動を展開しました。庁管轄下の地獄門では早々と綱紀肅正に名を借りて、天国送りの判断基準を大幅に厳しくし、地獄人口の増加を図りました。

一方、天国の人たちの間では救済された大量の元地獄住民の流入に伴う社会環境の悪化や犯罪増加などへの憶測が飛び交い、地域エゴ剥き出しの反対決起集会や天帝への陳情なども出始めたのでございます。

天国の役人たちの一部には地獄の縮小により、自分たちの天下り先の喪失を心配する者もいました。彼らは天国への流入に厳しい行政指導をかけ、お釈迦様の救済措置を骨抜きにしようとなりました。

それはもう、天国の人たちみんながカンダタになってしまったようでした。ある有力な仏様は「こんなことは弥勒さんの時代にでもやってもらえばいいだろう」と言いました。五十六億七千万年もの先送りでございますよ。

結局、大騒ぎの末すべての案は見送られました。地獄は存続し、本来救われるべき亡者たちは依然として「地獄の苦しみ」に日夜さらされているのでございます。

お釈迦様はカンダタのときより十倍も悲しそうな顔をなさって蓮の池の傍らをお離れになりました。その後にはもう使われることもないであろう蜘蛛の糸が、黄色く枯れかかった蓮の花に引っかかって揺れておりました。

断想 宇宙の認識と生命観について

岡 政 昭

百年前、ニイチエは「神は死んだ」と論じ、「人間による地球の支配」を予知した。二十一世紀の走り、科学と技術の進歩は深海探検や宇宙衛星打ち上げを現実のものとし、クローン人間の誕生(?)が物議を醸している。

複雑な核・多細胞生物たる人間のゲノム(全遺伝情報)は、塩基文字三十億余りの配列と遺伝子三ないし四万個からなるが、遺伝暗号は単純な無核・単細胞微生物たる遺伝子四千三百個の大腸菌と同じという。一方、宇宙と生命の歴史は、百五十億年前のいわゆるビッグバン、五十億年前の太陽系出現、四十億年前の地球における海洋と大気の形成に依存した原始生命の誕生を受けて、ほぼ五百万年前にヒト(人類)がサル(類人猿)から分化した。生物学的には脊椎動物門、哺乳綱、霊長目に属する。この生命進化の過程で生物は共通の暗号を使い、情報の伝達―「転写」と「翻訳」を続け、もっとも高等な(?)

知的生命体たるヒトを生み出したといわれる。私が存在する所以であり、有り難いと思う。

これを造物主たる神の摂理によるものとあがめ、その恩寵(おんちよう)(慈悲・愛)に感謝し、現世に生を享けたことに對する祖先崇拜(神道)や郷土愛、さらには無常觀のもとにおける自覚(仏教)、永遠の命への回帰(キリスト教)にもとづく自己・世の中の救済など、普遍的な宗教上の信心・信仰にまでたかめることができよう。また物質とエネルギーの総和は不変とする自然科学の立場にたつて、素粒子は揺らぎながら、発振し、結晶し、組織化するという、ひも理論から究極の万物理論をうちたて、真理探求の喜びを万人に分ち合うことも求められよう。しかし、いずれの場合でも、原始のカオス(混沌)における物質(光子、電子、ニュートリノとそれらの反粒子、陽子、中性子)と放射の相互作用という天地の創造に始まる宇宙の存在は人間原理にたつて認識したい。

宇宙という「外なる自然」とクローン人間で問題化した人体の「内なる自然」との関係について「星が生まれ、核が融合反応し、原子が結合して生物の複合分子が形成

され、やがて人間の誕生―地球での生存に適した状態を現出する―に至るまでの時間の経過と進化の営為を部分的であるにせよ、現在の人間が観測し、検証できる在り姿で宇宙は存在し、発展してきたと解釈するのである。

知的生命体たる人間は、重力により地球に存在し、生命の維持に必要な太陽エネルギーを享受する。「認識」の主体としてヒトは「内」であり、客体として宇宙は「外」であるが、無機から有機を生み出した「自然」を共有する。宇宙の自己完結性から、恒星としての太陽は、いずれ燃え尽きよう。代替のエネルギー源を見つけないかぎり、人類は終焉を迎える理である。あるいは、その前に進化・進歩の名で科学により、自らの住む自然環境・生体系を産業破壊してきた人間社会は、自己規制を欠くまま、遺伝子の操作を誤り、種の絶滅を招くかもしれない。戦争への作為や、貧困への不作為も所詮、人間工学的な暴力と解される。ヒトゲノムを単なる巨大高分子の集塊ではなく「人類共通の遺産を象徴する」ものとしたユネスコの考え方を支持する。

ところで一般に、存在を認識するという場合、主体で

ある自己と客体である他者とはまず二項対立の関係にたち、対象化された他者は主観のなかに関係づけられて、華嚴經にいう因陀羅網あるいは帝釈天の網の目にかかった無数の宝珠のように、無限に反映しあい、自己に投影され、包摂されていく。宇宙の歴史と未来を考えると、自然を構成する物質の、直線的な線形の進歩よりも、自然という複雑系における、物質の立体的な、局所的には淘汰による退歩も含めた非線形の進化―「生命の誕生」という摂理が全体的な構図として浮かんでくる。生成の哲学とも、オートポイエーシス（自動制作）の思想とも呼ばれるものに啓発される。

そして大切なことは、自覚による「場所の論理」であろう。宇宙の一部である地球と自分という不可分の中で、自然と社会という他者とのかわりによつて、物語を作る、という自己の認識である。トートロジー（同義語）のわなを避けるためにも「われ思い、われ語り、われ行う」が「われ在り」の証となり、当為として「およそ真なるもの」の価値観を目的とし、科学・技術を方法とした自己実現を図る。哲学の日常化とも言えようか。

日本人の宗教

折戸 常司

小泉首相の靖国神社参拝を巡って、中国、韓国などの近隣諸国の首脳は、かつての日本軍国主義、植民地政策を連想して国民感情から納得できないと半ば公然と隣国の最高責任者に抗議し、日中国交三十周年の記念行事への招請も実現せず越年した。これは、中国、韓国との経済、文化関係が急速に拡大緊密化しつつある現在、放置できない重大課題であるとともに日本国民の宗教に対する認識の確立が急がれる。

現在でも、特定の信仰を持つ日本人以外はいわゆる「無宗教」で、クリスマスと結婚式はキリスト教会で、葬式は仏教寺院で宗派に必ずしもこだわらず、正月の初詣では祭祀神に拘泥せず晴れ着を着て年に一回のお参りを済ませているのが一般的である。そして日本人としての社会的しきたりを果たしたと心の安らぎを得るのでは

ないだろうか。これは、村の鎮守の森に祀られる祖先の霊をこの世に現在生命を受け継いだ我々の上様としての精神的に帰一する安堵感そのものではないだろうか。

「天照大神」の実在はともかく、万世一系の日本の皇室は、多少の紆余曲折はあったにしても、天皇が政治の御簾の奥に鎮座して、日本民族の精神文化が「無宗教」という特殊な神話の世界に建国以来伝承されてきたことは、日本書紀などからも推定され、儒教、仏教伝来の西暦一〇〇〇年前後までは、緑豊かな島国に、自然の恩恵と祖先の伝承に疑念を抱くことなく生きた単一に近い民族だった。

従って、儒教、仏教、キリスト教と、外来の宗教への傾注に何等の疑念も持たず、白紙で信仰に目覚めた日本人は、神道をこれと競合する宗教とは考えず、異質な精神基盤として処理してきたのではないだろうか。

中国で修行した高僧の布教もキリシタンに改宗した諸大名も、日本民族の《遺伝子》に抵触しない限り、社会的政治的に寛容に受け入れられたが、オウム真理教やイスラム原理主義、ユダヤ教のような宗教の戒律と社会の

規範は日本人の心に馴染みにくかった。

靖国神社は明治維新以後の軍国主義の政治目的に沿って全国の護国神社の中核として建てられたもので、かつての日本帝国主義の象徴と見られ、そこに現役の政治の最高責任者が公式参拝することは、かつての軍国日本の再現を志向しているとの危惧を抱かせるのも無理からぬことだろう。

しかし、戦後の新憲法で「宗教」と規定された神道は果たして日本人の《宗教》なのだろうか。そこには、教義も戒律も社会的規範もなく、国家のために命をなくした靈魂だけが《神様》として祭られている靈安所なのである。日本人の心境からは、生前の思想、犯罪は死の贖罪により消え去るものと信じられているので、平和な村の鎮守として拝み崇められるのである。神社は、外来の宗教の渡来まで、日本民族の素朴な祖先と殉死した同族への一体感、帰一感を確かめ合う祠^{ほこ}なのであって、民族の平和な生活を願う素朴な精神統一道場であろう。

半世紀前の敗戦の際「国体護持」を最後まで死守せん

とした軍部の意図は、皇室と日本民族の精神的一体感の維持であって、時代が変わっても、日本民族の生理的感覚は変わらない。

近隣諸国の不快感と、日本人の神社に対するこの感情



紫陽花

とのギャップを埋めようと、昨年から官房長官の私的諮問機関として「追悼・平和祈念のための記念碑等施設のあり方」を考える懇談会」で戦没者追悼のため、国立で無宗教の新たな施設を建設すべきだとする報告書をまとめたとのことだが、海外向けにはともかく、日本人の民族感覚からは遠い存在となろう。

西方浄土は遠くなりけり

小島 博志

昨秋、紅葉狩りかねて京都を訪れ、東山山麓の大谷祖廟に母の納骨を済ませた。浄土真宗の開祖、親鸞の墓所で、円山公園南隣の閑静な一角に、真宗門徒はその昔から、聖人とともにねむる慣習がある。この日、事前の予約もせず事務所を訪れ、二十分も待っていると、同じ思いの数家族がまとまる。本堂で一座読経、その後小高い丘の上にある墓所に納骨、小一時間で終わった。

昭和十一年（一九三六）夫を亡くした母は、真宗特有の金ピカの仏壇を新調し、毎夜読経、長男の私もその後に正座させられた。

婦命無量寿如来 南無不可思議光

百二十句続く「正信念佛偈^{しょうしんねんぶつげ}」である。親鸞の主著「教行信証」の中に出てくる阿弥陀如来への賛歌である。母は習わぬ経をわけもわからず読み、私も「南無阿弥陀仏」だけは唱和させられた。そんなある日、高熱を出して病

床に臥していると、舞台が一瞬金色に輝き、大勢の仏様が薄い衣のすそを風になびかせながら、舟に乗って私を迎えに来てくれたのである。子供心に強い衝撃を受けたのであろう小学二年の時の夢を今も覚えている。

平安末期は末法の世、仏教は衰え、自然は荒れ、悪がはびこる。人は不安におののき、貴族たちは阿弥陀堂を建て極楽往生を願った。浄土信仰の盛んだった当時の宗教界の中で、法然は、浄土三部経の中から阿弥陀如来の第十八願「念仏往生の願」^{せんじやく}を選択して、称名念仏こそが極楽往生への道だと説いた。臨終に「南無阿弥陀仏」の六文字を口に称えるだけで、阿弥陀如来が来迎して浄土に往って生まれ変わり輪廻の世界から解脱できるといふ。自力での難行は要らぬ。弥陀が法蔵菩薩だったところ「もし、もろもろの人が心から信心を起こして、浄土に往きたいと願い、わずか十声でも名号を唱えた場合、それらの人が浄土に生まれ得ないのなら、私は仏になろうと思わぬ」との誓願をたて、成仏して十方の衆生を済度している。

親鸞は承安三年（一一七三）下級貴族の家に生まれ九歳で出家、叡山横川の常行堂で修行したが、「僧は不犯」の戒律に悩み、京の六角堂に参籠中、観音菩薩が夢枕に立ち「自分が妻となり死に際しては極楽に導こう」のお告げを受ける。二十年間の修行に疑問を抱いた親鸞は、叡山を去って、専修念仏の法然の門をたたいた。

専修念仏は、王侯貴族のみならず、持戒破戒の別も、貧富の別もなく、善人悪人も問わず、凡夫に至るまでを救いの対象としたので、信者は爆発的に増えた。なかにはどんな悪行を重ねても極楽行きが保証されていると、いわゆる「本願ほこり」を働くものが出て、興福寺から念仏停止の訴えが出る始末。後鳥羽院の熊野参詣中に女官と通じた弟子が出たため、承元元年（一二〇七）法然は土佐、親鸞は越後へ流される身となった。ときに法然七十六歳、親鸞三十五歳。

二人の罪科は明らかではないが、のちに親鸞は「主上臣下、法にそむき義に違し、いかりをなし、うらみをむずぶ。罪科をかんがへず、みだりがはしく流罪につみず。あるいは僧儀をあらため、姓名をたまふて、遠流に処す。

予はそのひとつなり。しかればすでに僧にあらず俗にあらず、このゆへに禿の字をもて姓とす」と書いている。親鸞は四年後流罪を許されても京に戻らず、建保二年（一二二四）から常陸を中心に東国伝道に旅立ち、農民との接触を通じて他力の思想を一層深めたといわれる。

法然は「人、仏を念ずれば、仏もまた念じ給ふ」

親鸞は「人、仏を念ぜずとも、仏は人を念じ給ふ」

この言葉は二人の信仰のありようを端的に表しているように思われる。念仏よりも信心が先で、のちに蓮如は「たとへ名号を七重八重に身にまとひたりとも、信を得ずば往生は得候ふ間敷候」と述べている。念仏が条件で往生できるわけではなく、仏の大慈悲の働きによるという。心から念ずれば、臨終に限らず、念仏したとき即往生できる位になり、あの世で成仏できると説いている。人が自分の力で自らを乗り越えることはできず、己を棄て弥陀の本願を疑いもなく信じよと、親鸞は説く。絶対の他力、第十八願を「至心信樂の願」と名づけている。人生七十年を生きて顧みれば我執の連続。西方浄土はますます遠ざかるばかりである。

ペン俳句の一年 その佳句鑑賞

平間 真木子

二〇〇二年を迎え、二十一世紀との思いは深いものがある。激しい時勢に流されることのないしっかりと歩みを続け、自身の句を作り、積み重ねてゆきたいものと思っている。俳句会としては、五月にみどりの美しい新宿御苑を吟行、都心とは思えぬ静寂の中に身を置いて句作を楽しむことが出来た。また十一月にはお茶の水周辺の吟行をし、ニコライ堂・湯島聖堂・神田明神と異色の三カ所を巡るという饒倅を得たのであった。

新宿御苑

平間真木子

ブラッシュの木あり深紅の花咲ける
フェニックス五月の風に吹かれぬ
径なべて薔薇の花壇の前に出づ
いつせいに開く刻来てひつじ草
風つよくなりし睡蓮片寄りて
洋式庭園ユッカは白き花ささぐ

一所懸命生きて拝ろがむ初日の出
子 アブドルカーダー栄

二人居の齢いたはり雪を掻く
花人として一日を終りたる
万緑の気をいただけり山毛櫟峠
小豆入れ中華風とす冬至粥

岩手県にお住まいのため、句会をご一緒にする機会がない。熱心に欠席投句を続けておられるが、他の方々の作品を見て、選をするという句会の大事な一面に触れることがないので、大変残念に思っている。地方色豊かな作品を拝見することは嬉しい。

己が句に名乗る昂ぶり初句会

へり一機遠離りゆく寒茜

老幹や高きに朴の花白く

代々木ゼミへ通ふTシャツ夏休

シクラメン孫に佳き人あるらしく

池田 耕治

初句会に出席ということは誰でも昂ぶるものである。互選にわが名を名乗る喜びと昂ぶり、日頃より声の大きい耕治さんの名乗りは、まことに初句会に相応しい。四、五句目の作品は愛孫へのあたたかい目差しに満ちたもので、耕治さんの好好爺の面目躍如。

初刷やカラーインクの香り満つ

退院の膳にメロンの香の高し

病癒え余生しみじみ虫時雨

語りつつ栗饅頭に手をのばす

明神のみくじ「末吉」冬立つ日

石川 正達

新聞と向き合って生きてこられた正達さんであれば正月の初刷りは何よりの関心事に違いない。美しいカラー刷りの紙面より「インクの香り満つ」とは喜びのまことに素直な表現。思い掛けぬ大病をされたがすでにお元気。「末吉」のみくじは楽しいもの。

楼門の奥に寒梅咲きそめし

理髪屋にゐて鈴虫を聞くことも

行商のいびつのトマトよかりけり

トマトもぐ單身赴任なりし頃

終りたる薔薇を惜しみてまだ剪らず

亀井 弘次

トマト二句。往時回想の句として、いかにも弘次さんらしい作である。若き日の單身赴任の頃に、庭に一畝のトマトを作っておられた由。行商のいびつなトマトに、今は遠いかの日を思い出す、これも俳句なのである。

ユーロなる通貨始まり年新た
花菜風北前船の出しことも
パソコンの星占や星まつり
烏賊舟の月の港を目指しをり
天命を信ず楷樹の冬紅葉

岸本 義生

新春より「ユーロ通貨」というこの素材は義生さんの
独壇場と言えよう。長年の商社マンとしての関心はいさ
さかも衰えることなく。北前船、烏賊舟の句には、俳句
への目差しが生き生きと感じられる。湯島聖堂の楷樹と
「天命」の語に、共感を覚えている。

ものなべてローランサンの春の色
夕影に消へなむとして郁子の花
桜鯛提げ末弟の神戸より
母許や井戸に吊せし真桑瓜
しぐれ雲彦左屋敷の跡あらず

北田 純一

一、二句目の繊細な感性に驚きながら、これが純一さん
というラガーマンの本質に違いないと肯っている。「末
弟・母許」の語に秘められた家族へのあたたかい思い。
お茶の水周辺吟行にて「大久保彦左」の屋敷跡に思いを
馳せる一面を持つ方なのである。

初めての杖持ち出づる冬桜
冬桜鳥打帽を手に持ちて
身ほとりの書籍の山と年越せり
年新たなり息災の余生得し
腰痛の少し良き日の福茶かな

玉山 和夫

海外旅行によく行かれるようであるが、作品の上では
「初めての杖持ち出づる」とあり、腰痛もあるような気配。
「書籍の山と年越し」という書斎人でもある。地味なそ
の作品の中に人柄がにじんでおり、なんとなく日々の生
活が窺える作品、として楽しい。

ゆるやかな坂を句会へ日脚伸ぶ
一呼吸の間に消えにけり春の雪
仕事着のまま花人となつてゐし
夏雲を映し田水の湧いてをり
福寿草離れ住みゐて家族なる

松下 九犀

最近参加された「若い方」である。実年齢のほどはまだ知らないが、話題は豊富且つ賑やかな方。これより新風を吹き込んで下さるものと期待は大きい。「仕事着のまま花人となつてゐし」という句に私は共鳴、共感した。ここにごく普通の作者の姿がある。

立春や饅頭に押す紅の点
包丁の持ち重りして桜鯛
ユリの木咲く新宿の空押し上げて
迷ひ来しことも楽しや薔薇匂ふ
道ひとつ違へて月の人となる

西川 知世

「俳句界」という俳句の総合誌に応募し(五十句)最終選に残った知世さんである。一位大賞は逸したものの、選考会の記事、経緯はまことにスリリングであった。知世さんの感性にもう一つプラスとなる何かが必要で、これからの課題であろう。

吉葉芳彦氏を偲ぶ

知性ある厚情の人

森田 茂

吉葉芳彦さんが二〇〇二年十二月十九日に他界された。七十一歳



吉葉 芳彦（よしば・よしひこ） 二〇〇二年十二月十九日、悪性胸膜炎に肺炎を併発し死去。七十一歳。一九三一年東京都文京区生まれ。一橋大学社会学部卒。出光興産入社、東海支店、横浜支店営業課長、東京本社販売部販売課長、釧路支店長を経て、東京本社総合計画室長、出光石油化学千葉副工場長、光神石油社長を歴任。一九九四年出光興産退職後、英知特許事務所相談役。

でした。昨年八月に胸部に違和感を覚えたために入院検査をしたところ、悪性胸膜炎と診断されて治療を続けられていたが、三ヵ月後に病状が急変して亡くなられた。私と彼とは半世紀にも及ぶ親友としての厚誼を頂き教示されることも少なくなかった。誠に残念でない。心よりお悔やみを申し上げます。

昔の名横綱の吉葉山の名付け親は彼の父上と聞いている。ご両親

やご兄弟にはお医者が多く、彼が十数年前に受けた胃の手術は兄上の執刀という。その後しばらくは昔の面影が消えるほど瘡せてしまったが、その後順調に回復していた。

彼は学生時代からテニスをやっており、県の代表にまでなった。胸幅もゆったりとして体格もよく、本当に健康そのものであった。私には彼とは入社（出光興産）同期であるが、現役時代は出世街道の先

頭に立って走っていた。最初に支店長になるなどの活躍ぶりは、同期生が目を見張るほどであった。また日頃からかなりの勉強家で、理路整然とした考えをもち、皆から尊敬されていたが、五十歳ごろになり無理の積み重ねにより体調

を落としてしまったのは残念ながらとであった。

一九九四年（平成六年）企業OBペンクラブに入会し、「本の紹介」をしたり「悠遊」への毎回の掲載のほか外部の雑誌への寄稿を行うなど活躍した。最近では昨

年の「プレジデント誌」正月号に載ったインタビュー記事のほかに座談会にも出るなど積極的であったが、昨年七月の月例会に出席されたのが最後となってしまった。

ここに心から重ねてご追悼申し上げたい。



川下への流れ……甲斐大泉

企業OBペンクラブのあゆみ

平成十四年（二〇〇二年）

年表（原則として敬称略）

一月例会（二十三日）

・入会 古川 幸雄

・各会員より「二〇〇二年の抱負」発表

・二〇〇二年の課題発表

・退会 三枝 亨

二月例会（二十日）

・ゲスト講演

塚本 康彦氏

「能の魅力」

・退会 角谷 朗宏

三月例会（二十日）

・会員講演

年史

一、新役員人事（任期二年）

会長 北田 純一

副会長（IT担当） 多田 修

副会長 藤岡 豊

副会長（運営委員長） 都甲 昌利

事務局長 中村 爽

運営委員長補佐 大野 晃

理事 金京 法一

幹事 児玉 忠雄

二、新年度の方針

クラブ発展を加速させるため、以下の課題の検討、実行を目指す。

（一）「電子出版」

（二）「ホームページ深化作戦」

北田 純一

「右肩下がりの経済学」

・本の紹介

遠藤 俊也 「大正天皇」

・退会 大澤章伸 寺井 精英 西川 知世(事務局)

四月例会(二十五日)

・入会 松下 洋一 松谷 隆 山内めぐみ(事務局)

・会員講演

橋本 政彦

「スカルノ、スハルト、そしてスカルノ・プトリ」

・本の紹介

北田 純一 「『豊かさ』はどこへ行くのか」

・退会 柴垣 復生 竹内 京一 八木 大介

細川 謙三

五月例会(二十二日)

・会員講演

三宅 劬

「有料老人ホーム」

・メイン／サテライト方式による個人ベースでの主張の場を確保。

・参加者の増加による集団のインパクト強化。

・コンテンツ／表現法研究グループの立ち上げ。

・同人誌ほかのサイバー版化企画。

・関連電子雑誌などのサイトとのネット化。

(三)「NPO化の調査研究開始」

三、会員数

新入会員は八名、退会者は物故者を含め十一名で

二〇〇二年末現在の会員数は八十八名となった。

四、出版・プロジェクト

(一) 同人誌「悠遊」第九号が三月二十日に発行された。(編集世話人 小島博志・石川正達)

(二) 電子雑誌「ベストライフ・オンライン」に「年金経済学」、「英語をどのように学んだか」、「世界の街角から」など会員作品に加えて、「サロン21」での会員座談会も「辛口シニア爆裂討論」として掲載。来年度にはさらに広い分野での長期連載作品が求められ、対応検討中。(プロマネ 北田純一・高橋孝蔵)

六月例会（十九日）

・ 会員講演

高橋 孝蔵

「インターネット社会」

七月例会（十八日）

・ 各会員より近況を報告、相互に意見の交換

八月例会（休み）

・ 入会 阿部 洋己

九月例会（十七日）

・ 入会 中村 将陸

・ ゲスト講演

加藤 栄氏

「日経マスターズ開発秘話」

十月例会（二十二日）

・ 会員講演

（三）「ベストライフ・オンライン」誌のサークルホームページに「世の中一口物知り帳」、「本の紹介」などを掲載。現在会員の自由投稿の場として活用。（プロマネ 多田修・杉山修二）

（四）「シニアライフ・プロジェクト」。「ベストライフ」誌に「健康」、「第二の人生」をテーマにした作品を掲載開始。新プロジェクトとして継続。（プロマネ 松谷隆・古川幸雄）

（五）小説研究会翻訳の玉山和夫、J・ナズリー共著「TALES OF JAPANESE SOLDIERS」がマネジメント社から「日本兵のはなし（ビルマ戦線―戦場の真実）」として、八月に刊行された。（プロマネ 玉山和夫）

（六）月刊誌「フジ・エアウェイズガイド」の旅行記欄に寄稿（プロマネ 杉浦右蔵・都甲昌利）

（七）新プロジェクト「外国で体験したトラブル」を発足。「ベストライフ」誌掲載を目指して原稿募集を開始。（プロマネ 松浦武弘）

（八）同人誌「悠遊」第十号は二〇〇三年三月発行予定。

松谷 隆

「きっかけはバブル」

十一月例会（十九日）

・入会 大庭 定男 前田 義寛

・ゲスト講演

中島 宏氏

「今後の中国の行方」

十二月例会（十八日）

・入会 安藤 晃二

・ゲスト講演

八尋 俊英氏

「ブロードバンド時代のコンテンツ流通」

・忘年パーティー

恒例の忘年パーティーを「代々木倶楽部」アゼ

リアで開催

・退会 本田 克夫 若林 龍夫

・計報

吉葉芳彦氏が十二月十九日逝去

五、ミーティング・勉強会

(一) 小説研究会（マネジャー 石川正達）

「日本兵のはなし」の翻訳出版を実現、成果を挙げた。これに続き、英国版ビルマ戦線記の翻訳を開始。加えて次年度の「ベストライフ」誌の長期連載プロジェクトの企画にも取り組んだ。

(二) 英語を読もう会（マネジャー 村田幸四郎）

昨年四月よりスタート。年度末までに二十一回を重ねた。英語の読解力に加え、より正確な訳文を学ぶことで文章力向上にも寄与している。

(三) 何でも書こう会（マネジャー 新山章一郎）

会員相互の批評、討議による文章修業に加えて、「シニアライフ・プロジェクト」への投稿事前スクリーニング機能の役割を果たしている。

(四) サロン21C（マネジャー 金京法二）

本年は「象徴としての国家元首」、「イギリス」、「現代の戦争」、「アメリカの文化」、「現代の資本主義」、「現代日本の教育」など、幅広いテーマにつき活発な議論が展開された。会員相互の

知的交流の場として定着している。

(五) IT勉強会(マネジャー 多田修)

インターネット・Eメールを利用する登録会員数は全会員の六割に達し、月例会通知のEメール配信を六月から開始。電子雑誌への寄稿もメールが主体となる状況下でパソコン操作の実用的勉強がなされた。「ウィルス対策」、「メール通信技術」、「添付ファイル通信」、「ホームページ」、「ワード上の校閲」、「ページ設定」、「拡張子」などのテーマを研究。

(六) 俳句教室

平間真木子先生の指導のもとに会員相互の熱心な研鑽が続けられた。

(七) 短歌サロン

一月をもって中断とした。

六、会員ニュース

・杉山修一はサロン・ド・ジュディ展に出品(一月・七月)

・新井進は新日本美術院マスターズ大東京展(五月)、新院展(十一月)に出品

・大野暲は読売文化センター開催の横浜歴史散歩講座で「横浜ゆかりの財界人―益田孝と原三溪」の題目で講演（五月）

・宇野存は住友信託銀行公募のエッセイ「六十歳のラブレター」で金賞を受賞、作品がNHK・FMで放送された（五月）。NHK出版局から出版

・上原利夫は「週刊エコノミスト」十月八日号に論文「社内倫理規定はなぜ機能しないか」を発表

・杉山修一、岸本義正、大野暲は季刊誌「ロゼッタストーン」初冬号「男と女」シリーズに寄稿（十一月）

・新井進（文殊谷康之）は武正市の「渡辺洪其没後百年記念展」で講演（十一月）、二〇〇三年一月から「日刊県民福井」に渡辺洪基を題材とする小説を連載

七、その他

・月刊「日経マスターズ」九月号に「長続きするネットワーク」として当クラブが紹介された。

・月刊「致知」二〇〇三年一月号に北田会長の随想が掲載された。

八、まとめ

今年も相変わらずの経済不況で、出版業界でも多くの企業が「泥濘の中」で進退きわまる状況にあると聞いた。更にこのＩＴ時代、「紙の本」から「ネットの本」への移行が次第に現実となりつつある。当クラブにとっても厳しい環境が続き、対外発信の場が狭まると共に、作品の内容と質がますます問われるようになってきた。この中であって、われわれは積極的にプロジェクトを推進し、活発な勉強会活動により力を蓄えた。昨年度から続けてきた電子雑誌への寄稿、掲載は着実に成果を挙げ、来年度にはその拡大を要請されている。クラブ初の翻訳出版も実現できた。来る年の発展が期待される。

執筆者名簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
芦刈 克	住友生命 ニッコン	1931
アブドルカーダー栄子	日本語教師	1933
新井 進	伊藤忠商事	1931
安藤 晃二	三菱商事	1940
池田 耕治	第一勧業銀行	1927
石川 正達	毎日新聞社	1921
今川 確郎	兼松	1926
今村 亮	京セラインターナショナル	1931
岩崎洋一郎	三菱レイヨン	1929
上原 利夫	住友商事	1934
榎本喜三郎	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	東京銀行 丸紅	1924
大泉 潤	三菱化学	1936
大塚 滋	国鉄	1929
大野 晃	三井物産	1933
岡 政昭	東京銀行 N B D	1926
折戸 常司	三井物産	1925
亀井 弘次	キリンビール	1928
岸本 義生	兼松	1927
北田 純一	三菱商事	1928
木下 洋介	文化放送	1933
金京 法一	三菱商事 三菱総研	1933
黒崎 昭二	新日鉄	1927
小島 博志	毎日新聞社	1931
斉藤 勁	呉羽化学	1925
杉浦 右藏	N T T 三菱電線工業	1932
杉山 修一	東芝	1930
関谷 裕彦	ローヤル・ネドロイド・ラインズ	1932
高橋 孝蔵	丸紅 松竹	1936
多田 修	横河電機	1929
玉山 和夫	通産省 日英協会	1919
都甲 昌利	日本航空	1933

氏 名 (カッコ内は本名)		出 身 会 社	生 年
刀祢館正久	とねだち まさひさ	朝日新聞社	1927
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929
中洲 靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
中村 爽	なかむら そう	日本工営	1933
中村 将陸	なかむら まさみち	富士通	1936
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米軍海軍基地統合人事	1930
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空	1937
西島 力	にしじま つとむ	住友商事	1930
野村 嘉彦	のむら よしひこ	三井物産	1917
平間真木子	ひらま まきこ	日本機械輸入協会	1925
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事	1932
古川さちお(幸雄)	ふるかわ さちお	石川島播磨	1932
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事	1939
松下九犀(洋一)	まつした きゅうさい(よういち)	富士通	1936
松谷 隆	まつたに たかし	富士通	1940
水谷 汎	みずたに ひろし	満鉄 友愛信用組合	1917
三宅 劭	みやけ たかし	信越化学	1927
村田孝四郎	むらた こうしろう	新日鉄	1934
森田 茂	もりた しげる	出光興産	1930
山辺 武磨	やまべ たけまる	伊藤忠商事	1919
吉井米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産	1926
吉寄 清巳	よしざき きよみ	関西ペイント	1925
西川 知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948
山内めぐみ	やまのうち めぐみ	企業OBペンクラブ事務局	1955

「悠遊」は十号を迎え、特集、自由テーマ各二十五編、計五十編の投稿がありました。特集「ここがおかしい」には戦争への道をひた走るアメリカへの批判が目立ちます。「九・一一事件」以降、アメリカは世界政策を一変、ブッシュ大統領が「国益のためなら先制攻撃も辞さず」と演説する時代です。小国が追い詰められ大国に刃向かうためなら分らないわけではありませんが、大国が小国へでは、もう「侵略」ですね。

昨年一年間に、十人の先輩会員が退会され、九人の新人会員を迎えました。そして積極的に力作を寄せられたのは、うれしい限りです。今号は表紙、中扉、本文中の挿絵まで杉山修一さんのお世話になりました。これまでの新井進さん、吉井米三郎さんの労苦ともども、厚く御礼申し上げます。

選者の退会で短歌欄がなくなったのが、少し寂しい気がします。

編集世話人 小島 博志

石川 正達

事務局から

山内 めぐみ

去年の四月より企業OBペンクラブの事務局の仕事を引き継ぎました。前任の西川知世さんからの引き継ぎは、毎月何回かはお電話で、そして二カ月に一回はワープロと書類を携えて直接ご自宅に伺い、教えを乞うりました。これから、皆さまのお手元に「悠遊」をお届けして、新しい名簿の作成に入ると、ちょうど一年の仕事を引き継いだことになります。

初めての事務の仕事に戸惑いながらも、西川さんの的確なご指導と、理事・会員の皆さまの温かいご理解に支えられて、なんとかここまで辿りつくことができました。いろいろなことのあった一年ですが、十二月には会員の吉業さまがお亡くなりになるという悲しい出来事がありました。仕事を始めたころ、月例会の講演で熱心にメモを取っていられるお姿が印象的でした。心よりご冥福をお祈りいたします。私は皆さまのお役に立てるようにと、心を新たにいたしております。

